

## 少年探偵団（江戸川乱歩）

### 黒い魔物

そいつは全身、墨を塗ったような、おそろしくまっ黒なやつだということでした。

「黒い魔物」のうわさは、もう、東京中にひろがっていましたけれど、ふしぎにも、はつきり、そいつの正体を見きわめた人は、だれもありませんでした。

そいつは、暗やみの中へしか姿をあらわしませんので、何かしら、やみの中に、やみと同じ色のものが、もやもやと、うごめいていることはわかって、それがどんな男であるか、あるいは女であるか、おとななのか子どもなのかさえ、はつきりとはわからないのだということです。

あるさびしいやしき町の夜番のおじさんが、長い黒板塀くろいたんばいの前を、例のひょうし木をたたきながら歩いていきますと、その黒板塀の一部分が、ちぎれでもしたように、板塀とまったく同じ色をした人間のようなものが、ヒョロヒョロと道のまんなかへ姿をあらわし、おじさんのちょうちんの前で、まっ白な歯をむきだして、ケラケラと笑ったかと思うと、サーツと黒い風のように、どこかへ走りさってしまったということでした。

夜番のおじさんは、朝になって、みんなにそのことを話して聞かせましたが、そいつの姿が、あまりまっ黒なものですから、まるで白い歯ばかりが宙にういて笑っているようで、あんなきみの

悪いことはなかったと、まだ青い顔をして、さも、おそろしそうに、ソツと、うしろをふりむきながら、話すのでした。

あるやみの晩に、隅田川すみだがわをくだっていたひとりの船頭が、自分の船のそばにみような波がたっているのに気づきました。

星もないやみ夜のこと、川水は墨のようにまっ黒でした。ただ櫓うしが水を切ること、うす白い波がたつばかりです。ところが、その櫓の波とはべつに、船はたにたえず、ふしぎな白波がたっていたではありませんか。

まるで人が泳いでいるような波でした。しかし、ただ、そういう形の波が見えるばかりで、人間の姿は、少しも目にとまらないのです。

船頭は、あまりのふしぎさに、ゾーツと背すじへ水をあびせられたような気がしたといいます。でも、やせがまんをだして、大きな声で、その姿の見えない泳ぎ手に、どなりつけたということです。

「オーイ、そこに泳いでいるのは、だれだつ。」

すると、水をかくような白い波がちよつと止まって、ちよつど、その目に見えないやつの顔のあるへんに、白いものがあらわれたといいます。

よく見ると、その白いものは人間の前歯でした。白い前歯だけが、黒い水の上にフワフワとただよって、ケラケラと、例のぶきみな声で笑いだしたということです。

船頭は、あまりのおそろしさに、もうむがむちゅうで、あとをも見ずに船をこいで逃げだしたということです。

また、こんなおかしな話もありました。

ある月の美しい晩、上野公園の広っぱにたたずんで、月をながめていた、ひとりの大学生が、ふと気がつく、足もとの地面に、自分の影が黒々とうつっているのですが、みょうなことに、その影が少しも動かないのです。いくら首をふったり、手を動かしたりしても、影のほうは、じっとしていて身動きもしないのです。大学生は、だんだんきみが悪くなってきました。影だけが死んでしまつて動かないなんて、考えてみればおそろしいことです。もしや自分は気でもちがつたのではあるまいかと、もうじつとしていられなくなって、大学生は、いきなり歩きはじめたといま

すと、ああ、どうしたというのでしょうか、影はやつぱり動かないのです。大学生が、そこから三メートル、五メートルとはなれていっても、影だけは少しも動かず、もとの地面に、よこたわっているのです。

大学生は、あまりのぶきみに、立ちすくんでしまいました。そして、いくら見まいとしても、きみが悪ければ悪いほど、かえつてその影を、じつと見つめないではいられませんでした。

ところが、そうして見つめているうちに、もつとおそろしいことがおこつたのです。その影の顔のまんなか、とつぜん、パツクリとわれたように白くなって、つまり影が口をひらいて、白い歯をみせたのですが、そして、例のケラケラという笑い声が聞こえてきたのです。

みなさん、自分の影が歯をむきだして笑つたところを想像してごらん下さい。世の中にこんなきみの悪いことがあるでしょうか。

さすがの大学生も、アツとさけんで、あとをも見ずに逃げだし

たということでした。

それがやつぱり、例の黒い魔物だったのです。あとで考えてみますと、大学生は月に向かつていたのですから、影はうしろにあるはずなのを、目の前に、黒々と人の姿がよこたわつていたものですから、つい、わが影と思ひあやまつてしまつたのです。そういうふうにして、黒い魔物のうわさは、日一日と高くなっていきました。

やみの中からとびだしてきて、通行人の首をしめようとしたとか、夜、子どもがひとり歩いていけると、まるで黒いふろしきのように子どもをつつんで、地面をコロコロころがっていつてしまつとか、種々さまざまのうわさが伝えられ、怪談は怪談をうんで、若い娘さんや、小さい子どもなどは、もうおびえあがつてしまつて、けつして夜は外出しないほどになってきました。

この魔物は、むかしの童話にある、かくれみんを持っているのと同じことでした。かくれみんというのは、一度そのみのを身につけますと、人の姿がかき消すように見えなくなって、人中で何をしようと思うがまま、どんな悪いことをしても、とらえられる気づかいがないという、ちようほうな魔法なのですが、黒い魔物は、それと同じように、やみのなかにとけこんで、人目をくらますことができるのです。

インド人や南洋の土人の黒さは、ほんとうの黒さではありません。その魔物のからだは、どんな濃い墨よりも、もつと黒く、黒さが絶頂にたつして、ついに人の目にも見えぬほどになっているのにちがいありません。

黒い魔物は、やみの中や、黒い背景の前では、忍術使いも同様

です。どんないたずらも思うがままです。もしそいつが、何かおそろしい悪事をたくらんだならどうでしょう。悪いことをしておいて、とらえられそうになったら、いきなり、やみの中へとけこんで、姿を消してしまえばいいのですから、こんなやさしいことはありません。また、とらえるほうにしてみれば、こんなこまった相手はないのです。

黒い魔物とは、はたして何者でしょうか。男でしょうか、女でしょうか、おとなでしょうか、子どもでしょうか。そしてまた、このえたいのしれぬ黒い影法師は、いったい何をしようというのでしょうか。ただ黒板塀からとびだしたり、黒い水の中を泳いだり、人の影になって地面によこたわったりする、むじやきないたずらをして喜んでいただけでしょうか。いやいや、そうではありません。まい。きやつは、何かしら、とほうもない悪事をたくらんでいるのにちがひありません。いったいぜんたい、どのような悪事をはたらこうというのでしょうか。

この悪魔を向こうにまわしてたたかうものは、小林少年を団長とする少年探偵団です。十人の勇敢な小学生によって組織せられた少年探偵団、団長は明智探偵の名助手として知られた小林芳雄少年、その小林少年の先生は、いうまでもなく大探偵明智小五郎です。

日本一の私立名探偵と、その配下の少年探偵団、相手は、お化けのような変幻自在の黒怪物、ああ、このたたかひが、どのよう

にたたかわれることでしょうか。

やみと同じ色をした怪物が、東京都のそこに姿をあらわして、やみの中で、白い歯をむいてケラケラ笑うという、うすきみの悪いうわさが、たちまち東京中にひろがり、新聞にも大きくのるようになりました。

年とつた人たちは、きつと魔性のものがいたずらをしているのだ、お化けにちがいないと、さもき悪そうにうわさしあいました。若人たちは、お化けなぞを信じる気にはなれませんでした。それはやっぱり人間にきまつている。どこかのばかなやつが、そんなとほうもないまねをして、おもしろがっているのだろうと考えていました。

ところが、日がたつにつれて、お化けにもせよ、人間にもせよ、その黒いやつは、ただいたずらをしているばかりではない、何かしらおそろしい悪事をたくらんでいるにちがひないということが、だんだんわかってきたのです。

あとになって考えてみますと、この黒い怪物の出現は、じつに異常な犯罪事件のいとぐちとなつたのでした。できごとは東京を中心におこつたのですが、それに関係している人物は、日本人ばかりではなく、いわば国際的な犯罪事件でした。

では、これから、黒い魔物のいたずらが、だんだん犯罪らしい形にかわっていくできごとを、順序をおつてお話ししましょう。

読者諸君がよくご承知の、小林少年を団長にいただく少年探偵団の中に、桂正一君という少年がいました。桂君のおうちは、世田谷区の玉川電車の沿線にあつて、羽柴壮二君たちの学校とはちがいましたけれども、正一君と壮二君とはいとごどうしだもの

ですから、壮二君にさそわれて少年探偵団にくわったのです。

桂君は、自分が探偵団にはいっただけでなく、やはり玉川電車たまがわの沿線におうちのある、級友の篠崎しのざきはじめ始君をさそって、ふたりで仲間入りをしたのです。

ある晩のこと、桂正一君は、電車一駅ほどへだたったところにある、篠崎君のおうちをたずねて、篠崎君の勉強部屋で、いっしょに宿題をといたり、お話をしたりして、八時ごろまで遊んでいましたが、それから、おうちに帰る途中で、おそろしいものに出あってしまったのです。

もし、おくびような少年でしたら、少しまわり道をして表通りを歩くのですけれど、桂君は学校では少年相撲すもうの選手をしているほどで、腕におぼえのある豪胆ごうたんな少年でしたから、裏通りの近道を、テクテクと歩いていきました。

両がわは長い板塀や、コンクリート塀や、いけがきばかりで、街燈もほの暗く、夜ふけでもないのに、まったく人通りもないさびしさです。

春のことでしたから、気候はちつとも寒くないのですが、そうして、まるで死にたえたような夜の町を歩いていきますと、なんとなく首すじのところ、ゾクゾクとうそ寒く感じられます。

一つのまがりかどをまがって、ヒョイと前を見ますと、二十メートルほど向こうの街燈の下を、黒い人影が歩いていきます。それが、おかしなことには、帽子もかぶらず、着物も着ていない。そのくせ、頭のとっぺんから足の先まで、墨のようにまっ黒な人の姿です。

さすがの桂少年も、この異様な人影をひと目見ると、ゾーツと

して立ちすくんでしまいました。

「あいつかもしれない、うわさの高い黒い魔物かもしれない。」心臓がドキドキと鳴ってきました。背すじを氷のようにつめたものが、スーッと走りました。桂君はもう少しのことで、いちもくさんにうしろへ逃げだすところでした。しかし、逃げなかったのです。やつとのことでふみとどまったのです。

桂君は、自分が名誉ある少年探偵団の一員であることを、思いだしました。しかも、たった今、篠崎君の家で、黒い魔物の話をして、

「ぼくが、もしそいつに出あったら、正体を見あらわしてやるんだがなあ。」

と、大きなことをいつてきたばかりです。

桂君は少年探偵団のことを考えると、にわかに勇気がでてきました。

いけがきのかげに身をかくして、じつと見ていきますと、怪物は、うしろに人がいるとは少しも気のつかぬようすで、ヒョコヒョコおどるように歩いていきます。見まちがいではありません。たしかに全身まっ黒な、まるで黒ネコみたいな人の姿です。

「やっぱりお化けや幽霊じゃないんだ。ああして歩いてるところを見ると、人間にちがいない。」

桂君は、大胆にも、相手にさとられぬよう、ソツとあとをつけてやろうと決心しました。

怪物は、まるで地面の影が、フラフラと立ちあがって、そのまま歩きたたような感じで、グングンと遠ざかっていきます。おそろしく早い足です。桂君は、物かげへ物かげへと身をかくしな

がら、相手を追っかけるのが、やっとでした。

町をはなれ、人気のない広っぱを少し行きますと、大きな寺のお堂が、星空にお化けのようにそびえて見えました。養源寺という江戸時代からの古いお寺です。

黒い魔物は、その養源寺のいけがきに沿って、ヒョコヒョコと歩いていましたが、やがて、いけがきのやぶれたところから、お堂の裏手へはいってしまいました。

桂君は、だんだんきみが悪くなってきましたけれども、今さら尾行をよすのはさんねんですから、両手をにぎりしめ、下腹にグツと力を入れて、同じいけがきのやぶれから、暗やみの寺内へとしのびこみました。

見ると、そこは一面の墓地でした。古いのや新しいのや、無数の石碑が、ジメジメとこけむした地面に、ところせまく立ちならんでいます。空の星と、常夜灯のほのかな光に、それらの長方形の石が、うす白くうかんでいるのです。

桂君は怪談などを信じない現代の少年でしたけれど、そこが無数の死がいをうずめた墓地であることを知ると、ゾツとしないではいられませんでした。

怪物は、石碑と石碑のあいだのせまい通路を、右にまがり左にまがり、まるで案内を知ったわが家のように、グングンと中へはいっていきます。黒い影が白い石碑を背景にして、いっそうクツキリとうきあがって見えるのです。

桂君は、全身にビッシヨリ冷や汗をかきながら、がまん強くそのあとを追いました。さいわい、こちらは背が低いものですから、石碑の陰に身をかくして、チヨコチヨコと走り、ときどき背のび

をして、相手を見うしなわれないようにすればよいのでした。

ところで、桂君が、そうして、何度めかに背のびをしたときで、びっくりしたときには、思いもよらぬ間近に、石碑を二つほどへだてたすぐ向こうに、黒いやつが、ヌツと立っていたではありませんか。しかも、真正面にこちらを向いているのです。まっ黒な顔の中に、白い目と白い歯とが見えるからには、こちらを向いているのにちがいません。

怪物はさいぜんから、ちゃんと尾行を気づいていたのです。そして、わざとこんなさびしい墓地の中へ、おびきよせて、いよいよたたかいをいどもうとするのかもしれない。

桂少年は、まるでネコの前のネズミのように、からだがつくんでしまつて、目をそらすこともできず、そのまっ黒な影法師みたいなやつと、じつと、顔を見あわせていました。胸の中では、心臓がやぶれそうに鼓動しています。

今にも、今にも、とびかかってくるかと、観念をしていますと、とつぜん、怪物の白い歯がグーツと左右にひろがつて、それがガクンと上下にわかれ、ケラケラケラ……と、怪鳥のような声で笑いだしました。

桂君は何が何だか、もうむがむちゅうでした。おそろしい夢をみて、夢と知りながら、どうしても、目がさませないときと同じ気持で、「助けてくれー。」とさけぼうにも、まるでおしになったように、声が出ないのです。

ところが、怪物のほうでは、べつにとびかかってくるでもなく、いやな笑い声をたてたまま、フイと石碑のかげに、身をかくしてしまいました。

かくれておいて、またバアとあらわれるのではないかと、立ちすくんだまま、息を殺していても、いつまで待っても、ふたたびあらわれるようがありません。と、いって、その石碑の向こうから立ちさったけはいもありません。もしその場を動けば、石碑と石碑のあいだに、チロチロと黒い影が見えなければなりません。深い海の底のように静まりかえった墓地に、たったひとり、とりのこされた感じです。どちらを向いても動くものとはなく、つめたい石ばかり、桂君は、夢に夢みるこちでした。



やっと気をとりなおして、さいぜんまで怪物が立っていた石碑の向こうへ、オズオズと近づいてみますと、そこはもうからっぽになって、人のけはいなどありません。念のために、そのへんをくまなく歩きまわってみても、どこにも黒い人の姿はないのです。たとえ地面をはっていったとしても、その場所を動けば、こち

らの目にうつらぬはずはないのに、それが少しも見えなかったというのは、ふしぎでしかたがありません。あの怪物は西洋の悪魔が、パツと煙をだして、姿を消してしまうように、空中に消えさせたしか考えられません。

「あいつは、やっぱりお化けだったのかしら。」

ふと、そう思うと、桂君は、がまんがまんをしていた恐怖心が、腹の底からこみあげてきて、何かえたいのしれぬことをわめきながら、むがむちゅうで墓地をとびだすと、息もたえだえに、明るい町のほうへかけだしました。

桂少年は、怪物は墓地の中で、煙のように消えてしまったということを、のちのちまでもかたく信じていました。

しかし、そんなことがあるものでしょうか。もし黒い魔物が人間だとすれば、空気の中へとけこんでしまうなんて、まったく考えられないことはありませんか。

人さらい

墓地のできごとがあつてから二日の後、やっぱり夜の八時ごろ、篠崎始君のおうちの、りっぱなご門から、三十歳ぐらいの上品な婦人と、五つぐらいのかわいらしい洋装の女の子とが、出てきました。婦人は始君のおばさん、女の子は小さいいとこですが、ふたりは夕方から篠崎君のおうちへ遊びに来ていて、今、帰るところなのです。

おばさんは、大通りへ出て自動車をひろうつもりで、女の子の手を引いて、うす暗いやしき町を、急ぎ足に歩いていきました。

すると、またしても、ふたりのうしろから、例の黒い影があらわれたのです。

怪物は扉から扉へと伝わって、足音もなく、少しずつ、少しずつ、ふたりに近づいていき、一メートルばかりの近さになったかと思うと、いきなり、かわいらしい女の子にとびかかって、小わきにかかえてしまいました。

「アレ、なにをなさるんです。」

婦人はびっくりして、相手にすがりつこうとしましたが、黒い影は、すばやく片足をあげて、婦人をけたおし、その上にのしかかるようにして、あの白い歯をむきだし、ケラケラケラ……と笑いました。

婦人はたおれながら、はじめて相手の姿を見ました。そして、うわさに聞く黒い怪物だということがわかると、あまりのおそろしさに、アツとさげんだまま、地面にうつぶしてしまいました。

そのあいだに、怪物は女の子をつれて、どこかへ走りさってしまつたのですが、では、黒い怪物は、おそろしい人さらいだったのかといえますと、べつにそうでもなかったことが、その夜ふけになってわかりました。

もう十一時ごろでしたが、篠崎君のおうちから一キロほどはなれた、やっぱり玉川電車ぞいの、あるさびしいやしき町を、一人のおまわりさんが、コツコツと巡回していますと、人通りもない道のまんなかに、五つぐらいの女の子が、シクシク泣きながらたたずんでいるのに出あいました。それがさいぜん黒い怪物にさらわれた、篠崎君の小さいいとごだったのです。

まだ幼い子どもですから、おまわりさんがいろいろたずねても、

何一つはっきり答えることはできませんでしたが、片言まじりのことばを、つなぎあわせて判断してみますと、黒い怪物は、子どもをさらって、どこかさびしい広っぱへつれていき、お菓子などをあたえて、ごきげんをとりながら、名まえをたずねたらしいのですが、「木村サチ子」と、おかあさんに教えられているとおり答えますと、怪物は、きゆうにあらあらしくなって、サチ子さんをそこへすておいたまま、どこかへ行ってしまったというのでした。

どうも、前後のようすから、怪物は、人ちがいをしたとしか考えられません。だれでもいいから、子どもをさらおうというのではなくて、あるきまつた人をねらって、つい人ちがいをしたらしく思われるのです。では、いったい、だれと人ちがいをしたのでしょうか。

その翌日には、矢つぎばやに、またしても、こんなさわぎがおこりました。

場所はやっぱり篠崎君のおうちの前でした。こんどは夜ではなくて、まっ昼間のことですが、ちょうど門の前で、近所の四つか五つぐらいの女の子が、たったひとりで遊んでいるところへ、チンドン屋の行列が通りかかりました。

丹下左膳たんげさせんの扮装ふんそうをして、大きな太鼓たいこを胸むねにぶらさげた男を先頭に、若い洋装の女のしゃみせんひき、シルク・ハットにえんび服のピラくばり、はっぴ姿の旗持ちなどが、一列にならんで、音楽にあわせ、おしりをふりながら歩いてきます。

その行列のいちばんうしろから、白と赤とのだんだら染めのダブダブの道化服を着て、先に鈴のついたとんがり帽子をかぶり、

顔には西洋人みたいな道化のお面をつけた男が、フラフラとついてきました。が、篠崎家の門前の女の子を見ますと、おどけた様子で、手まねきをしてみました。

女の子は快活な性質とみえて、まねかれるままに、にこにこしながら、道化服の男のそばへかけよりました。

すると、道化服は、

「これあげましょう。」

といいながら、手に持っていた美しいあめん棒を、女の子の手ににぎらせました。

「もっと、どっさりあげますから、こちらへいらっしやい。」

道化服はそんなことをいいながら、女の子の手を引いて、グングン歩いていきます。子どもは、美しいお菓子ほしさにつられて、手を引かれるままに、ついていくのです。

ところが、そして百メートルほど歩いたとき、道化服の男は、とつぜん、チンドン屋の列をはなれて、女の子をつれたまま、さびしい横町へまがってしまいました。チンドン屋の人たちは、べつにそれをあやしむようすもなく、まっすぐに歩いていくのです。

道化服は、横町へまがると、グングン足をはやめて、女の子を、ちかくの神社の森の中へつれこみました。

「おじちゃん、どこ行くの?」

女の子は、人影もない森の中を見まわしながら、まだ、それとも気づかず、むじやきにたずねるのです。

「いいところです。お菓子や、お人形のどっさりある、いいところです。」

道化服の男は、東京の人ではないらしく、みょうにくせのある

なまりで、「こと」こと、くぎりながら、いいにくそうにいいました。

「お嬢さん、名まえいってごらんさい。なんという名まえですか。」

「あたり、タアちゃんよ。」

女の子は、あどけなく答えます。

「もっとほんとうの名まえは? おとうさまの名は?」

「ミヤモトっていうの。」

「宮本? ほんとうですか、篠崎ではないのですか。」

「ちがうわ。ミヤモトよ。」

「では、さつき遊んでいたうち、お嬢さんのうちではないのですか。」

「ええ、ちがうわ。あたちのうち、もっと小さいの。」

それだけ聞くと、道化服の男は、いきなりタアちゃんの手をはなして、お面の中で、「チエツ。」と舌打ちをしました。そして、もう一こともものをいわないで、女の子を森の中へおいてけぼりにして、サツサとどこかへたちさつてしまいました。

やがて、その奇妙なできごとは、タアちゃんという女の子が、泣きながら帰ってきて、母親に告げましたので、町中のうわさとなり、警察の耳にもはまりました。幼い女の子の報告ですから、森の中の問答もんどうがくわしくわかったわけではありませんが、道化服のチンドン屋が、タアちゃんをつれさろうとして、中途でよしてしまつたらしいことだけは、おぼろげながらわかりました。前夜の黒い魔物と同じやり方です。いよいよ、だれかしら、五つぐらいの女の子がねらわれていることが、はっきりしてきました。

五つぐらいの女の子といえば、篠崎始君にも、ちょうどその年ごろの、かわいらしい妹があるのです。もしや怪物がねらっているのは、その篠崎家の女の子ではありませんまいか、前後の事情を考えあわせると、どうもそうらしく思われるではありませんか。

隅田川だとか、上野の森だとか、東京中のどこにでも、あのぶきみな姿をあらわして、いたずらをしていた黒い影は、だんだんそのあらわれる場所をせばめてきました。

桂正一君が出あった場所といい、篠崎君の小さいいところがさらわれた場所といい、こんどはまた、タアちゃんがつれさられようとした場所といい、みんな篠崎君のおうちを中心としているのです。

怪物の目的がなんであるかが、少しずつわかってきました。しかし、ただ子どもをさらったり、その子の人質にしてお金をゆすったりするのでしたら、何も黒い影なんか化けて、人をおどかすことはありません。これには何か、もっともつと深いたくらみがあるのにちがいないのです。

### のろいの宝石

さて、門の前に遊んでいた女の子がさらわれた、その夜のことです。篠崎始君のおとうさまは、ひじょうに心配そうなごようすで、顔色も青ざめて、おかあさまと始君とを、ソツと、奥の座敷へお呼びになりました。

始君は、おとうさまの、こんなうちしずまれたごようすを、あとにも先にも見たことがありませんでした。

「いったい、どうなすったのだろう。なにごとがおこったのだろう。」

と、おかあさまも始君も、気がかりで胸がドキドキするほどでした。

おとうさまは座敷の床の間の前に、腕組みをしてすわっておいでになります。その床の間には、いつも花びんのおいてある紫檀の台の上に、今夜はみょうなものがおいてあるのです。

内がわを紫色のビロードではりつめた四角な箱の中に、おそろしいほどピカピカ光る、直径一センチほどの玉がはいっています。

始君は、こんな美しい宝石が、おうちにあることを、今まで少しも知りませんでした。

「わたしはまだ、おまえたちに、この宝石にまつわる、おそろしいのろいの話をしたことがなかったね。わたしは、そんな話を信じていなかった。つまらない話を聞かせて、おまえたちを心配させることはないと思つて、きょうまでだまつていたのだ。

けれども、もう、おまえたちにかくしておくことができなくなつた。ゆうべからの少女誘かいさわざは、どうもただごとではないように思う。わたしたちは、用心しなければならぬのだ。」

おとうさまは、うちしずんだ声で、何かひじょうに重大なことを、お話になろうとするようすでした。

「では、この宝石と、ゆうべからの事件とのあいだに、何か関係があるとおっしゃるのでございますか。」

おかあさまも、おとうさまと同じように青ざめてしまって、息を殺すようにしておたずねになりました。

「そうだよ。この宝石には、おそろしいのろいがつきまどつてい

なのだ。その話がでたらめでないことがわかってきたのだ。

おまえも知っているように、この宝石は、一昨年、中国へ行った時、上海シャンハイである外国人から買いつつたものだが、その値段がひどくやすかった。時価の十分の一にもたらない、五万七千円という値段であった。

わたしは、たいへんなほりだしものをしてと思って、喜んでいたので、あとになって、別のある外国人がソツとわたしに教えてくれたところによると、この石には、みょうないんねん話があるって、その事情を知っているものは、だれも買おうとしないものだったから、それで、こんなやすい値段で、手ばなすことになったのだからというのだ。

そのいんねん話というのはね……。」

おとうさまは、ちょっとことばを切つて、ふたりにもつとそばへよるようと、手まねきをなさいました。

始君は、少しおとうさまのほうへひざを進めました、なんだかおそろしい怪談を聞くような気がして、背中のほうがうそ寒くなってきました。気のせいか、いつも明るい電灯が、今夜は、みようにうす暗く感じられます。

「この宝石は、もとはインドの奥地にある、ある古いお寺のご本尊ほんぞんの、大きな仏像のひたいにはめこんであったものだそうだ。始は学校で教わったことがあるだろう、白毫びやくごうというものだ。

ことのおこりは、今から百年もまえの話だが、そのお寺の付近に戦争があつて、お寺は焼けてしまつし、たくさんの人が死んだ。そのとき、仏像の顔にはめこんであった宝石を、敵が持つていつてしまったんだね。それから、宝石はいろいろな人の手にわたつ

て、ヨーロッパのほうへ買いとられていった。ひじょうにneauちのある宝石だから、だれでも高い代価で買いとるのだね。

また、その戦争のときに、その部落の殿さまのお姫さまが、敵のたまにあたつて死んでしまった。まだ若いきれいなお姫さまだったそうだが、殿さまが、たいへんかわいがつておいでになつたばかりでなく、その部落のインド人は、このお姫さまを神さまのようになつてしまった。そのだいいじのお方が、敵のたまにあたつて、はかなく死んでしまった。

部落のインド人たちは、この二つの悲しいできごとを、いつまでもわすれなかつた。仏像の命ともいふべき白毫をうばいかえさなければならぬ。お姫さまのあだを討たなければならぬ。その二つのことが、一つにむすびついて、この宝石につきまとうのろいとなつたのだ。

それはインド中でもいちばん信仰のあつた部落で、部落中のものが、その仏像を気ちがいのように信じ、うやまつていたということだ。仏さまのためには、どんな艱難かんなん辛苦しんくもいとわぬ、命なんかいつでもすてるという気風きふうなんだ。

そこで、たいせつな仏像をけがし、殿さまの娘の命をうばつた外国人の軍人を、仏さまになりかわつてばつすることが決議され、部落を代表して、おそろしい魔術を使う命知らずの、ふたりのインド人が、敵をさがして世界中を旅して歩くことになつた。

そのふたりが病死すれば、また別の若い男が派遣される。そして、何十年でも、何百年でも、宝石をもとの仏像のひたいにもどすまでは、このろいはとけないというのだ。

それ以来、この宝石を持つているものは、たえずまっ黒なやつ

にねらわれている。ことにその家に幼い女の子があるときは、お姫さまのあだ討ちだというので、まず女の子をさらって行って、人知れず殺してしまふ。その死体は、どんなに警察がさがしても、発見することができないということだ。

わたしが上海である外国人に聞いたいんねん話というのは、まあこんなふうなことだったがね、むろん、わたしは信用しなかった。そんなばかなことがあるものか、これはきつと、話をした外国人も宝石をほしがっていたのに、わたしが先に買ってしまったので、根もない怪談を話して聞かせ、わたしから宝石を元値もとねで買いとる気にちがいないと思った。そして、わたしは、つい近ごろまで、そんな話はすっかりわすれてしまっていた。

ところが、ゆうべもきょうも、わたしたちの家を中心として、幼い女の子がさらわれたのを見ると、また、そのさらったやつが、まっ黒な怪物だったということを思いあわせると、わたしは、どうやら、きみが悪くなってきた。例のいんねん話とぴったり一致しているのだからね。」

「では、うちの緑みどりちゃんがさらわれるかもしれないと、おっしゃるのですか。」

おかあさまは、もうびっくりしてしまつて、今にも、緑ちゃんを守るために立ちあがろうとなすつたくらいです。緑ちゃんというのは、ことし五歳の始君の妹なのです。

「ウン、そうなのだよ。しかし、今は心配しなくてもいい。わたしたちがここにいれば、緑は安全なのだからね。ただ、これから後のちは、緑を外へ遊びに出さぬよう、家の中でもつねに目をなさないようにしてほしいのだよ。」

いかにも、おとうさまのおっしゃるとおり、緑ちゃんの遊んでいる部屋へは、この座敷を通らないでは行けないのです。それに、緑ちゃんのそばには、ばあややお手伝いさんがついてはいるはずですよ。

「でも、おとうさん、おかしいですね。そのインド人は、はじめに罪をおかしたそのときの外国人にだけ復しゆうすればいいじゃないませんか。それを今ごろになって、ぼくたちにあだをかえすなんて。」

始君は、どうもふにおちませんでした。

「ところが、そうではないのだよ。じつさい手をくだした罪人であるうとなかろうと、現在、宝石を持っているものに、のろいがかかるので、そのため、ヨーロッパでもいく人もめいわくをこうむった人があるのだよ。おそろしさのあまり病気になったり、気がちがったりしたものもあるということだ。」

「そうですか、それはわけのわからない話ですね……。ああ、いいことがある。おとうさん、ぼく少年探偵団にはいつているでしょう。だから……。」

始君が声はずませていますと、おとうさまはお笑いになつて、

「ハハハ……、おまえたちの手にはおえないよ。相手はインドの魔法使いだからねえ。おまえ知っているだろう。インドの魔術というものは世界のなぞになっているほどだよ。一本のなわを空中に投げて、その投げたなわをつたって、まるで木登りでもするよ。うに、子どもが、空へ登っていくというのだからねえ。」

それから、地面に深い穴を掘って、その中へうずめられたやつ

が、一月も二月もたつてから、土を掘ってみると、ちゃんと生きているという、おそろしい魔法さえある。インド人は今、地面に種をまいたかと思うと、みるみる、それが芽を出し、茎くきがのび、葉がはえ、花が咲くというようなことは、朝飯まえにやってのける人種だからねえ。」

「じゃ、ぼくらでいけなければ、明智先生にご相談してはどうでしょうか。明智先生は、やっぱり魔法使いみたいな、あの二十面相を、やすやすと逮捕なすつた方ですからねえ。」

始君は、さもじまんらしくいいました。明智探偵ならば、いくら相手がインドの魔法使いだって、けっして負けやしないと、かたく信じているのです。

「ウン、明智先生なら、うまい考えがあるかもしれないねえ。あすにでも、ご相談してみることにしようか。」

おとうさまも明智探偵を持ちだされては、かぶとをぬがないわけにはいきませんでした。

しかし、黒い魔物は、あすまでゆうよをあたえてくれるでしょうか。始君たちの話を、やつはもう、障子しょうじの外から、ちゃんと立ち聞きしていたのではありますまいか。

## 黒い手

そのとき、始君は何を見たのか、アツと小さいさげび声をたてて、おとうさまのうしろの床の間を見つめたまま、化石したようになつてしまいました。その始君の顔といったらありませんでした。まっさおおになつてしまつて、目がとびだすように大きくひら

いて、口をポカンとあけて、まるできみの悪い生き人形のようにした。

おとうさまもおかあさまも、始君のようすにギョツとなすつて、いそいで、床の間のほうをごろんになりましたが、すると、おふたりの顔も、始君とおなじような、おそろしい表情にかわつてしまいました。

「ごろんなさい。」

床の間のわきの書院窓が、音もなく細めにひらいたではありませんか。そして、そのすきまから、一本の黒い手が、ニューツとつぎだされたではありませんか。

「アツ、いけない。」

と思うまもあらせず、その手は、花台はなだいの寶石箱をわしづかみにしました。そして、黒い手はしづかに、また、もとの障子のすきまから消えていってしまいました。黒い魔物は、大胆不敵だいたんふてきにも三人の目の前で、のろいの寶石をうばいさつたのです。

おとうさまも、始君も、あまりの不意うち、すっかりどぎもをぬかれてしまつて、黒い手にとびかかるのはおろか、座を立つことすらわすれて、ぼうぜんとしていましたが、黒い手がひっこんでしまうと、やっと正気をとりもどしたように、まずおとうさまが、

「今井君、今井君、くせ者だ、早く来てくれ……。」

と、大きな声で秘書をおよびになりました。

「あなた、緑ちゃんに、もしものことがあつては……。」

おかあさまの、うわづつたお声です。

「ウン、おまえもおいで。」

おとうさまは、すぐさまふすまをひらいて、おかあさまといっしょに、緑ちゃんのいる、部屋へかけこんで行かれましたが、さいわい緑ちゃんにはなにごともありませんでした。

いっぽう、おとうさまの声に、急いでかけつけた秘書の今井と、始君とは、廊下<sup>ろうか</sup>のガラス戸が一枚あいたままになっていましたので、そこから庭へとびおりて、くせ者を追跡しました。

黒い魔物は、つい目の前を走っています。暗い庭の中で、まっ黒なやつを追うのですから、なかなか骨が折れましたが、さいわい、庭のまわりは、とても乗りこせないような、高いコンクリート塀で、グルッと、とりかこまれていきますので、くせ者を塀ぎわまで追いつめてしまえば、もう、こっちのものなのです。

案のじょう、くせ者は塀に行きあたって当惑したらしく、方向をかえて、塀の内がわにそって走りだしました。塀ぎわには、背の高い青ギリだとか、低くしげっているツツジだとか、いろいろな木が植えてあります。くせ者はその木立<sup>こだ</sup>ちをぬって、低いしげみはとびこえて、風のように走っていきます。

ところが、そうして少し走っているあいだに、じつにふしぎなことがおこりました。くせ者の黒い姿が、ひとつの低いしげみをとびこしたかと思うと、まるで、忍術使いのように、消えうせてしまったのです。

始君たちは、きつとしげみのかげに、しゃがんでかくれているのだろうと思って、用心しながら近づいていきましたが、そこにはだれもないことがわかりました。くせ者は蒸発してしまったとしか考えられません。

しばらくすると、電話の知らせで、ふたりのおまわりさんがや

ってきましたが、そのおまわりさんと、家中のものが手分けをして、懐中電燈の光で、庭のすみずみまでさがしたのですけれど、やっぱりあやしい人影は発見できませんでした。むろん宝石をとりもどすこともできなかったのです。

これがインド人の魔法なのでしょう。魔法でもなければ、こんなにもごとく消えうせてしまうことはできません。

読者諸君は、いつかの晩、篠崎始君の友だちの桂正一君が、養源寺の墓地の中で、黒い魔物を見うしなったことを記憶されるでしょう。こんどもあのおりとまったく同じだったのです。くせ者は追っ手の目の前で、やすやすと姿を消してしまつたのです。

ああ、インド人の魔法。インド人は、始君のおとうさまがおっしゃったように、ほんとうにそんな魔術が使えるのでしょうか。もしかしたら、このあまりに手ぎわのよい消失には、何かしら思いもよらない手品の種があつたのではないのでしょうか。

#### ふたりのインド人

さわぎのうちに一夜がすぎて、その翌日は、篠崎家の内外に、アリも通さぬ、げんじゅうな警戒がされました。緑ちゃんは、奥の一間にとじこめられ、障子をしめきって、おとうさま、おかあさまは、もちろん、ふたりの秘書、ばあやさん、ふたりのお手伝いさんなどが、その部屋の内外と外とをかためました。十いくつの目が、寸時もわき見をしないで、じつと、小さい緑ちゃんにそそがれていたのです。家の外では、所轄<sup>しよかつ</sup>警察署の私服刑事が数名、門前や塀のまわりを見はつています。じゅうぶんすぎるほどの

警戒けいけいでした。

しかし、おとうさまもおかあさまも、まだ安心ができないのです。ゆうべの手なみでもわかるように、くせ者は忍術使用のようなやつですから、いくら警戒してもむだではないかとさえ感じられるのです。ひじょうな不安のうちに時がたって、やがて午後三時を少しすぎたころ、学校へ行っていた始君がいきおいよく帰ってきました。

「おとうさん、ただいま。緑ちゃん大じょうぶでしたか。」

「ウン、こうして、きげんよく遊んでいるよ。だがおまえは、いつもより、ひどくおそかったじゃないか。」

おとうさまが、ふしんらしくおたずねになりました。

「ええ、それにはわけがあるんです。ぼく、学校がひけてから、明智先生のところへ行ってきたんです。」

「ああ、そうだったか。で、先生にお会いできたかい。」

「それがだめなんですよ。先生は旅行していらつしやるんです。どつか遠方えんぽうの事件なんですって。でね、小林さんに相談したんですよ。するとね、あの人やつぱり頭がいいや。うまいことを考えだしてくれましたよ。おとうさん、どんな考えだと思えます。」

始君は大とくいでした。

「さあ、おとうさんにはわからないね。話してごらん。」

「じゃ、話しますからね。おとうさん耳をかしてください。」

そんなことはあるまいけれど、もし、くせ者に聞かれたらたいへんだというので、始君は、おとうさまの耳に口をよせて、ささやくのでした。

「あのね、小林さんはね、緑ちゃんを変装させなさいというので

ですよ。」

「え、なんだって、こんな小さい子どもにかい？」

おとうさまも、思わずささやき声になっておたずねになりました。

「ええ、こうなんですよ。小林さんがいうのにはね、どこかに緑ちゃんのおおきなおばさんか何かがないかっていうんです。でも、ぼく、そういうおばさんなら、品川区しながわくにひとりあるって言ったんです。ほら、緑ちゃんの大すきな野村のおおばさんね。ぼく、あの人のことを言ったんですよ。」

すると、小林さんは、それじゃ、緑ちゃんをコッソリそのおばさんちへつれて行って、しばらくあずかってもらったほうがいいっていうんです。ね、そうすれば、あいつは、この家ばかりねらっていて、むだ骨折りをするわけでしょう。

でも、つれていくときに見つかる心配があるから、そこに手だてがいるんだっていうんですよ。それはね、まず小林さんが、近所の五つくらいの子を、男の子ですよ、それをつれて、ぼくちへ遊びに来るんです。そしてね、こっそり緑ちゃんにその子の服を着せちゃって、そして、小林さんは帰りには、男の子に変装した緑ちゃんをつれて、なにくわぬ顔で家を出るんです。ね、わかったでしょう。

でも、用心のうえにも用心をしなければいけないから、いつもよびつけの自動車を呼んで、うちの今井さんが助手席に乗って、そして、品川のおおばさんちまで、ぶじに送りどけるっていうんです。ね、うまい考えでしょう。これなら大じょうぶでしょう。」

「ウン、なるほどね。さすがはおまえたちの団長の小林君だね。」

うまい考えだ。おとうさんは賛成だよ。じつはおとうさんも、緑をどっかへあずけたほうがいいとは思っていたんだ。しかし、その道があぶないので、決心がつかないんだよ。」

おとうさまは、小林君の名案にすっかり感心なすって、おかあさまにご相談なさいました。おかあさまも、反対する理由がないものですから、しかたなく賛成なさいましたが、

「でも、そのつれてきた男の子をどうしますのよ？ そのお子さんに、もしものがあつたらこまるじゃありませんか。」

と、やっばりささやき声でおっしゃるのです。

「それは大じょうぶですよ。あの黒いやつは緑ちゃんのほかの子は見向きもしないんですもの。たとえさらわれたって、危険はないんだし、それに、すぐあとから、また小林さんが迎えに来るっていうんです。そしてね、もう一着、似たような男の子も服を用意しておいてね、それを着せてつれて帰るんだっていいですから、同じような男の子が二度門を出るわけですね。おもしろいでしょう。悪者は、めんくらうでしょうね。」

この始君の説明で、おかあさまも、やつと納得なさいましたので、始君はさっそく明智事務所へ電話をかけて、あらかじめ打ちあわせておいた暗号で、小林少年にこのことを伝えました。

さて小林君が、緑ちゃんくらいの背かっこうのかわいらしい男の子をつれて、篠崎家へやってきたのは、もう日の暮れがた時分でした。

すぐさま奥まった一間をしめきって、緑ちゃんの変装がおこなわれました。かわいらしいイートンスーツを着て、おかつぱの髪の毛は大きな帽子の中へかくして、たちまち勇ましい男の子がで

きあがりました。

まだ五つの緑ちゃんは、何もわけがわからないものですから、生まれてから一度も着たことのないイートンスーツを着て、大よろこびです。

すっかり支度ができますと、緑ちゃんには品川のおばさんのところへ行くんだからと、よくいいきかせたうえ、小林君は篠崎君のおとうさまから、おばさんにあてた依頼状を、たいせつにポケットに入れて、緑ちゃんの手を引いて、わざと人目にふれるように、門の外へ出ていきました。

門の外には、もうちゃんと自動車が待っています。小林君は緑ちゃんをだいて、秘書の今井君があけてくれたドアの中へはいり、客席にこしかけました。つづいて、今井君も助手席につき、車は、エンジンの音もしずかに出発しました。

もう外は、ほとんど暗くなっていました。道ゆく人もおぼろげです。自動車はしばらく電車道を通っていましたが、やがて、さびしい横町に折れ、ひじょうな速力で走っています。

見ていると、両がわの人家がだんだんまばらになり、ひどくさびしい場所へさしかかりました。

「運転手さん、方向がちがいがいやしないかい。」

小林君は、みように思つて声をかけました。

しかし運転手は、まるでつんぼのように、なんの返事もしないのです。

「おい、運転手さん、聞こえないのか。」

小林君は、思わず大声でとなりつけて、運転手の肩をたたきました。すると、

「よく聞こえています。」

という返事といっしょに、運転手と今井君とが、ヒョイというしるをふりむきました。

ああ、その顔！ 運転手も今井君も、まるで、えんとつの中からはい出したように、まっ黒な顔をしていたではありませんか。そして、ふたりは、申しあわせでもしたように、同時にまっ白な歯をむきだして、あのゾツと総毛立つような笑いで、ケラケラケラと笑いました。読者諸君、それはふたりのインド人だったのです。

しかし、運転手はともかくとして、今井君までが、ついさきほど自動車のドアをあけてくれた今井君までが、いつのまにか黒い魔物にかわってしまったのです。まったく不可能なことです。これも、あのインド人だけが知っている、摩訶不思議の妖術なのでしょうか。

### 銀色のメダル

小林君は、まるでキツネにつままれたような気持でした。さいぜん、篠崎家の門前で、自動車に乗るときには、秘書も運転手も、たしかに白い日本人の顔でした。いくらなんでも、運転手がインド人とわかれば、小林君がそんな車に乗りこむわけがありません。それが、十分も走るか走らないうちに、今まで日本人であったふたりが、とつぜん、まるで早がわりでもしたように、まっ黒なインド人に化けてしまったのです。これはいったい、どうしたとこのうのでしょうか。インドには世界のなぞといわれる、ふしぎな魔

術があるそうですが、これもその魔術の一種なのでしょうか。

しかし、今は、そんなことを考えているばあいではありません。緑ちゃんを守らなければならないのです。どうかして自動車をとびだし、敵の手からのがれなければなりません。

小林君は、やにわに緑ちゃんを小わきにかかえると、ドアをひらいて、走っている自動車からとびおりようと身がまえました。

「ヒヒヒ……、だめ、だめ、逃げるとうちころすよ。」

黒い運転手が、片言のような、あやしげな日本語でどなったかと思うと、ふたりのインド人の手が、ニューツとうしろにのびて、二丁のピストルの筒口が、小林君と緑ちゃんの胸をねらいました。「ちくしょう！」

小林君は、歯ぎしりをしてくやしがりしました。自分ひとりなら、どうにでもして逃げるのですが、緑ちゃんにけがをさせまいとすれば、さんねんながら、相手のいうままになるほかはありません。

小林君が、ひるむようすを見ると、インド人は車をとめて、助手席にいたほうが、運転台をおり、客席のドアをひらいて、まず緑ちゃんを、つぎに小林君を、細引きでうしろ手にしばりあげ、そのうえ、用意の手ぬぐいで、ふたりの口にさるぐつわをかませています。

その仕事のあいだじゅう、席に残った運転手は、じつとピストルをさしむけていたのですから、抵抗することなど、思いもおよびません。

しかし、ふたりのインド人は、それを少しも気づきませんでしたけれど、小林君は、相手のなすがままにまかせながら、ちょっとのすきを見て、みょうなことをしました。

それは、今井君に化けたインド人が、緑ちゃんをしばっているときでしたが、小林君はすばやく右手をポケットにつっこむと、何かキラキラ光る銀貨のようなものを、ひとつかみ取りだして、それを、相手にさとられぬよう、ソツと、車のうしろのバンパーのつけねのすみにおきました。インド人にみつからぬよう、ずつとすみのほうへおいたのです。

ちよつと見ると百円銀貨のようですが、むろん銀貨ではありません。何か銀色をした鉛製のメダルのようなものです。数はおよそ三十枚もあつたでしょう。

インド人は、さいわいそれには少しも気がつかず、ふたりにさるぐつわをしてしまうと、ドアをしめて、もとの運転席にもどりました。そして、車はまたもや、人家もみえぬさびしい広っぱを、どこともなく走りだしたのです。

すると、疾走する自動車のうしろの、幅の狭いバンパーのつけねの上に、みょうなことがおこりました。さいぜん小林君がおいた百円銀貨のようなものが、車の動揺につれて、ジリジリと動き出し、はしのほうから一つずつ、地面にふりおとされていくのです。

そして、三十個ほどのメダルが、すっかり落ちてしまうのに、七―八分もかかったのですが、自動車は、そのメダルがなくなつてしまつともまもなく、とあるさびしい町に、ピツタリと停車しました。

あとでわかつたところによれば、それは同じ世田谷区内の、篠崎君のおうちとは反対のはしにある、まだ人家の建ちそろわない、さびしい住宅地だったので。

車がとまると、小林君と緑ちゃんとは、ふたりのインド人のために、有無をいわせず、客席から引きだされて、そこに建つていた一軒の小さい洋館の中へつれこまれました。

ところが、その洋館の門をはいるとき、小林君はまたしても、みょうなことをしたのです。小林君はそのときまで、うしろにしばらく右手を、ギュツとにぎりしめていましたが、それを、インド人たちに気づかれぬよう、歩きながら少しずつひらいていったのです。

すると、小林君の右手の中から、例の銀色のメダルが、一枚ずつ、やわらかい地面の上へ、音もたてず落ちはじめ、自動車のとまったところから、門内までに、つごう五枚のメダルが、二メートルほどずつ間をへだてて、地面にばらまかれました。

読者諸君、この銀貨のようなメダルは、いったいなんでしょう。小林君は、どうしてそんなたぐさんのメダルを持っていたのでしょうか。また、それをいろいろなしかたで、自動車の通つた道路や、洋館の門前に、まきちらしたのは、どういう意味があつたのでしょうか。そのわけを、ひとつ想像してごらんください。

インド人たちは、緑ちゃんをひっつかかえ、小林君をつきとばすようにして、洋館にはいり、せまい廊下づたいに、ふたりを奥まった部屋へつれこみましたが、見ると、その部屋のすみの床板に、ポツカリと四角な黒い穴があいているのです。地下室への入口です。

「この中へはいりなさい。」  
インド人がおそろしい顔つきで命じました。

小林君は両手をしばられて、まったく抵抗力をうばわれているのですから、どうすることもできません。いわゆるままに、ここに立てかけてあるそまつなはしごを、あぶなっかしく、地面の穴ぐらへおりにいくほかはありませんでした。小林君が、ほとんどすべり落ちるようにして、まっくらな穴ぐらの底に横たわると、インド人のひとり、はしごの中段までおりに、そこから緑ちゃんの小さいからだを、小林君のたおれている上へ、投げおとしました。

やがて、はしごがスルスルと天井に引きあげられ、穴ぐらの入り口は密閉され、地下室は真しんのやみになってしまいました。

そのやみの中に、からだの自由をうばわれた、緑ちゃんと小林君とが、折りかさなっていたおれているのです。緑ちゃんは顔中を涙にぬらして泣きいっているのですが、さるぐつわにさまたげられ、ウウウ……という、悲しげなうめき声もれるばかりです。



ああ、かわいそうなふたりは、これからどうなっていくのでしょうか。

### 少年捜索隊

ちょうどそのころ、篠崎君のおうちの近くの、養源寺の門前を、六人の小学校上級生が、何か話しながら歩いていました。

先頭に立っているのは、篠崎君の親友の、よくふとった桂正一君です。桂君は、学校で篠崎君からこんどの事件のことを聞いたものですから、まず、いとこの羽柴壮二君に電話をかけ、羽柴君から少年探偵団員に伝えてもらって、一同、桂君のところへ勢ぞろいをしたうえ、篠崎家を訪問することになったのです。団員のうち三人は、さしつかえがあつて、集まったのは六人だけでした。

少年探偵団員たちは、仲間のうちに何か不幸があれば、かならず助けあう、というかたい約束をむすんでいました。いま、団員篠崎始君のおうちは、おそろしい悪魔におそわれています。しかも、それが、このあいだから、東京中をさわがせている「黒い怪物」なのですから、少年探偵団は、もう、じつとしていたわけにはいきませんでした。ことに彼らの団長の小林少年が、篠崎君の請こいにおうじて、出動したことがわかつているものですから、一同、いよいよ勇み立ったのです。「黒い怪物」は、ぜひ、われわれの手でとらえて、少年探偵団の手なみを見せようではないかと、団員は、もう、はりきっているのです。

桂正一君は、養源寺の門前まで来ると、そこに立ちどまって、いつかの晩の冒険について、一同に語りきかせました。読者諸君

は、そのとき、黒い怪物が養源寺の墓地の中で、消えうせるように姿をかくしてしまったことを記憶されるでしょう。

「ほんとうにかき消すように見えなくなってしまったんだよ。ぼくは、お化けなんか信じないけれど、墓地の中だろう。それにまっくらな夜だろう、さすがのぼくもゾーツとふるえあがって、やにわに逃げだしてしまったのさ。その墓地っていうのは、この本堂の裏手にあるんだよ。」

桂君はそういうしながら、お寺の門内にはいつて、本堂の裏手を指さしました。少年たちも桂君といっしょにぞろぞろと門内にはいり、たそがれ時の、ものさびしい境内を、あちこちと見まわしていました。最年少の羽柴壮二君が、何を発見したのか、びっくりしたように、桂君の腕をとらえました。

「正一君、あれ、あれ、あすこを見たまえ。なんだかいるぜ。」  
ほとんどふるえ声になって、壮二君が指さすところを見ますと、いかにも、門の横のいけがきのそばの低い樹木のしげみの中に、何かモコモコとうごめいているものがあります。それが、どうやら人間の足らしいのです。人間の足が、しげみの中からニューツとあらわれて、まるでいも虫みたいに、動いているのです。

一同それに気づくと、いくら探偵団などといばつていても、やっぱり子どものことですから、ゾツとして立ちすくんでしまいました。おたがいに顔見あわせて、今にも逃げだしそうなようすです。

むりもありません。物の姿のおぼろに見える夕暮れ時、さびしいお寺の境内で、しかも桂君の怪談を聞かされたばかりのところへ、うす暗いしげみの間から、ふいに人間の足があらわれたので

すからね。おとなだつて、おびえないではいられなかったでしょう。

「よし、ぼくが見とどけてやろう。」

さすがに相撲の選手です。桂正一君は、おびえる一同を、その場に残して、ただひとり、しげみのほうへ近づいていきました。

「だれだつ。そこにかくれているのは、だれだつ。」

大声でどなつてみても、相手は少しも返事をしません。といって逃げだすわけでもなく、いも虫のような足が、ますますはげしく動くばかりです。

桂君は、また二三歩前進して、しげみのかげをのぞきました。そして、何を見たのか、ギョツとしたように立ちなおりましたが、いきなりうしろをふりむくと、一同を手まねきするのです。

「早く来たまえ、人がしばられているんだよ。ふたりの人が、ぐるぐる巻きにしばらく、ころがっているんだよ。」

お化けではないとわかると、団員たちは、にわかには勢いついて、その場へかけだしました。

見ると、いかにも、そのしげみのかげに、ふたりのおとなが、手と足を、めちやくちやにしばらく、さるぐつわまではめられて、よこたわつていました。そのうちのひとりは、着物をはぎとられたとみえて、シャツとズボン下ばかりの、みじめな姿です。

「おや、これは篠崎君とこの秘書だぜ」

桂少年は、そのシャツ一枚の青年を指さしてさげびました。

それから、六人がかりで、なわをとき、さるぐつわをはずしてやりやすくと、ふたりのおとなは、やっと口がきけるようになって、事のしだいを説明しました。

しばらくいられたのは、シャツ一枚のほうで篠崎家の秘書今井君、もうひとりの洋服の男は、篠崎家お出入りの自動車運転手でした。ふたりの説明を聞くまでもなく、もう読者諸君にはおわかりでしょうが、今井君が、主人のいいつけで自動車を呼びに行き、気心の知れた運転手をえらんで、同乗して篠崎家へひっかえす途中、この養源寺の門前にさしかかると、とつぜんふたりの覆面をした怪漢かいかんに呼びとめられ、ピストルをつきつけられて、有無をいわせず、しばらくあげられてしまったというのです。

そして、その怪漢のひとりが、今井君の洋服をはぎとって、今井君に変装をして、ふたりは、うばいとった自動車にとびのると、そのまま運転をして、どこかへ走りさってしまったのだそうです。

団員たちは、ふたりのおとなといっしょに、ただちに篠崎家にかけて、事のしだいを報告しました。それをお聞きになった篠崎君のおとうさま、おかあさまは、もう、まっさおになっておしまいにりました。

ふたりがこんなめにあわされたからには、さいぜんの自動車は、インド人が変装して運転していたのにちがいない。すると、緑ちゃんも小林君も、今ごろは、彼らの巣そくつにつれこまれて、どんなひどいめにあっているかわからないのです。

すぐさま警察へ電話がかけられる。まもあらせず、所轄警察署からはもちろん、警視庁からも、捜査係長その他が自動車をとばしてくる、篠崎家は、上を下への大さわぎになりました。

さいわい、自動車の番号がわかつているものですから、たちまち全都の警察へ、その番号の自動車をさがすように手配がおこなわれましたが、しかし、犯人のほうでも、まさかあの自動車を、

そのまま門前にとめておくはずはなく、おそらくどこか遠いところへ運転して行って、道ばたにすてきったにちがいありませんから、たとえ自動車が発見されたとしても、賊の巣くつをつきとめることは、むずかしそうに思われます。

いっぽう、篠崎始君をくわえた、七人の少年探偵団員は、なるべく、おとなたちのじゃまをしないように、門の前に勢ぞろいをして、いろいろと相談をしていましたが、ぼくたちも、手をつかねてながめていることはない。警察とはべつに、できるだけはたらいてみようではないかということになり、七人が手分けをして、自動車の走りさった方角を、ひろく歩きまわり、例の聞きこみ捜査そうさをはじめることに一決しました。

賊の自動車が、玉川電車の線路を、どちらへまがっていったかということだけは、わかつていましたので、七人は肩をならべて、その方角へ歩いていきましたが、四辻よつ辻に出くわすたびに、ふたりまたは三人ずつの組になって、枝道へはいっていき、たばこ屋の店番をしているおばさんだとか、そのへんを歩いているご用聞きなどに、こういう自動車を見なかったかと、たんねんに聞きこみをやり、なんの手がかりもないばあいは、またもとの電車道に引きかえして、つぎの四辻をさがすというふうに、なかなか組織的な捜査方法をとって、いつまでもあきることなく、歩きまわるのでした。

## 地下室

お話かわって、地下室に投げこまれた小林君と緑ちゃんとは、

まっくらやみの中で、しばらくは身動きをする勇氣もなく、グツタリとしていましたが、やがて目が暗やみになれるにしたがって、うっすらとあたりのようすがわかってきました。それは畳六畳敷きほどの、ごくせまいコンクリートの穴ぐらでした。ふつうの住宅にこんなみょうな地下室があるはずはありませんから、インド人たちが、この洋館を買いいれて、悪事をはたらくために、こっそりこんなものをつくらせたのにちがいありません。壁や床のコンクリートも、気のせいか、まだかわいたばかりのように新しく感じられます。

小林君は、やっと元気をとりもどして、やみの中に立ちあがっていましたが、ただジメジメしたコンクリートのおいがするばかりで、どこに一つすきまもなく、逃げだす見こみなど、まったくないことがわかりました。

思いだされるのは、いつか戸山とやま原はらの二十面相の巢くつに乗りこんでいって、地下室にとじこめられたときのことです。あのときは、天井につごうのよい窓がありました。そのうえ七つ道真みちまことや、ハトのピポちゃんを用意していましたので、うまくのがれることができましたのですが、こんどは、そんな窓もなく、まさか敵の巢くつにとらわれようとは、夢にも思いませんので、七つ道具の用意さえありません。こんなとき、万年筆型の懐中電燈かいちゆうでんととうでもあつたらと思うのですが、それも持っていないませんでした。

しかし、たとえ逃げだす見こみはなくとも、まんにちのばあいの用意に、からだの自由だけは得ておかねばなりません。

そこで、小林君は、緑ちゃんのそばへうしろ向きによこたわり、少しばかり動く手先を利用して、緑ちゃんのくくわれているなわ

の結びめをほどこうとしました。

暗やみの中の、不自由な手先だけの仕事ですから、その苦心は、ひととおりでなく、長い時をついやしましたけれど、それでもやっと、目的をはたして、緑ちゃんの両手を自由にすることができました。

すると、たった五つの幼児ですが、ひじょうにかしい緑ちゃんは、すぐ、小林君の気持を察して、まず、自分のさるぐつわをはずしてから、泣きじゃくりながらも、小林君のうしろにまわり、手さぐりで、そのなわの結びめをといてくれるのでした。

それにも、また長いことかかりましたけれど、けつきよく、小林君も自由の身となり、さるぐつわをとって、ホツと息をつくことができました。

「緑ちゃん、ありがとう。かしこいねえ。泣くんじやないよ。今にね、警察のおじさんが助けに来てくださるから、心配しなくてもいいんだよ。さあ、もつとこつちへいらつしやい。」

小林君はそういって、かわいい緑ちゃんを引きよせ、両手でギョツとだきしめてやるのでした。

しばらくのあいだ、そうしているうちに、とつぜん、天井にあららしい靴音がして、ちょうど地下室への入り口あたりで立ちどまると、コトコトとみょうな物音がはじめました。

目をこらして、暗い天井を見あげていますと、はつきりとはわかりませんが、天井に小さな穴がひらいて、そこから何か太い管くだのようなものが、さしこまれてくるようです。直径二十センチもある太い管です。

おや、へんなことをするな、いったいあれはなんだろうと、ゆ

だんなく身がまえをして、なおもそこを見つめているうちに、ガガガ……というような音がしたかと思うと、とつじよとして、その太い管の口から、白いものが、しぶきをたてて、滝のように落ちはじめました。水です。水です。

ああ、読者諸君、このときの小林君のおどろきは、どんなでしたらう。

黒い怪物は、むごたらしくも、緑ちゃんと小林君とを、水責めにしようとしているのです。あのはげしさで落ちる水は、ほどもなく、たった六畳ほどの地下室に、すきまもなく満ちあふれてしまうちにちがいありません。やがてふたりは、その水の中で溺死しなければならぬのです。

そういううちにも、水は地下室の床いちめん、洪水のように流れはじめました。もう、すわっているわけにはいきません。小林君は、緑ちゃんをだいて、水しぶきのかからぬすみのほうへ、身をさけました。

水は、そうして立っている小林君の足をひたし、くるぶしをひたし、やがてじよじよに、じよじよに、ふくらはぎのほうへ、はいあがつてくるのです。

ちょうどそのころ、少年捜索隊そうさくたいの篠崎君と桂君の一组は、やつとのこと、インド人の自動車自動車が通ったさびしい広っぱの近くへ、さしかかっています。

この道は、今までのうちで、いちばんさびしいから、念入りにしらべてみなければならぬというので、べつだんの聞きこみもありませんでしたけれど、あきらめないで歩いていますと、夕やみの広っぱへはいろいろとする少し手前のところで、駄菓子屋の店

あかりの前を、七―八歳の男の子が、向こうからやってくるのに出あいました。

「おい、篠崎君、あの子どもの胸に光っている記章を見たまえ。なんだかぼくらのBDバッジに似ているじゃないか。」

桂君のことばに、ふたりが、子どもに近づいてみますと、その胸にかけているのは、まごうかたもなく、少年探偵団のBDバッジでした。

BDバッジというのは、小林君の発案で、ついこのあいだできあがったばかりの探偵団員の記章でした。BDというのは、Boy (少年) と Detective (探偵) のBとDとを模様のように組みあわせて、記章の図案にしたことから名づけられたのです。

「その記章、どこにあったの？ どっかでひろいやしなかったの？」

子どもをとらえてたずねてみますと、子どもは取りあげられはしないかと、警戒するふうで、

「ウン、あすこに落ちていたんだよ。ぼくんだよ。ぼくがひろったから、ぼくんだよ。」

と、白い目でふたりをにらみました。

子どもが、あすこでひろったと指さしたのは、広っぱのほうです。

「じゃ、小林さんが、わざと落としていったのかもしれないぜ。」

「ウン、そうらしいね。重大な手がかりだ。」

ふたりは、勇みたつてさげびました。

小林少年が考案したBDバッジには、ただ、団員の記章というほかに、いろいろな用途があるのでした。まず第一は、重い鉛で

できているので、ふだんから、それをたくさんポケットの中へ入れておけば、いざというときの石つぶてのかわりになる。第二には、敵にとらえられたばあいなどに、記章の裏のやわらかい鉛の面へ、ナイフで文字を書いて、窓や扉の外へ投げて、通信することができる。第三には、裏面の針にひもをむすんで、水の深さを計ったり、物の距離を測定することができる。第四には、敵に誘かされたばあいに、道にこれをいくつも落としておけば、方角を知らせる目じるしになる。というように、小林君がならべたてたBDバッジの効能は、十カ条ほどもあったのです。

団員たちは、ちょうどアメリカの刑事のように、このバッジを洋服の胸の内がわにつけて、何かのときには、そこをひらいてみせて、ぼくはこういうものだなどと、探偵きどりでじまんしていたのですが、その胸の記章のほかに、めいめいのポケットには、同じ記章が二十個から三十個ぐらいつつ、ちゃんと用意してあったのです。

桂君と篠崎君とは、男の子が、そのBDバッジを広っぱの道路でひろつたと聞くと、たちまち、今いった、第四の用途を思いだし、小林少年が搜索隊の道しるべとして、落としていったものと、さとりました。

読者諸君は、もうとつくにおわかりでしょう。小林君が自動車の中で、インド人にしぼられるとき、ソツとポケットからつかみだして、バンドのつけねの上においた、百円銀貨のようなものは、このBDバッジにほかならなかったのです。そして、その小林君の目的は、いま、みごとに達せられたのです。

篠崎、桂の二少年は、用意の万年筆型懐中電燈をとりだすと、

男の子に教えられた地点へ走って行って、暗い地面を照らしながら、もうほかに記章は落ちていないかと、熱心にさがしはじめました。

「ああ、あった、あった。ここにも一つ落ちていた。」  
懐中電燈の光の中に、新しい鉛の記章がキラキラとかがやいているのです。

「敵の自動車は、この道を通ったにちがいない。きみ、呼び子を吹いて、みんなを集めよう。」

ふたりはポケットの七つ道具の中から、呼び子を取りだして、息をかぎりに吹きたてました。

夜の空に、はげしい笛の音がひびきわたりますと、まださほど遠くへ行っていないなかった残りの五人の少年が、彼らも呼び子で答えながら、どこからともなく、その場へ集まってきました。

「おい、みんな、この道にBDバッジが二つも落ちていたんだ。小林さんが落としていったものにちがいない。もっとさがせば、まだ見つかるかもしれない。みんなさがしてくれたまえ。そして、落ちていたバッジをたどっていけば、犯人の巣くつをつきとめることができるんだ。」

桂少年のさしずにしたがって、五人の少年も、それぞれ万年筆型懐中電燈をとりだして、いっせいに地面をさがしはじめました。そのさまは、まるで七ひきのホタルが、やみの中をとびかわしているようです。

「あった、あった。こんなところに、泥まみれになっている。」  
ひとりの少年が、少し先のところで、また、一つのバッジをひろいあげてさげびました。これで三つです。

「うまい、うまい。もっと先へ進もう。ぼくらは、こうして、だんだん黒い怪物のほうへ近づいているんだぜ。さすがに小林さんは、うまいことを考えたなあ。」

そして、七ひきのホタルは、やみの広っぱの中を、みるみる、向こうのほうへ遠ざかっていくのでした。

地下室では、もう水が一メートルほどの深さになっていました。緑ちゃんをだいた小林君は、立っているのがやっとでした。水は胸の上まで、ヒタヒタとおしよせているのです。

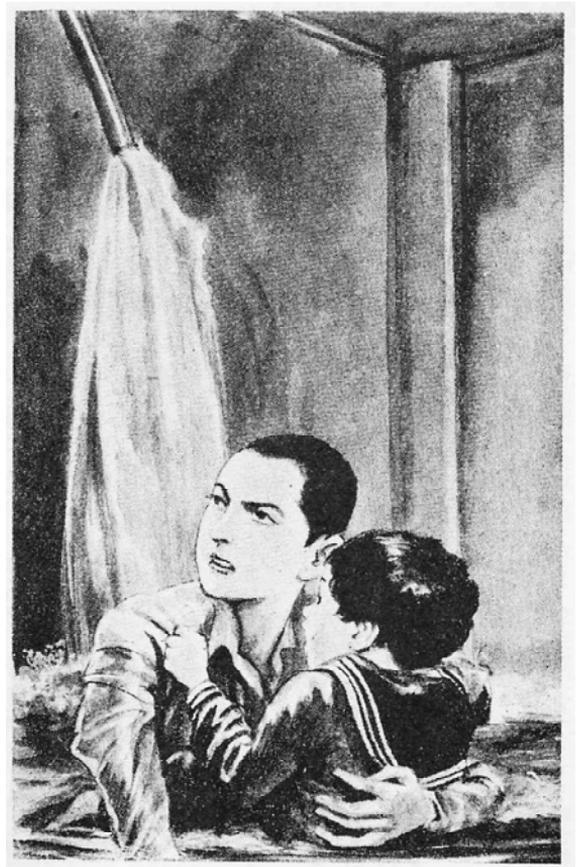
天井の管からの滝は、少しもかわらぬはげしさで、ぶきみな音をたてて、降りそそいでいます。

緑ちゃんは、この地獄のような恐怖に、さいぜんから泣きさけんで、もう声も出ないほどです。

「こわくはない、こわくはない。にいちゃんがついているから、大じょうぶだよ。ぼくはね、泳ぎがうまいんだから、こんな水なんてちつともこわくはないんだよ。そして、今におまわりさんが、助けにいらっしやるからね。いい子だから、ぼくにしっかりとつかまっているんだよ。」

しかし、そういううちにも、水かさは刻一刻と増すばかり、小林君自身が、もう不安にたえられなくなってきました。それに、春とはいっても、水の中は身もおおるほどのつめたさです。

ああ、ぼくは緑ちゃんといっしょに、この、だれも知らない地下室で、おぼれ死んでしまうのかしら。道へ探偵団のバッジを落としておいたけれど、もし団員があすこを通りかからなかったら、なんにもなりやしないのだ。明智先生はどうしていらっしやるか



しら。こんなときに先生が東京にいてくださったら、まるで奇跡のようにあらわれて、ぼくらを救いだしてくださるにちがいないのだからなあ。

そんなことを考えているうちにも、水は、もうのどのへんまでせまってきました。

からだの水の中でフラフラして、立っているのも困難なのです。小林君は、緑ちゃんを背中にまわして、しっかりとぎついているようにいいふくめ、いよいよつめたい水の中を泳ぎはじめました。せめて手足を動かすことによって寒さをわすれようとしたのです。

でもこんなことが、いつまでつづくものでしょう。緑ちゃんという重い荷物をせおった小林君は、やがて力つきておぼれてしま

うのではないでしょう。いや、それよりも、もっと水かさが増して、天井いっぱいになってしまったら、どうするつもりでしょう。そうなれば、泳ごうにも泳げはしないのです。息をするすきもなくなってしまうのです。

### 消えるインド人

ちょうどそのころ、篠崎始君や、相撲選手の桂正二君や、羽柴壮二君などで組織された、七人の少年捜索隊は、早くもインド人の逃走した道すじを、発見していました。

それは小林君が、インド人に、かどわかされる道々、自動車の上から落としていった、少年探偵団のバッジが目じるしとなったのです。七人の捜索隊員は、夜道に落ち散っている銀色のバッジをさがしながら、いつしか例のあやしげな洋館の門前まで、たどりついていました。

「おい、この家があやしいぜ。ごらん、門のなかにも、バッジが落ちていないか。ほら、あすこにさ。」

目ざとく、それを見つけた羽柴少年が、桂正一君にささやきました。

「ウン、ほんとだ。よし、しらべてみよう。みんな伏せるんだ。」

桂君が手まねきをしながら、ささやき声で一同にさしずしますと、たちまち七人の少年の姿が消えてしまいました。イヤ、消えたといっても魔法を使ったわけではありません。号令いっか、みんながいっせいに、暗やみの地面の上に、腹ばいになって、伏せるの形をとったのです。団員一同、一糸みだれぬ、みごとな統制ぶ

りです。

そして、まるで黒いへびがうようにして、七人が洋館の門の中へはいり、地面をしらべてみますと、門から洋館のポーチまでの間に、五つのバッジが落ちていたのを発見しました。

「おい、やっぱり、ここらしいぜ。」

「ウン、小林団長と緑ちゃんとは、この家のどっかにとじこめられてるにちがいない。」

「早く助けださなけりや。」

少年たちは伏せの姿勢のまま、口々にささやきかわしました。

七人のうちで、いちばん身軽な羽柴少年は、ソツとポーチにはあがって、ドアのすきまからのぞいてみましたが、中はまったくで、人のけはいもありません。

「裏のほうへまわって、窓からのぞいてみよう。」

羽柴君は、みんなにそうささやいておいて、建物の裏手のほうへはいつていきました。一同、そのあとにつづきます。

裏手へまわってみますと、案のじょう、二階の一室に電燈がついていて、窓が明るく光っています。しかし、二階ではのぞくことができません。

「なわばしごをかけようか。」

ひとりの少年が、ポケットをさぐりながら、ささやきました。少年探偵団の七つ道具の中には、絹ひもで作った手軽ななわばしごがあるのです。まるめてしまえばひとにぎりほどに小さくなくてはなうのです。

「いや、なわばしごを投げて、音がするといけない。それよりも肩車にしよう。さあ、ぼくの上へ、じゅんに乗りたまえ。羽柴君

は軽いからいちばん上だよ。」

桂正一少年は、そう思ったかと思うと、洋館の壁に両手をついて、ウンと足をふんばりました。よくふとった相撲選手の桂君は、肩車の踏み台にもってこいです。つきには、中くらいの体格の一少年が、桂君の背中によじのぼって、その肩の上に足をかけ、壁に手をついて身がまえますと、こんどは身軽な羽柴君が、サルのようにふたりの肩をのぼり、一番めの少年の肩へ両足をかけました。

ころをはかって、今まで、背をかがめていた桂君と二番めの少年とが、グツとからだをのびしました。すると、いちばん上の羽柴君の顔が、ちょうど二階の窓の下すみにとどくのです。

まるで軽業かるわざのような芸当ですが、探偵団員たちは、日ごろから、いざというときの用意に、こういうことまで練習しておいたのです。

羽柴君は、窓わくに手をかけて、ソツと部屋の中をのぞきました。窓にはカーテンがさがつていましたけれど、大きなすきまができていて、部屋のようにすは手にとるようにながめられました。

そこには、いったい何があったのでしょうか。かねて予期しなかったのではありませんが、部屋の中のふしぎな光景に羽柴君はあやうく、アツと声をたてるどころでした。

部屋のまんなかに、ふたりのおそろしい顔をしたインド人がすわっていました。墨のように黒い皮膚の色、ぶきみに白く光る目、厚ぼったいまっ赤なくちびる、服装も写真で見るインド人そのままで、頭にはターバンというのでしょうか、白い布をグルグルと帽子のように巻いて、着物といえ、大きなふろしきみたいない白い

布を肩からさげているのです。

インド人の前の壁には、なんだか魔物みたいなおそろしい仏像の絵がかかって、その前の台の上には大きな香炉こうろが紫色の煙をはいています。

ふたりのインド人は、すわったまま、壁の仏像に向かって、しきりと礼拝しているのです。ひよつとしたら、小林少年と緑ちゃんとを、魔法の力で祈り殺そうとしているのかもしれない。

見ているうちに、背中がゾーツと寒くなってきました。これが東京のできごとなのかしら、もしや、おそろしい魔法の国へでも、まよいこんだのじゃないかしら。羽柴君はあまりのきみ悪さに、もう、のぞいている気がしませんでした。

急いであいずをおくると、下のふたりにしゃがんでもらって、地面におり立ちました。そして、やみの中で顔をよせてくる六人の少年たちに、ささやき声で、室内のようすを報告しました。

「いよいよそうだ。あんなにバッジが落ちていたうえに、ふたりのインド人がいるとすれば、ここが、やつらの巣くつにきまつている。」

「じゃ、ぼくたちで、この家へふみこんで、インド人のやつをとらえようじゃないか。」

「いや、それよりも、小林団長と緑ちゃんを助けださなくっちゃ。」

「待ちたまえ、はやまっつてはいけない。」

口々にささやく少年たちをおさえて、桂正一君が、おもおもしろくいました。

「いくら大せいでも、ぼくたちだけの力で、あの魔法使いたいたいインド人を、とらえることはできないよ。もし、しくじったら

たいへんだからね。だからね、みんなぼくのさしずにしたがって、部署についてくれたまえ。」

桂君はそういって、だれは表門、だれは裏門、だれとだれは庭のどこというように、建物をとりまいて、少年たちで見はりをつとめるようにさしずしました。

「もし、インド人がこっそり逃げだすのを見たら、すぐ、呼び子を吹くんだよ。いいかい。それからね、篠崎君、きみはランニングがとくいだから、伝令の役をつとめてくれないか。この近くの電話のあるところまで走って行ってね、きみの家へ電話をかけるんだ。犯人の巣くつを発見しましたから、すぐ来てくださいってね。そのあいだ、ぼくらはここに見はりをしていて、けっしてやつらを逃がしやしないから。」

団長がわりの桂君は、てきぱきと、ぬけめなく指令をあたえましました。

篠崎君が、「よしッ。」と答えて、やっぱり地面をほうようにながら、立ちさるのを待って、残る六人は、それぞれの部署にわかれ、四ほうから洋館を監視することになりました。

しかし、そんなことをしているあいだに、小林君がおぼれてしまうようなことはないでしょうか。水が地下室の天井までいっぱいになってしまうようなことはないでしょうか。ひょっとすると、まにあわないかもしれません。ああ、早く、早く。おまわりさんたち、早くかけつけてください。

それから篠崎君のしらせによって、ちょうど篠崎家に居あわした、警視庁の中村捜査係長なかむらが、数名の部下をひきつれ、自動車をとばして、洋館にかけつけるまでに、およそ二十分の時間がすぎ

ました。ああ、その待ちどおしかったこと。

でも、少年捜索隊がさいしょバッジをひろってから、もうたっぷり一時間はたっています。つまり小林君が緑ちゃんをおぶって泳ぎだしてから、それだけの時がすぎさったのです。ああ、ふたりは、まだぶじでいるでしょうか。せっかくおまわりさんたちがかけつけたときには、もうおそかったのではないのでしょうか。

警官たちが到着したのを知ると、桂少年は、やみの中からかきだして行って、中村係長に、「犯人はまだ建物の中にいるにちがない。だれも逃げだしたものはなかった。」ということを報告しました。

中村係長は、桂君たちの手ごたえをほめておいて、部下のふたりを建物の裏にまわし、自分は、ふたりの制服警官をしたがえて、ポーチにあがると、いきなり呼びりんのボタンをおすのでした。

二度、三度、ボタンをおしていると、内部にパッと電燈がともり、人の足音がして、ドアのハンドルが動きました。

ああ、さすがのインド人も、とうとう運のつきです。訪問者がおそろしい警官とも知らず、ノコノコ出むかえにやってくるとは。

中村係長は、建物の中にいるのは、ふたりのインド人だけと聞いていますのですから、ドアがひらかれると同時に、おどりこんで、犯人をひつとらえようと、捕縄ほじょうをにぎりしめて待ちかまえていました。

ところが、ドアがパツとひらいてそこに立っていたのは、意外にも、黒いインド人ではなくて、見るからにスマートな日本人の紳士でした。

年のころは三十歳ぐらいでしょうか。ひきしまった色白の顔に、

細くかりこんだ口ひげの美しい紳士が、折り目のついた、かっこうのいい背広服を着て、にこにこ笑いながらこちらを見ているのです。

「あなたは？」

中村係長は、めんくらって、みょうなことをたずねました。

「ぼくは、この主人の春木はるきというものですが、よくおいでくださいました。じつは、ぼくのほうからお電話でもしようかと考えていたところです。」

ますます意外なことはです。さすがの警部もキツネにでもつままれたような顔をして、

「この家に、ふたりのインド人がいるはずですが……。」

と、口ごもらないではいられませんでした。

「ああ、あなた方は、もう、インド人のことまでご承知なのか。ぼくはあいつらが、こんな悪人とは知らないで、部屋を貸していたのですが……。」

「すると、ふたりのインド人は、おたくの間借り人だったのですか。」

「そうなんです。しかし、まあ、こちらへおはいりください。くわしいお話をいたしましょう。」

紳士は、そういうながら、先に立って奥のほうへはいっていきますので、中村係長と、ふたりの警官とは、ふしんながらも、ともかくそのあとにしたがいしました。

「ここです。ふたりともぶじに救うことができました。ぼくがもう一足おそかったら、かわいそうに命のないところでした。」

紳士は、またもや、わけのわからぬことをいって、とある部屋

のドアをひらくと、警官たちをまねきいれるのでした。

中村係長は紳士のあとについて、一步、部屋の中にふみこんだかと思うと、意外の光景にハッとおどろかないではいられませんでした。

ごらんなさい。部屋のすみのベッドの中には、かどわかされた緑ちゃんが、スヤスヤとねむっているではありませんか。その枕もとのイスには、小林少年がおとなのナイト・ガウンを着せられて、みょうなかつこうで、こしかけているではありませんか。

「これはいったい、どうしたのです。」

中村係長は、あつげにとられてさげびました。

「こういうわけですよ。」

紳士は係長にイスをすすめて、事のしだいを語りはじめました。

「ぼくは今、雇やとい人のコックとふたりきりで、独身生活をしているのですが、きょうは朝から外出していて、つい今しがた帰ってきましたと、家の中にだれもいないのです。二階の部屋を貸してあるインド人たちもいなければ、コックの姿も見えません。

どうしたんだろうと、ふしんに思つて家中をさがしてみますと、やっと台所のすみでコックを見つけたことができたが、それがおどろいたことには、手足をしばられたうえに、さるぐつわまではめられているのです。

なわをといてやって、ようすをたずねますと、二階のインド人が、どこから帰ってきて、いきなりこんなめにあわせたということです。いや、そればかりではありません。コックのいいますには、インド人は、なんだか小さい子どもをつれて帰ったらしい。そして、その子どもを地下室へほうりこんだのではないかと思う。

今しがたまで、かすかに子どもの泣き声が聞こえていたと申すのです。

ぼくはおどろいて、すぐさま地下室へ行ってみますと、なんといいことでしょう。地下室はまるでタンクみたいに水がいっぱいになっていて、その中を、この小林君という少年が、小さいお嬢さんをおぶって泳いでいるじゃありませんか。もう力がつきて、今にもおぼれそうなようです。

ぼくは、むろんすぐふたりを救いあげましたが、小さいお嬢さんのほうは、ひどく熱をだしているものですから、こうしてベッドに寝かしてあるのです。

それから、この小林君の話で、いっさいの事情がわかりましたので、ぼくは、お嬢さんのおたくと、警察とへ、電話をかけようとしているところへ、ちょうど、あなた方が、おいでくださったというわけです。」

聞きおわたった中村係長は、ホツとためいきをついて、「そうでしたか。いや、おかげさまで、ふたりの命を救うことができ、なによりでした……。しかし、インド人は、たしかにいないのでしょうか。じゅうぶんおさがしになりましたか。」

「じゅうぶんさがしたつもりですが、なお念のために、あなた方のお力で搜索していただいたほうがいいと思います。」

「では、もう一度しらべてみましょう。」

そこで係長は裏口へまわしておいたふたりの警官も呼びいれて、五人が手分けをして、おし入れといわず、天井といわず、床下までも、残るところもなく搜索しましたが、インド人の姿はどこにも発見されませんでした。

じつにふしぎというほかはありません。羽柴少年が二階の窓をのぞいてから、警官がつくまでの、わずか二十数分のあいだに、ふたりのインド人は、まるで煙のように消えうせてしまったのです。

建物の外には、六人の少年探偵団員が、注意ぶかく見はりをしていました。インド人は、どうしてその目をのがれることができたのでしょうか。

いやいや、やつらは神変ふしぎの魔法使いです。建物の外へ出るまでもなく、あの二階の部屋の中で、何かのじゅ文をとえながら、スーツと消えうせてしまったのかもしれない。

読者諸君は、黒い魔物が、養源寺の墓地の中で、それからもう一度は、篠崎家の庭園で、かき消すように姿をかくしてしまったことをご記憶でしょう。こんども、それと同じ奇跡がおこなわれたのです。このふたりのインド人にかぎっては、物理学の原理があてはまらないのかもしれない。

むろん、中村係長はただちに、このことを警視庁に報告し、東京都の警察署、派出所にインド人逮捕の手配をしましたが、一日たち二日たっても、怪インド人はどこにも姿をあらわしませんでした。やつらは姿を消したばかりではなく、飛行の術かなんかで、海をわたって、とっくに本国へ帰ってしまったのではないのでしょうか。

#### 四つのなぞ

世田谷の洋館でインド人が消えうせた翌々日、探偵事件のため

に東北地方へ出張していた明智名探偵は、しゅびよく事件を解決して東京の事務所へ帰ってきました。

帰るとすぐ、探偵は旅のつかれを休めようとししないで、書齋に助手の小林少年を呼んで、るす中の報告を聞くのでした。

小林君は、もうすっかり元気を回復していました。聞けば、緑ちゃんも翌日から熱もとれて、おとうさまおあさまのそばで、きげんよく遊んでいるということです。

小林君は明智先生の顔を見ると、待ちかねていたように、怪インド人事件のことを、くわしく報告しました。

「先生、ぼくには何がなんだかさっぱりわからないのです。でも、みんなのいうように、あのインド人が魔法を使ったなんて信じられません。何かしら、ぼくたちの知恵では、およばないような秘密があるのじゃないでしょうか。先生、教えてください。ぼくは早く先生のお考えが聞きたくてウズウズしていたんですよ。」

小林君は、明智先生を、まるで全能の神さまかなんかのように思っているのです。この世の中に、先生にわからないことなんて、ありえないと信じているのです。

「ウン、ぼくも旅先で新聞を読んで、いくらか考えていたこともあるがね。そう、きみのようにせきたてても、すぐに返事ができるものではないよ。」

明智探偵は笑いながら、安楽イスにグツともたれこんで、長い足を組みあわせ、すきなエジプトたばこをふかしはじめました。

これは明智探偵が深くものを考えるときのくせなのです。一本、二本、三本、たばこはみるみる灰になって、紫色の煙とエジプトたばこのかおりとが、部屋いっぱいにただよいました。

「ああ、そうだ、きみ、ちょっとここへ来たまえ。」

とつぜん、探偵はイスから立ちあがって、部屋のいっぽうの壁にはりつけてある東京地図のところへ行き、小林少年を手まねきしました。

「養源寺というのは、どのへんにあるんだね。」

小林君は地図に近づいて、正確にその場所をさしめしました。

「それから、篠崎君の家は？」

小林君は、またその場所をしめしました。

「やっぱりぼくの想像したとおりだ。小林君、これがどういう意味かわかるかね。ほら、養源寺と篠崎家とは、町の名もちがうし、ひどくはなれているように感じられるが、裏ではくつついているんだよ。この地図のようすでは、あいだに二―三軒家があるかもしれないが、十メートルとはへだたっていないよ。」

探偵は、何か意味ありげに微笑して、小林君をながめました。「ああ、そうですね。ぼくもうっかりしていました。表がわではまるで別の町だものですから、ずっとはなれているように思っていたのです。でも、先生、それが何を意味しているんだか、ぼくにはよくわかりませんが。」

「なんでもないことだよ。まあ考えてごらん。宿題にしておこう。」探偵はそういうしながら、もとの安楽イスにもどって、また深々とまたれこみました。

「ところで、小林君、この事件には常識では説明のできないような点がいろいろあるね。それを一つかぞえあげてみようじゃないか、これが探偵学の第一課なんだよ。まず事件の中から奇妙な点をひろい出して、それにいろいろの解釈をあたえてみるというの

がね……。

この事件では、まず第一に黒い魔物が、東京中のほうぼうへ姿をあらわして、みんなをこわがらせたね。犯人は、いったいなんの必要があって、あんなばかなまねをしたんだろう。

こんどの犯罪の目的は、篠崎家の宝石をぬすみだすことと、緑ちゃんという女の子をかどわかすことなんだが、黒い魔物がほうほうにあらわれて、新聞に書かれたりすれば、わたしは、こんなまっ黒な人種ですよ、ご用心なさいと、まるで相手に警戒させるようなものじゃないか。

それから、まだあるよ。黒い魔物はだんだん篠崎家に近づいてきて、そこでも、いろいろと見せびらかすようなまねをしている。そして、人ちがいをして、ふたりまで、よその女の子をかどわかしかけている。

宝石が篠崎家にあるということとを、ちゃんと見とおして、わざわざインドから出かけてくるほどの用意周到な犯人に、そんな手ぬかりがあるものだろうか。緑ちゃんという女の子が、どんな顔をしているかくらい、まえもって調べがついていそうなものじゃないか。

小林君、きみは、こういうような点が、なんとなくへんだとは思わないかね。つじつまがあわないとは思わぬかね。」

「ええ、ぼくは、今までそんなこと少しも考えてませんでしたけれど、ほんとうにへんですね。あいつは、わたしはこういうインド人です。こういう人さらいをしますと、自分を広告していたようなものですね。」

小林君は、はじめてそこへ気がついて、びっくりしたような顔

をして、先生を見あげました。

「そうだろう。犯人はふつうならば、できるだけかくすべきことなら、これ見よがしに広告しているじゃないか。小林君、この意味がわかるかね。」

探偵はそういって、みょうな微笑びしょうをうかべましたが、小林君には、先生の考えていらっしやるのが、少しもわからぬものから、その微笑が、なんとなくうすきみ悪くさえ感じられました。

「第二には、インド人が忍術使いのように消えうせたというふしぎだ。一度は養源寺の墓地で、一度は篠崎家の庭で、それからもう一度は世田谷の洋館で。これはもう、きみもよく知っていることだね。あの晩、洋館のまわりには、六人の少年探偵団の子どもが見はついていたというが、その見はり、たしかだったのだろうね。うっかり見のがすようなことはなかっただろうね。」

「それは桂君が、けっして手ぬかりはなかったといっています。みんな小学生ですけれど、なかなかしつかりした人たちですから、ぼくも信用していいと思います。」

「表門のみはりをしたのは、なんとという子どもだったの。」

「桂君と、もうひとり小原君っていうのです。」

「ふたりもいたんだね。それで、そのふたりは、春木という洋館の主人が帰ってくるのを見たといっていたかね。」

「先生、そうです。ぼく、ふしぎでたまらないのです。ふたりは春木さんの帰ってくるのを見なかったといっていますよ。みんなは、まだインド人が二階にいるあいだに、それぞれ見はりの部署にいたのですから、春木さんが帰ってきたのは、それよりあとにちがいありません。だから、どうしても桂君たちの目の前を通らな

ければならなかったのです。まさか主人が裏口から帰るはずはありませんね。しかも、その裏口を見はっていた団員も、だれも通らなかったといっているのです。」

「フーン、だんだんおもしろくなってくるね。きみはそのふしぎを、どう解釈しているの？ 警察の人に話さなかったの？」

「それは桂君が中村さんに話したのだそうです。でも、中村さんは信用しないのですよ。ふたりのインド人が逃げだすのさえ見のがしたのだから、春木さんのはいつてくるのを気づかなかったのはむりもないって。子どもたちのいうことなんか、あてにならないと思っっているのですよ。」

小林君は、少し憤慨ふんがいのおももちでいうのでした。

「ハハハ……。それはおもしろいね。ふたりのインド人が出ていったのも気づかないほどだから、春木さんのはいつてくるのも見のがしたんだろうって？ ハハハ……。」

明智探偵は、なぜか、ひどくおもしろそうに笑いました。

「ところでね、きみは春木さんに地下室から助けだされたんだね。むろん、春木さんをよく見ただろうね。まさかインド人が変装していたんじゃないね。」

「ええ、むろんそんなことはありません。しんから日本人の皮膚の色でした。おしろいやなんかで、あんなふうになるものじゃありません。長いあいだいっしょの部屋にいたんですから、ぼく、それは断言してもいいんです。」

「警察でも、その後、春木さんの身がらをしらべただろうね。」

「ええ、しらべたそうです。そして、べつに疑いのないことがわかりました。春木さんは、あの洋館にもう三月も住んでいて、近

所の交番のおまわりさんとも顔なじみなんですって。」

「ほう、おまわりさんともね。それはますますおもしろい。」

明智探偵は、なにかしらゆかいでたまらないという顔つきです。

「さあ、そのつぎは第三の疑問だ。それはね、きみが篠崎家の門前で、緑ちゃんをつれて自動車に乗ろうとしたとき、秘書の今井というのがドアをあけてくれたんだね。そのとき、きみは今井君の顔をはっきり見たのかね。」

「ああ、そうだった。ぼく、先生にいわれるまで、うっかりしていましたよ。そうです、そうです。ぼく、今井君の顔をはっきり見たんです。たしかに、今井さんでした。それが、自動車が動きたすとまもなく、あんな黒ん坊になってしまふなんて、へんだなあ。ぼく、なによりも、それがいちばんふしぎですよ。」

「ところが、いっぽうでは、その今井君が、養源寺の墓地にしばらくいられたんだね。とすると、今井君がふたりになったわけじゃないか。いや、三人といったほうがいいかもしれない。墓地にころがっていた今井君と、自動車のドアをあけて、それから助手席に乗りこんだ今井君と、自動車の走っているあいだに黒ん坊になった今井君と、合わせて三人だからね。」

「ええ、そうです。ぼく、さっぱりわけがわかりません。なんだか夢をみているようです。」

小林君には、そうして明智探偵と話しているうちに、この事件のふしぎさが、だんだんはつきりわかってきました。もう魔法をけなす元気もありません。小林君自身が、えたいのしれない魔法にかかっているような気持でした。

「小林君、思いだしてごらん。その自動車の中でね、きみは、ふ

たりのインド人の首すじを見なかったかね。向こうをむいている  
運転手と助手の首すじを見なかったかね。」

探偵が、またみょうなことをたずねました。

「首すじって、ここのところですか。」

小林君は、自分の耳のうしろをおさえてみせました。

「そうだよ。そのへんの皮膚の色を見なかったかね。」

「さあ、ぼく、それは気がつきませんでした。ああ、そうそう、  
ふたりとも鳥打ち帽をひどくあみだにかぶっていて、耳のうしろ  
なんかちつとも見えませんでした。」

「うまい、うまい、きみはなかなかよく注意していたね。それで  
いいんだよ。さあ、つぎは第四の疑問だ。それはね、犯人は緑ち  
やんをなぜ殺さなかったか、ということだよ。」

「え、なんですって。やつらはむろん殺すつもりだったのですよ。  
ぼくまでいっしょにおぼれさせてしまつつもりだったのですよ。」  
「ところが、そうじゃなかったのさ。」

探偵は、また意味ありげにニコニコと笑ってみせました。

「よく考えてごらん。インド人たちはコックをしばったけれど、  
主人の春木さんにたいしてはなんの用意もしなかったじゃないか。  
春木さんは外出していて、いつ帰るかわからないのだよ。そして、  
帰ってくればコックの報告を聞いて、地下室のきみたちを、助け  
だすかもしれないのだよ。もし助けだされたら、せつかくの苦心  
が水のあわじじゃないか。それをまるで気にもしないで、緑ちゃん  
の最期も見とけないで、逃げだしてしまうなんて、あの執念  
ぶかさくらべて考えてみると、おかしいほど大きな手落ちじや  
ないか。現に、こうして、きみも緑ちゃんも助かっているんだか

らね。インド人たちはなんのために、あれだけの苦勞をしたのか、  
まるでわけがわからなくなるじゃないか。」

小林君、わかるかね、この意味が。犯人はね、緑ちゃんを殺す  
気なんて、少しもありやしなかったのだよ。ハハハ……、おもし  
ろいじゃないか。みんなお芝居だったのだよ。」

探偵はまた、さもゆかいらしく笑いましたが、小林君には、  
その意味が少しもわからないのです。いったいぜんたい先生は何  
を考えていらっしやるのだろう。それを思うと、なんだかこわく  
なるようでした。

「さあ、小林君、この四つの疑問をといてごらん。これを四つと  
もまちがいにいとしまえば、こんどの事件の秘密がわかるの  
だよ。ぼくもそれを完全にといたわけじゃない。これからたしか  
めてみなければならぬことが、いろいろあるんだよ。しかし、  
ぼくには今、この事件の裏にかくれて、クスクス笑っているお化  
けの正体が、ぼんやり見えているんだよ。」

ぼくは、こんなに、ニコニコしているけれど、ほんとうはその  
お化けの正体に、ギョツとしているんだ。もし、ぼくの想像があ  
たっていたらと思うと、あぶら汗がにじみだすほどこわいのだよ。」  
明智探偵は、ひじょうにまじめな顔になって、声さえ低くして、  
さもおそろしそうにいうのでした。

その顔を見ますと、小林君はゾーツと背すじが寒くなってきま  
した。なんだかそのお化けが、うしろからバアーといつて、とび  
だしてくるような気さえするのです。

「ところでね、小林君、もう一つ思いだしてもらいたいことがあ  
るんだが、きみはさつき、春木さんの顔をよく見たといったね。」

そのとき、もしやきみは……。」

探偵はそこまでいうと、いきなり小林君の耳に口をよせて、なにごとかヒソヒソとささやきました。

「エッ、なんですって?」

それを聞くと、小林少年の顔がまっさおになつてしまいました。

「まさか、まさか、そんなことが……」

小林君はほんとうにお化けでも見たように、そのお化けがおそいかかってくるのをふせぎでもするよつに、両手を前にひろげて、あとじさりをしました。

「いや、そんなにこわがらなくつてもいい。これは、ぼくの気のせいかもしれないのだよ。ただね、今あげた四つの疑問をよく考えてみるとね、みんなその一点を指さしているように思えるのだよ。だが、たしかめてみるまでは、なんともいえない。ぼくはきよのうちに、一度、春木さんと会つてみるつもりだよ。春木さんの電話は何番だったかしら。」

それから、明智探偵は電話帳をしらべて、春木氏に電話をかけるのでした。

読者諸君、名探偵が小林君の耳にささやいたことばは、いったい、どんなことがらだったのでしょうか。それを聞いた小林君は、なぜ、あれほどの恐怖をしめたのでしょうか。

明智探偵は、四つの疑問をといっていけば、しぜんそのおそろしい結論に達するのだといいました。諸君は、こころみにそのなぞをといつてごらんなさるのも一興(きょう)でしょう。しかし、こんどのなぞは、ずいぶん複雑(むざん)ですし、その答えがあまりに意外(がい)なので、そんなにやすやすとはとけないだろうと思ひます。つぎの章はその

なぞのとけていく場面です。そして、ゾツとするようなお化けが、正体をあらわす場面です。

### さかさの首

明智探偵は、ふたりのインド人に部屋を貸していた洋館の主人春木氏に、一度会つていろいろきいてみたいというので、さつそく同氏に電話をかけて、つごうをたずねますと、昼間は少しさしかえがあるから、夜七時ごろおいでくださいという返事でした。探偵は電話の約束をすませますと、すぐさま事務所を出かけました。春木氏に会うまでに、ほかにいろいろしらべておきたいことがあるからということでした。

小林少年は、ぜひ、いっしょにつれていってください、とたのみましたが、きみは、まだつかれがなあっていないだろうからと、るす番を命じられてしまいました。

それから明智探偵が、どこへ行つて、何をしたか、それはまもなく読者諸君にわかるようになりますから、ここには記(しる)しません。その夜の七時に、探偵が春木氏の洋館をたずねたところから、お話をつづけます。

青年紳士春木氏は、自分で玄関へ出むかえて、明智探偵の顔を見ますと、ニコニコと、さもうれしそうにしながら、

「よくおいでくださいました。ご高名(こうめい)は、かねてうかがつております。いつか一度お目にかかつてお話をうけたまわりたいものだとぞんじておりましたが、わざわざおたずねくださるなんて、こんなにうれしいことはありません。さあ、どうか。」

と、二階のりっぱな応接室に案内しました。

ふたりは、テーブルをはさんで、イスにかけましたが、初対面のあいさつをしているところへ、三十歳ぐらいの白いつめえりの上着を着た召し使いが、紅茶を運んできました。

「わたしは、妻をなくしまして、ひとりぼっちなんです。家族とっては、このコックとふたりきりで、家が広すぎるものですから、あんなインド人なんかには部屋を貸したりして、とんだめにありました。でも、たしかな紹介状を持ってきたものですから、つい信用してしまいましたね。」

春木氏は、立ちさるコックのうしろ姿を、目で追いながら、いわけするようにいうのでした。

それをきっかけに、明智探偵は、いよいよ用件にはいりました。「じつは、あの夜のことを、あなたご自身のお口から、よくうかがいたいと思って、やってきたのですが、どうも、ふにおちないのは、ふたりのインド人が、わずかのあいだに消えうせてしまったことです。」

もう、ご承知でしょうが、子どもたちがむじやきな探偵団をつくってしまいましたね。あの晩、中村係長たちが、ここへかけつける二十分ほどまえに、その子どもたちが、どの部屋ですか、この二階にふたりのインド人がいることを、ちゃんと、たしかめておいたのです。それが、警官たちよりも早くあなたがお帰りになったときに、もう、家の中になくなっていったというのは、じつにふしぎじゃありませんか。

そのあいだじゅう、六人の子どもたちが、おたくのまわりに、裏げんじゅうな見はりをつづけていたのです。表門はもちろん、裏

門からでも、あるいは塀を乗り越えてでも、インド人が逃げだしたとすれば、子どもたちの目をのがれることはできなかったはずですよ。」

すると、春木氏はうなずいて、

「ええ、わたしも、その点が、じつにふしぎでしかたがないのです。あいつらは、何かわれわれには想像もできない、妖術のようなものでもころえていたのではないのでしょうか。」

と、いかにも、きみ悪そうな表情をしてみせました。

「ところが、もう一つ、みょうなことがあるのですよ。あなたがお帰りになったのは、子どもたちがインド人がいることをたしかめてから、警官がくるまでのあいだでしたね。すると、そのときはもう、子どもたちは、ちゃんと見はりの部署についていたはずなのですが……、あなたは、むろん表門からおはいりになったのでしょうか。」

「ええ、表門からはいりました。」

「そのとき、表門には、ふたりの子どもが番をしていたのですよ。その子どもたちを、ごらんになりましたか。門柱のところに、番兵ばんべいのように立っていたついでというのです。」

「ほう、そうですか。わたしはちつとも気がつきませんでしたよ。ちょうどそのとき、子どもたちがわきへ行っていったのかもしれないね。げんじゅうな見はりといったところで、なにしろ年はいかない小学生のことですから、あてにはなりませんでしょう。」

「ところが、子どもというものはばかになりませんよ。何か一心になると、おとなのように、ほかのことは考えませんからね。ぼくはこういふばあいには、おとなよりも子どものほうが信用が

おけると思います。

ぼくはききょう、ここへおたずねするまえに、いろいろな用件をすませてきたのですが、その門番をつとめた子どもにも会ってみるのも、用件の一つでした。そして、よく聞きただしてみますと、その子どもは、けっして持ち場をはなれなかったし、わき見さえしなかったといいはるのです。子どもは、うそをつきませんからね。」

「で、その子どもは、わたしの姿を見たといいましたか。」

「いいえ、見なかったというのです。門をはいったものも、出たものも、ひとりもなかったと断言するのです。」

明智探偵は、そういつて、じつと春木氏の美しい顔を見つめました。

「おやおや、すると、わたしまでがなんだか魔法でも使ったようですね。これはおもしろい。ハハハ。」

春木氏はなんとなく、ぎこちない笑い方をしました。

「ハハハ……。」

明智探偵も、さもおかしそうに、声をそろえて笑いましたが、その声には、何かするどいとげのようなものがふくまれていました。

「二を引きさつて、二を加える。え、この意味がおわかりですか。すると、もともとどおりになりますね。かんたんな引き算と足し算です。」

探偵は何かなぞのようなことをいったまま、またべつの話にうつりました。

「ところで、ぼくはききょう、養源寺の墓地と篠崎家の裏庭で、お

もしろいものを発見しましたよ。なんだと思います。その間をつなぐせまい地下のぬけ穴なんですよ。

養源寺と篠崎家とは、町名がちがっているし、表門はひどくはなれていますが、裏では十メートルほどのあき地をへだたて、まるでくつついているといってもいいのです。

インド人のやつは、この、ちよつと考えるとひじょうに遠いという、人間の思いちがいを利用したのですよ。そして、そこにわけもなく地下道を作つて、あの煙のように消えうせるという魔法を使つてみせたのです。

養源寺の墓地には、古い石塔せきとうの台石を持ちあげると、その下にポツカリ地下道の入り口があいていましたし、篠崎さんの庭のほうは、穴の上に厚い板をのせて、その板の上にいちめんに草のはえた土がおいてありました。ちよつと見たのでは、ほかの地面と少しもちがいないのです。穴のある近所は、いろいろな木がしげつていて、うす暗いのですからね。なんとうまいカムフラージュビヤありませんか。

インド人は、墓地の中で消えうせたときには、この地下道から篠崎家へ逃げこみ、篠崎家の宝石をぬすんだときには、やっぱり、この道を通つて、養源寺のほうへぬけてしまったのです。その両方の地面は、表がわは、まるでちがう町なんですからね、わかりっこありませんよ。ハハハ……、これがインド人の魔術の種あかしです。」

聞いているうちに、春木氏の顔に、ひじょうなおどろきの色がうかんできました。でも、しいてそれをおしかくすようにして、「しかし、宝石をぬすむだけのために、どうしてそんな手数のか

かるしかけをしたんでしょね。もっと手がるな手段がありそんなものじゃありませんか。」

と、なじるように、ききかえました。

「そうです。おっしゃるとおり賊は、むだな手数をかけているのです。しかし、むだといえは、ほかにもっともっと大きなむだがあるのですよ。春木さん、そこがこの事件の奇妙な点です。また、じつにおもしろい点なのです。」

明智探偵が、それを説明するのがおしいというように、ことを切つて、相手の顔をながめました。

「もっと大きなむだといえますと？」

「それはね、インド人がまっばだかになつて、隅田川を泳いでみせたり、東京中の町々を、うろついてみせたりして、世間をさわがせたことですよ。」

それからまた、篠崎さんのお嬢ちゃんと同じ年ごろの子どもを、二度も、わざとまちがえてさらつたことですよ。

いったいなんのために、そんなむだなことをやってみせたのでしょうか。え、春木さん、あなたはどうかお考えになります。」

「さあ、わたしにはわかりませんね。」

春木氏は青ざめた顔で、少しそわそわしながら答えました。

「おわかりになりませんか。じゃ、ぼくの考えを申しませう。」

それはね、賊は広告をしたかったのですよ。わたしは、こんなまっ黒なインド人ですよ、わたしは篠崎家のお嬢ちゃんをさらおうとしていますよ、と、世間に向かつて、いや世間というよりも、篠崎のご主人に向かつて、これでもかこれでもかと、告げ知らせたかったのです。そして、篠崎さんが、さては、インド人が本國

から、のろいの宝石を取りもどしにやってきたんだと、信じこむようにしむけたのです。

なぜでしょう。なぜそんな、ばかばかしい広告をしたのでしょうか。

もし、ほんとうのインド人が、復しゅうのためにやってきたのなら、広告するどころか、できるだけ姿を見られないように、世間に知られないように骨を折るはずじゃありませんか。つまり、まるであべこべなのです。すると、その答えは、やっぱりあべこべでなければなりません。」

「え、あべこべといえますと。」

春木氏が、びっくりしたようにききかえました。

ちょうどそのときでした。ふたりの会話の中にあべこべということばが、そのまま形となつて、部屋のいっぽうの窓の外にあらわれたではありませんか。

ガラス窓のいちばん上のすみに、ひよいと人間の顔があらわれたのです。それが、まるで空からぶらさがったように、まっかさまなのです。つまりあべこべなのです。

その男は、ガラス窓の外のやみの中から、髪かみの毛をダランと下にたらし、まっかにのぼせた顔で、さかさまの目で、部屋の中のようすをジロジロとながめています。

いったいどうして、人の顔が、空からさがってきたりしたのでしょうか。じつに、ふしぎではありませんか。

いや、それよりもみょうなのは、春木氏がそのガラスの外のさかさまの顔を見ても、少しもおどろかなかつたことです。その顔に何か目くばせのようなことをしました。

すると、さかさまの顔は、それに答えるようにあいずのまばたきをして、そのまま空のほうへスーッと消えてしまいました。

いったいあれは何者でしょう。なんだか、ついでにぜん見たりばかりのような顔です。ああ、そうです、そうです。ほかでもない春木氏のやとっているコックなのです。さつき紅茶を運んできた召し使いなのです。

それにしても、なんとというへんてこなことでしよう。コックが家の外の空中からぶらさがってきて、窓をのぞくなんて、話に聞いたこともないではありませんか。

でも、その窓は、ちょうど明智探偵のまうしろにあつたものですから、探偵はそんな奇妙な人の顔があらわれたことなど少しも知りませんでした。

みなさん、なんだか気がかりではありませんか。明智探偵は大じょうぶなのでしょうか。もしやこの家には、何かおそろしい陰謀いんぼうがたくらまれているのではないのでしょうか。

### 屋上の怪人

明智探偵は何も知らずに話しつづけました。

「あべこべといえますのはね、この事件の犯人は、彼が見せかけようとしたり、広告したりしたのは、まるで反対なものではないかということです。」

つまり、犯人は黒いインド人ではなくて、その反対の白い日本人であった。篠崎さんのお嬢ちゃんをさらったのも、いかにも寶石につきまどうのろいのように見せかける手段で、けっして命を

とろうなどという考えはなかったということです。

それがしように、緑ちゃんも小林君も、ちゃんと助かっているじゃありませんか。もしほんとうに殺すつもりだったら、あれほど苦心してさらっておきながら、最期も見とけないで、たちさってしまうわけがないのです。

すべては世間の目を、べつの方面にそらすための手段にすぎなかったのですよ。それほどまでの苦勞をしなければならなかったのを見ると、この犯人は、よほど世間に知れわたっているやつにちがいありません。ね、そうじゃありませんか。」

「では、あなたは、犯人はインド人じゃないとおっしゃるのですか。」

春木氏が、みようにしわがれた声でたずねました。

「そうです。犯人は日本人にちがいないと思うのです。」

探偵は微笑をうかべながら、じつと春木氏を見つめました。

「でも、たしかにインド人がいたじゃありませんか。わたしが部屋を貸したことは、かりに信用してただけなくとも、この二階にいたのを子どもたちが見たということですし、聞けば、小林君とお嬢ちゃんが乗った車の運転手と助手が、いつのまにか黒ん坊にかわつていて、ふたりはそれを見たといいました。」

「ハハハ……。春木さん、それがみんなうそだったとしたら、どうでしょう。」

小林君のいうところによりますと、最初あの自動車に乗ったとき、助手席にいたのは、たしかに篠崎さんの秘書の今井君だったそうです。それがどうして、とつぜん黒ん坊にかわつたのでしょ

う。

いや、そればかりではありません。ちょうどそのころ、ほんものの今井君は、養源寺の境内に、手足をしばられてころがっていたのですよ。

ひとりの今井君が、同時に二カ所にあらわれるなんて、まったく不可能なことじゃありませんか。春木さん、この点をぼくは、じつにおもしろく思うのです。こんどの事件のなぞをとく、いちばんたいせつなかがぎが、ここにあると思うのですよ。」

それを聞くと、春木氏はニヤニヤとみような微笑をうかべて、さも感心したようにいふのでした。

「ああ、さすがは名探偵だ。あなたはそこまでお考えになつていたのですか。そして、そのふしぎはとけましたか。」

「ええ、とけましたよ。」

「ほんとうですか。」

「ほんとうですとも。」

そして、ふたりはしばらくのあいだ、だまりこんだまま、ひどいように真剣な表情になつて、にらみあつていました。まるで、おたがいの心の底を見すかそうとでもしているようです。

「説明してください。」

春木氏は青ざめた顔に、いっぱい汗の玉をうかべて、ためいきをつくようにいいました。

「自動車の中で、ふたりのものが、とつぜん黒ん坊にかわつたのは、子どもだましのようなかんたんな方法です。ほかでもありません。車が走っているあいだに、うしろの客席から見えないように、ソツとうつむいて、用意の絵の具——たぶん、すすのような

ものでしょう——それで顔と手を、まっ黒に染めたのです。

じつにわけのない話です。変装のうちで、黒ん坊に化けるほど、たやすいことはありませんからね。ぼくは念のために、小林君に、うしろから見える首すじのあたりの色はどうだったとたずねてみました。そこは洋服のえりと鳥打ち帽とで、少しも皮膚が見えないように、用心ぶかくかくしてあつたということですよ。」

「で、今井という秘書が、同時に二カ所にあらわれたなぞは？」  
春木氏は、まるでたしあいでもあるような、おそろしく力のこもつた声でたずねました。

「たいへん気がかりとみえますね、ハハハ……、それは、犯人が今井君をしばつて、その服を着こみ、顔まで今井君に化けたと考えるほかに、方法はありません。」

しかし、犯人が今井君とそっくりの顔になれるものでしょうか。ほとんど不可能なことです。でもひろい日本に、たったひとりだけ、その不可能なことができる人物があります。」

「それは？」

「二十面相です。」

探偵はじつに意外な名まえを、ズバリといつて、じつと相手の目の中のぞきこみました。息づまるようなにらみあい、三十秒ほどもつづきました。

「二十面相」とはだれでしょう。むろん読者諸君はごぞんじのことと思います。二十のちがった顔を持つといわれた、あの変装の名人です。今は獄ごく中ちゆうにつながれているはずの、希代きだいの宝石泥棒です。

「おい、二十面相君、しばらくだったなあ。」

明智探偵が、おだやかなちようしでいって、ポンと春木氏の肩をたたきました。

「な、なにをいっているんです。わたしが、二十面相ですって？」  
「ハハ、しらばっくれたって、もうだめだよ。ぼくは今しがた、刑務所へ行ってしらべてきたんだ。そして、あそこにいるのは、にせ者の二十面相だということがわかったのだ。」

きみは、さいぜんから、ぼくがなぜ、あんな話をクドクドとしていたと思うのだい。それはね、話をしながら、きみの顔を読むためだったんだよ。つまりきみを試験していたというわけさ。

するとききは、ぼくの話が進むにつれて、だんだん青ざめてきた。そわそわしだした。見たまえ、いっぱいあぶら汗が出ているじゃないか。それが何よりの自白というものだ。

二を引いて二を足すと、もともとどおりだったねえ。つまり、きみときみのコックとが、今井君と運転手に化けたうえ、少年探偵団の子どもたちをだますために、ふたりのインド人になって、みようなお祈りまでして見せた。

そのインド人が、そのまま、もとのきみとコックにもどればよかったのだから、いくら見はついても、インド人も逃げださなければ、きみも外からはいってこなかったというわけさ。もともと四人ではなくて、ふたりきりのお芝居だったんだからね。

だが、二十面相が人殺しをしないという主義をかえないのは感心だ。むろんきみは最初から小林君と緑ちゃんは、助けるつもりだったのだろうね。」

探偵がいろいろおわるかおわらぬに、部屋中にとほうもない笑い声かひびきわたりました。

「ワハハハ……えらい、きみはさすが明智小五郎だよ。よくそこまで考えたねえ。その骨折りにめんじて白<sup>はくしやう</sup>状してやろう。いかにもおれは、きみのこわがっている二十面相だよ。」

だがねえ、明智君、これはきみの大失敗を、きみ自身でしようこだてたようなものなんだぜ。わかるかい。

きみはいつか、博物館でおれを逮捕したつもりで、大いばりだったねえ。世間も、やんやと喝采<sup>かつさい</sup>したつけねえ。

ところが、あれはみんなうそだったことになるじゃないか。え、探偵さん、きみもとんだやぶへびをしたもんだねえ。

つまらないせんさくだてをしないで、おれを見のがしておけば、きみはいつまでも英雄でいられたんだぜ。それを、こんなことにしてしまつちゃ、きみの名折<sup>なお</sup>れじゃないか。博物館でとらえたのは、あれは二十面相でもなんでもない、ただのへっほこの野郎だったということを、世間に広告するようなんじゃないか。

ハハハ……、ゆかいゆかい、おれがいったい、あんなへまをする男だとも思っているのかい。白ひげの博物館長さんが、じつは怪盗二十面相だったなんて、いかにも明智先生<sup>しんせい</sup>ごのみの思いつきだ。つまりおれは、きみのとびつきそうなごちそうをこしらえて、お待ち申していたのさ。

すると案のじよう、きみはわなにかかってしまった。博物館長に化けていたおれの部下を、二十面相と思いきんでしまった。おれのほうで、そう思いこませるようにしむけたのさ。

むりもないよ。おれにはきまった顔というものがありませんからね。おれ自身でさえ、ほんとうの自分が、どんな顔なのか、わすれてしまったほどだからねえ。

だが、博物館の前で、チヨコチヨコと逃げだして、子どもたち  
に組みふせられるなんて、二十面相ともあろうものが、あんなへ  
まをするとも思っていたのかい。あれが二十面相の最後では、  
ちっとばかりかわいそうというもんだよ。」

二十面相は、まくしたてるようにしゃべりつづけて、またして  
も、われるように笑うのでした。

「たいへんな勢いだねえ。だが、昔のことはともかくとして、け  
つきよく、勝利はぼくのものだったじゃないか。せつかくのイン  
ド人の大芝居も、とうとう見やぶられてしまったじゃないか。」

明智探偵は少しもさわがず、にこにここと微笑しながら答えまし  
た。

「インド人の大芝居か。おもしろかったねえ。おれはね、篠崎氏  
があるところで、宝石のいんねん話をしているのを、すっかり聞  
いてしまったんだよ。そして、むやみにあの宝石がほしくなっ  
たのさ。そこで、宝石を手に入れたうえ、世間をアツといわせてや  
ろうと、あの大芝居を思いついたのだよ。」

インド人が犯人だとすれば、まさか二十面相をうたがうやつは  
ないからね。ただ宝石だけぬすんだのじゃあ、なにしろ金目のも  
のだから、警察の捜索がうるさいのでねえ。

ところで、きみはおれをどうしようというのだい。たったひと  
りで、二十面相の本拠へとびこんでくるなんて、少し無謀だった  
ねえ。気のどくだけれど、かえりうちだせ、きみをもうこの部屋  
から一步だつて出しゃあしないぜ。」

二十面相は、追いつめられたけだもののような、ものくるわし  
い形相で、明智探偵につかみかからんばかりです。

「ハハハ……、おい、二十面相君、ぼくがひとりぼっちかどうか、  
ちよつとうしろを向いてごらん。」

探偵のことに、二十面相はギョツとして、クルツと、うしろ  
の戸口のほうをふりむきました。

すると、ああ、これはどうでしょう。いつのまにしのびこんだ  
のか、いっぱいひらかれたドアの外には、おしかさなるように  
して、五人の制服警官が、いかめしく立ちはだかっていました。

「ちくしょうめ！ やりやあがつたな。」

二十面相は、ふいをうたれて、よろよろとよろめきながら、さ  
もくやしそうにわめきました。そして、いきなり、いっぽうの窓  
のほうへかけよります。

「おい、窓からとびおるなんて、つまらない考えはよしたほう  
がいいぜ。念のためにいっておくがね、この家のまわりは、五十  
人の警官がとりかこんでいるんだよ。」

明智探偵が二の矢をはなちました。

「ウー、そうか。よく手がまわったなあ。」

二十面相は窓をひらいて、暗やみの地上を見おろすようなしぐ  
さをしました。またクルツとこちらを向いて、

「ところがねえ、たった一つ、きみたちの手のとどかない場所が  
あるんだよ。これがおれの最後の切り札さ。どこだと思っね。そ  
れはね、こうさ！」

いいはなつたかと思うと、二十面相の上半身が、グーツと窓の  
外へ乗りだし、そのままサツとやみの空間へ消えさつてしまいま  
した。

それはまるで機械じかけの人形が、カタンとひっくりかえるよ

うな、目にもとまらぬ早わざでした。

二十面相は、いったい何をしたのでしょう。窓の外へとびおりて、逃げさるつもりだったのでしょうか。しかし、明智探偵はうそをいったのではありません。この洋館のまわりは、ほんとうに数十人の警官隊がとりまいているのです。そのかこみを切りぬけて、逃げだすことなど思いもおよびません。

明智探偵は、二十面相の姿が窓の外に消えたのを見ると、急いでそこにかけてより、地上を見おろしましたが、これはふしぎ、地上にはまったく人の姿がありません。

やみ夜とはいえ、階下の部屋の窓明かりで、庭がおぼろげに見えているのですが、その庭に、今とびおりたばかりの二十面相の姿がないのです。

「おい、ここだ、ここだ。きみはあべこべの理屈りくつをわすれたのかい。おれはとびおりたのでなくて、昇天しょうてんしているんだぜ。悪魔の昇天しょうてんさ。ハハハ……。」

空中からひびく二十面相の声に、ひょいと上を見た探偵は、あまりの意外さに、思わず「アッ。」と声をたててしまいました。

「ごらんなさい。二十面相はまるで軽業師のように、大屋根からさがった一本の綱をつかんで、スルスルと屋上へのぼって行くではありませんか。ほんとうに悪魔の昇天しょうてんです。」

探偵には見えませんでしたけれど、大屋根の上には、白い上着を着た例のコックが、足をふんばって、屋根の頂上にむすびつけた綱を、グングンと引きあげています。下からはたぐりのぼる力、上からは引きあげる力、その両ほうの力がくわわって、二十面相はみるみる大屋根にのぼりつき、かわらの上にはいあがってしま

いました。

さいぜん、窓からコックの顔がのぞいたのは、綱の用意ができましたよというあいずだったのです。彼はたぶん綱のはしにからだをくくりつけて、さかさまに窓の外へぶらさがったのでしょうか。

こうして、怪盗の姿は、またたくまに、明智探偵の目の中から消えてしまいました。しかし、屋根の上などへ逃げあがって、いったいどうしようというのでしょうか。さびしい一軒屋のことです。すから、まわりは四ほうともあき地で、町中のように屋根から屋根を伝わって逃げる手段もありません。

それに、洋館ぜんたいが、おびただしい警官隊のために、とりまかれています。まったく袋のネズミも同然ではありませんか。屋根の上には飲み水や食料があるわけでもないでしょうから、いつまでもそんな場所にいることはできません。雨でも降れば、ふたりはあわれな、ぬれネズミです。

「どうしたんです。あいつは屋根へ逃げたんですか。」

入り口にいた五人の警官が、明智探偵のそばにかけよって、口々にたずねました。

「そうですよ。じつにばかなまねをしたものです。われわれはただ、この家をとりにかこんで、じつと待っていてもいいのですよ。そのうちに、やつらはつかれきって、降参こうさんしてしまうでしょう。もう捕縛ほぼくしたも同じことです。」

探偵は、賊をあわれむようにつぶやきました。

警官たちはすぐさま階下にかけており、門の外に待機している警官隊に、このことをつたえました。いや、教えられるまでもなく、警官隊のほうでも、もうそれを気づいていました。

命令いっか、五十人あまりのおまわりさんが、表口裏口から門内になだれこみ、たちまち建物の四ほうに、アリものがさぬ円陣をはってしまいました。

指揮官中村捜査係長のさしずで、ふたりの警官が、どこかへ走りさったかと思うと、やがて、五分もたたないうちに、付近の消防署から、消防自動車が邸内にすべりこみ、機械じかけの非常ばしごがやみの大屋根めがけて、スルスルとのびあがりました。

そのはしごを、帽子のあごひもをかけ、靴をぬいで靴下ばかりになった警官が、つきからつきへとよじのぼり、懐中電燈をふり照らしながら、屋根の上の大捕り物がはじまりました。

二十面相とコックとは、手をつなぐようにして、屋根の頂上近くに立ちはだかつていました。大屋根にはいあがった警官たちは、それを遠まきにして、捕縄をにぎりしめ、ゆだんなくジリジリと賊にせまっていきます。

「ワハハハ……。」

やみの大空に、気ちがいのような高笑いが爆発しました。賊たちは、この危急ききゆうのばあいには、何を思ったのか、声をそろえて笑いだしたのです。

「ワハハハ……、ゆかいゆかい、じつにすばらしい景色だなあ。ひとり、ふたり、三人、四人、五人、おお、登ってくる、登ってくる。おまわりさんで屋根がうずまりそうだ。」

諸君、足もとに気をつけて、すべらないように用心したまえ。夜露でぬれているからね。ここからころがり落ちたら、命がないのだぜ。おお、そこへ登ってきたのは、中村警部君じゃないか。ご苦労さま。しばらくだったねえ。」

二十面相は傍若無人ぼうじやくぶじんにわめきちらしています。

「いかにもわしは中村だ。きさまも、とうとう年貢ねんぐをおさめるときがきたようだね。つまらない虚勢しんせうをはらないで、神妙しんみょうにして、最後を清くするがいい。」

中村係長は、さとすようにどなりかえしました。

「ワハハ……、これはおかしい。最後だって？ きみたちは、おれを袋のネズミとでも思っているのかい。もう逃げ場がないとも思っているのかい。ところが、おれはけっしてつかまえられないんだぜ。おれの仕事はこれからだ。あんな宝石一つぐらいで、年貢をおさめてたまるものか。」

おい、中村君、ひとつなぞをかけようか。おれたちがこの大屋根から、どうして逃げだすかというのだ。とけるかい。ハハハ……、二十面相は魔術師まじゆしなんだぜ。こんどは、どんなすばらしい魔術を使うか、ひとつあててみたまえ。」

賊はあくまで傍若無人ぼうじやくぶじんです。

二十面相は虚勢しんせうをはっているのでしょうか。いや、どうもそうではなさそうです。何かたしかに逃げだせるという確信かくしんを持っているらしくみえます。

しかし、四ほう八ほうからとりかこまれた、この屋根の上を、どうしてのがれるつもりでしょう。いったい、そんなことができのでしょうか。

### 悪魔の昇天

中村係長は怪盗が何をいおうと、そんな口あらそいには応じま

せんでした。賊はなんの意味もない、からいばりをしているのだと思つたからです。そこで、屋上の警官たちに、いよいよ最後の攻撃のさしずをしました。

それと同時に、十数名の警官が、口々に何かわめきながら、ふたりの賊をめぐけて突進しました。屋根の上の警官隊の円陣が、みるみるちぢまっていくのです。

ふたりの賊は屋根の頂上の中央に、たがいに手をとりあつて立ちすくんでいます。もうそれ以上どこへも動く場所がないのです。

「ソレッ！」

というかけ声とともに、中村係長が、ふたりに向かつてとびかかつていきました。つづいてふたり、三人、四人、警官たちは賊をおしつぶそうとでもするように、四ほうからその場所にかけてよりました。

ところが、これはどうしたというのでしょうか。中村係長がパツととびつくと同時に、ふたりの賊の姿が、まるでかき消すようになくなってしまったのです。

それとは知らぬ警官たちは、暗さのために、つい思いちがいをして係長に組みついていくというありさまで、しばらくのあいだは、何がなんだかわけのわからぬ同士討ちがつづきました。

係長のおそろしいどなり声に、ハツとしてたちなおってみますと、警官たちは、今まで自分たちのおさえつけていたのが、賊ではなくて上官であったことを発見しました。まるでキツネにつままれたような感じですよ。

「あかりだ！ あかりだ！ だれか懐中電燈を……。」

係長が、もどかしげにさげびました。

しかし、懐中電燈を持つていた人たちは、賊にとびかかるとき、屋根の上に投げだしてしまったので、まっくらな中できゆうにそれをさがすわけにもいきません。ただうろたえるばかりです。

すると、ちょうどそのときでした。屋根の上がとつぜんパツと明るくなったのです。まるで真昼のような光線です。警官たちは、まぶしさに目もくらむばかりでした。

「ああ、探照燈だ！」

だれかが、さもうれしげにさげびました。

いかにもそれは、探照燈の光でした。

見れば洋館の門内に、一台のトラックがとまっていて、その上に小型の探照燈がすえつけられ、二名の作業服を着た技手が、その強い光を屋根の斜面に向けているのでした。

これは、警視庁そなえつけの移動探照燈なのです。

中村係長は、賊が、やみの屋上へ逃げあがったと知ると、すぐさま消防署へ使いを出しましたが、そのとき、もうひとりの警官には、電話で警視庁へ探照燈をもつてくることを依頼させたのです。それが今つい、手早く探照燈を付近の電燈線にむすびつけ、屋根の上を照らしはじめたのです。

警官たちは、その真昼のような光の中で、キョロキョロと賊の姿をさがしとめました。そして、人々の目が、屋根の上から、だんだん空のほうにうつっていったときです。

「アッ、あれだ！ あれだ！」

ひとりの警官が、とんきような声をたてて、やみの大空を指さしました。

それと知ると、屋根の上の警官たちはもちろん、地上の数十名

の警官たちも、あまりの意外さに、アーツと、おどろきのさけび声をあげました。

ああ、ごらんなさい。二十面相は空にのぼっていたのです。悪魔は昇天したのです。

やみの空を、ぐんぐんとのぼっていく、大きな大きな黒いゴムまりのようなものが見えました。軽気球けいききゅうです。ぜんたいをまっ黒にぬった軽気球です。広告気球アドバタイズの二倍もある、まっ黒な怪物です。

その軽気球の下にさがったかごの中に、小さくふたりの人の姿がみえます。黒い背広の二十面相と、白い上着のコックです。彼らは警官たちをあざわらうかのように、じつと下界をながめています。

人々はそれを見て、やっと二十面相のなぞをとくことができました。怪盗の最後の切り札はこの軽気球だったのです。ああ、なんと、とつぴな思いつきでしょう。ふつうの盗賊などには、まるで考えもおよばない、ずばぬけた芸当ではありませんか。

二十面相はまんいちのばあいのために、この黒い軽気球を用意しておいたのです。そして、今夜、明智探偵と会う少しまえに、その軽気球にガスを満たし、屋根の頂上につなぎとめておいたのです。ぜんたいがまっ黒にぬってあるものですから、こんなやみ夜には、通りがかりの人に発見される心配もなかったわけです。

いや、通りがかりの人どころではありません。屋根の上の警官たちにさえ、この気球は少しも気づかれませんでした。それというのも、さすがの警官たちも、まさか、軽気球とは思ひもよらぬものですから、屋根ばかりを見ていて、その上のほうの空などは、ながめようともしなかつたからです。また、たとえながめたとし

ても、やみの中の黒い気球がはつきり見わけられようとも考えられません。

ふたりの賊は警官たちに追いつめられたとき、とつさに軽気球のかごとびのり、つなぎとめてあった綱を切断したのでしよう。それが暗やみの中の早わざだったものですから、とつぜんふたりの姿が消えうせたように感じられたのにちがいありません。

中村係長は、足ずりをしてくやしがりましたが、賊が昇天してしまつては、もう、どうすることもできないのです。五十余名の警官隊は、空をあおいで、口々に何かわけのわからぬさけび声をたてるばかりでした。

二十面相の黒軽気球は、下界げかいのおどろきをあとにして、ゆうゆうと大空にのぼっていきます。地上の探照燈は、軽気球とともに高度を高めながら、暗やみの空に、大きな白いしまをえがいています。

その白いしまの中を、賊の軽気球は、刻一刻、その形を小さくしながら、高く高く、無限の空へと遠ざかっていきました。

かごの中のふたりの姿は、とつくに見えなくなっていました。やがて、かごそのものさえも、あるかなきかに小さくなり、しまいには、軽気球が、テニスのボールほどの黒い玉になって、探照燈の光の中をゆらめいていましたが、それさえも、いつしか、やみの大空にとけこむように、見えなくなっていました。

### 怪軽気球の最後

「二十面相、空中にのがる」との報が伝わると、警視庁や各警察

署はいうまでもなく、各新聞社の報道陣は、たちまち色めきだちました。

時をうつさず、警視庁直脳部の緊急会議がひらかれ、その結果、探照燈によって賊のゆくえをつきとめることになりました。

まもなく東京付近の空には、十数条の探照燈の光線が入りみだれました。戦争のようなさわぎです。都内の高層建築物の屋上からも、いくつかの探照燈が照らしだされ、警視庁や新聞社のヘリコプターは、夜が明けるのを待つてとびだすために、エンジンをあたたためて待機の姿勢をとりました。

しかし、これほどの大さわぎをしても、黒い軽気球は、どうしても見つかることができませんでした。その夜は、空いちめんに雲が低くたれていましたので、軽気球は雲の中へはいってしまつたのかもしれない。けつきよく、せつかくの空中搜索も夜の明けきるまでは、なんの効果もなく終わりました。

ところが、その翌朝のことです。埼玉県熊谷市くまがや付近の人々は、夜のうちに晴れわたつた青空に、何かまつ黒なゴム風船のようなものがとんでいるのを発見して、たちまち大さわぎをはじめました。

その朝の新聞が、ゆうべの東京のできごとを大きく書きたてていたのですから、人々はすぐ黒い風船の正体をさとることができたのです。

賊の軽気球は、夜中から吹きはじめた東南の風に送られて、夜のうちにここまでただよつてきたものにちがいありません。

「二十面相だ。二十面相が空をとんでいるのだ。」

熊谷市内はもちろん、付近の町や村へも、そういううぶきみな声

がひろがっていき、人々は家をからにして、街路へ走りいで、あるいは屋根の上のぼつて、青空にうかぶ黒い風船をながめしました。

空には、かなり強い風が吹いているらしく、軽気球は、ひじょうな速度で、北西の方向にとんでいます。みるみるうちに村を越え、森を越え、熊谷市の上空を通過して、群馬県のほうへとびさつていくのです。

熊谷市の警察署員は、とびさる風船をながめて、地だんだをふんでくやしがりしましたが、いくらくやしがつても、高射砲で射撃とすこともできませんし、ヘリコプターをとばして機関銃で射撃するなどというとは思ひもありません。ただ手をつかねて空を見まもるほかはないのでした。しかし、このことが電話によって東京に伝えられますと、新聞社は、待つてましたとばかりに、それぞれ所属のヘリコプターに出勤を命じました。賊をとらえる望みはなくても、せめて怪軽気球を追跡して、その写真を撮影したり、記事をつくつたりして、事件の経過を報道するためです。

つごう四台のヘリコプターが、相前後して東京の空を出発しました。そして、おそろしいスピードをだして、ちょうど熊谷市と高崎市たかさきのなかほどの空で、賊の軽気球に追いついてしまったのです。

それから、群馬県南部の大空に、ときならぬ空中ページェントがはじまりました。

四台のヘリコプターは、四ほうから賊の軽気球をつつむようにして、とんでいます。しかし、プロペラのない軽気球には、このかこみをやぶつてのがれる力がありません。風のまにまに吹きな

がされているばかりです。

二十面相は、今や自由をうばわれたも同然です。とはいえ、ヘリコプターのほうでこれをきゆうにとらえる方法ありません。ただ、風船と同じ速度で飛行しながら、こんきよく追跡をつづけるほかはないのです。

このふしぎな空中ページェントの通過する町や村の人たちは、仕事も何もうちすてて、先をあらそって家の外にとびだし、空を見あげて口々に何かさげぶのでした。畑の農民もすくわを投げだして空を見まもっています。小学校のガラス窓からは、男の子や女の子の顔が、鈴なりになっています。ちょうどその下を通りすぎる汽車の窓にも、空を見あげる人の顔ばかりです。

四台のヘリコプターは、ひし形の位置をとって、綱をはったように、黒い軽気球をまんなかにはさみながら、どこまでもどこまでもとんでいきます。

ときには一台のヘリコプターが、賊をおどかすように、スーツと軽気球の前をかすめたりします。二十面相は、どんな気持でいるのでしょうか。この空の重囲じゅういにおちいっても、まだ逃げおおせるつもりなのでしょう。

やがて、高崎市の近くにさしかかったとき、とうとう二十面相の運のつきがきました。黒い軽気球はとつぜん浮力をうしなったように、みるみる下降をはじめたのです。

気球のどこかがやぶれて、ガスがもれているようです。おお、ごらんなさい。今まではりきっていた黒い気球に、少しずつしわがふえていくではありませんか。

おそろしい光景でした。一分、二分、三分、しわは刻一刻とふ

えていき、気球はゴムまりをおしつぶしたような形にかわってしまいました。

風が強いものですから、下降しながらも、高崎市の方角へ吹きつけられていきます。四台のヘリコプターは、それにつれて、かじを下に向けながら、ひし形の陣形をみだしませんでした。

高崎市の丘の上には、コンクリート造りの巨大な観音像が、雲をつくばかりにそびえています。その前の広場にも、奇怪な空のページェントを見物するために、多くの人がむらがついていたのですが、その人々は、どんな冒険映画にも例のないような、胸のドキドキする光景を見ることができました。

晴れわたった青空を、急降下してくる四台のヘリコプター、その先頭には、しわくちやになったまっ黒な怪物が、もうまったく浮力をうしなつて、ひじょうな速力で地上へとついでいくのです。

傷ついた軽気球は、大観音像の頭の上にせまりました。サーツと吹きすぎる風に、しわくちやの気球が、いまにも観音さまの顔に巻きつきそうに見えました。

「ワーツ、ワーツ。」というさげび声が、地上の群衆の中からわきおこります。

気球は観音さまの顔をなで、胸をこすつて、黒い怪鳥のように、地面へと舞いくだつてきました。そして、また、「ワーツ。」とさげびながらあとじさりする群衆の前に、横なぐりに吹きつけられて、とうとう黒いむくろをさらしたのでした。

軽気球のかごは、横だおしになって地面に落ち、風に吹かれるやぶれ気球のために、ズルズルと五十メートルほども引きずられ

て、やっと止まりました。中のふたりはかごといっしょにたおれたまま、気をうしなったのか、いつまでたっても起きあがるようすさえ見えません。

新聞社の四台のヘリコプターは、賊の最期を見とけると、この付近に着陸場もないものですから、そのまま、また四羽のトビのように、青空高く舞いあがって、東京の方角へと、とびさりました。

時をうつさず、群衆をかきわけて、数名の警官が、黒い気球の前にあらわれました。高崎の警察署では、二十面相逃亡のことは、ゆうべのうちに通知を受けていましたので、遠くの空に怪気球があらわれると、すぐそれと察して、気球が下降をはじめたころには、警官隊の自動車が、観音像の地点へと走っていたのでした。

警官たちは横だおしになった軽気球のかごにかけよって、かごから半身を乗りだして気をうしなっている二十面相と、白い上着のコックとを、いきなりだきおこそうとしました。

ところが、そのつぎの瞬間には、なんだかみようなことがおこったのです。

ふたりの賊を、なかばだきおこした警官たちが、何を思ったのか、とつぜん手をはなしてしまいました。すると、ふたりの賊はコツンと音をたてて、地面へ投げだされたのです。

「こりゃなんだ。人形じゃないか。」

「人形が風船に乗ってとんでいたのか。」

警官たちは、口々にそんなことをつぶやきながら、あっけにとられて顔を見あわせました。

ああ、なんとということでしょう。せつかくとらえた賊は、血の

かよった人間ではなくて、ろう細工ざいくの人形だったのです。よく洋服屋のショーウィンドーに立っているようなマネキン人形に、それぞれ黒い背広と白い上着とが着せてあったのです。

二十面相の悪知恵には奥底がありませんでした。警察はもとより、新聞社も、東京都民も、熊谷市から高崎市にかけての町々村々の人々も、二十面相のために、まんまと、いっぱい食わされたわけです。ことに四つの新聞社のヘリコプターは、まったく、むだばねを折らされてしまったのです。

いや、そればかりではありません。二十面相は、そのうえに、もっとあくどいいたずらさえ用意しておいたのです。

「おや、なんだか手紙のようなものがあるぜ。」

ひとりの警官が、ふとそれに気づいて、二十面相の身がわりになった人形の上にかがみこみ、その胸のポケットから一通の封書をぬきとりました。

封筒の表には「警察官殿」と記し、裏には「二十面相」と署名してあるのです。封をひらいて読みくだしてみますと、そこにはつぎのような、にくにくしい文章が書きつづつてありました。

ハハハ……、ゆかいゆかい、諸君は、まんまといっぱい食ったね。二十面相の知恵の深さがわかったかね。

諸君が黒い風船を、やっきとまって追っかけまわすありさまが、目に見えるようだ。

そして、やっつとらえたと思つたら、人形だったなんて、じつにゆかいじゃないか。そ

れを思うと、おれは吹きだしそうになるよ。

ところで、明智君には少しお気のどくみたいだったねえ。さすが名探偵といわれる

ほどあって、おれの正体を見やぶったのは感心だけれど、そいつが、とんだやぶへびになつてしまった。明智君が、おせっかいさえしなけりや、おれのほうでも、こんなさ

ぎはおこさなかつただろうからね。しかし、もう今となつては、とりかえしがつかない。明智君のおかげで、二十面相は

また、大っぴらに仕事ができるというもんだよ。こうなれば、けつしてえんりよはしないぜ。これからは<sup>おお</sup>大手をふつて、二十面相の活動をはじめんだ。

明智君によろしくいつてくれたまえ。このつきには、おれが、どんなすばらしい活動をはじめるか、よく見ていてくれつてね。

じゃあ、諸君、あばよ。

二十面相は、まえもつてこうなることを見こしてこの手紙を書き、人形にもたせておいたのです。手紙を読みおわると、警官は、あまりのことに、あいた口がふさがりませんでした。

ああ、なんとという大胆不敵、傍若無人の怪物でしょう。こんどこそは、さすがの名探偵明智小五郎も、賊の先まわりをする力がなかつたのです。黒い風船の手に、まんまと、ひっかかつてし

まつたのです。

では、あるとき、洋館の屋根の上から、賊はどこへ逃げたのかといえますと、あとになってしらべた結果、こういうことがわかりました。あの洋館の屋根の屋上には、十枚ほどのかわらが、箱のふたのようにひらくしかけになつていて、その下に屋根裏の密室がこしらえてあつたのです。

賊は中村係長にとらえられそうになつたとき、まず人形をのせた風船の綱を切つておいて、すばやくこの屋根裏部屋へ姿をかくしたのですが、なにしろ、あんなやみ夜のことですから、ものなれた中村係長にも、そこまで見やぶることはできなかつたのです。

人々は、ただもう、黒い風船に気をとられてしまいました。空中へ逃げだすなんて、いかにも二十面相らしい、はなやかな思いつきですから、まさか、それがうそだろうとは、考えもおよばなかつたのです。

屋根裏の密室だけでしたら、すぐに発見されていたにちがいありません。屋根の上で人間が消えうせたとしたら、だれでもまず、かわらにしかけがあるのではないかとうたがうでしょうから

ね。ところが、このなんでもないかくれ場所が、いっぽうの黒い軽気球というずばぬけた思いつきによつて、まったく人の注意をひかなくなつてしまつたのです。しかも、風船のかごの中には、二十面相やその部下とそっくりの人形が乗つていたのですからね。

さて、軽気球がとびざりますと、洋館をとりかこんでいた警官隊は、ひとり残らず引きあげてしまいました。明智探偵も、ついでんをして、そこを立ちさつたのです。

そのあとで、二十面相とその部下とは、屋根裏部屋で姿をかえ  
たうえ、例の麻なわを伝わって地上におり、大手をふって門を出  
ていったというわけです。なんとまあ、あざやかな手品使いでは  
ありませんか。

読者諸君、怪盗二十面相は、こうしてふたたび、わたしたちの  
前にあらわれました。そして、名探偵明智小五郎に、にくにくし  
い挑戦状をつきつけたのです。

むろん、指をくわえてひっこむようないくじのない明智探偵で  
はありません。今や探偵と怪人とは、まったく新たな敵意をもつ  
て相對することになったのです。こんどこそ、死のものぐるいの  
知恵くらべです。一騎うちです。

### 黄金の塔

二十面相は、いよいよ正体をあらわしました。そして、これか  
らは大つぴらに、怪盗二十面相として、例の寶石や美術品ばかり  
をねらう、ふしぎな魔術の泥棒をはじめようというわけです。

新聞によって、これを知った東京都民は、黒い魔物のうわさを  
聞いたときにもまして、ふるえあがってしまいました。ことに美  
術品をたくさんたくわえている富豪などは、心配のために、夜も  
おちおちねむられないというありさまです。なにしろ、政府の博  
物館までおそって、美術品をすっかりぬすもうとしたほどの、お  
そろしい大盗賊ですからね。

さて、軽気球さわぎがあつてから、十日ほどのちのことです。  
東京のある夕刊新聞が、とつぜん、都民をアツといわせるような、

じつにおそろしい記事を掲載しました。その記事というのは、

わが社編集局は、今、こんぎょう 暁、怪盗二十面相から一通の書状を受  
けとった。怪盗は所定

の広告料金を封入して、その書状の全文を広告面に掲載してく  
れと申しこんできたが、

本紙に盗賊の広告をのせることはできない。むろんわが社はこ  
の奇怪な申しこみを

謝絶した。

右書状には、二十面相は、本月二十五日深夜、おおとり 大鳥時計店所  
蔵の有名な「黄金の塔」をぬすみだす決意をした。従来の実例  
によつてもあきらかなとおり、二十面相は、

けつして約束をたがえない。明智小五郎君をはじめ、その筋で  
は、じゅうぶん警戒

されるがよろしかろう、という大胆不敵の予告が記されていた。

これは何者かのいたずらかもしれない。しかし、従来の二十  
面相のやり口を考えると、かならずしもいたずらとのみ言いき  
れないふしがあるので、わが社は、この書状を

ただちに警視庁当局に提出し、いっぽう大鳥時計店にも、この  
おもむきを報告した。

と記し、つづいて「黄金の塔」の由来や、二十面相の従来の手口、  
明智名探偵の訪問記事などを、ながながと掲載しました。社会面  
六段ぬぎの大見出しで、明智探偵の大きな写真までのせているの  
です。

新聞記事には、有名な「黄金の塔」とあります。いったい、どんなふうになら有名なのでしょう。それについて、少し説明しておかなければなりません。

大鳥時計店というのは、中央区の一角に高い時計塔をもつ、東京でも一―二をあらそう老舗しんせです。その主人大鳥清蔵老人は、ひじょうにはすぎなかわり者で、大の浅草観音の信者なのです。あるとき、浅草観音の五重の塔の模型を商売ものの純金でつくらせ、家宝にすることを思いました。

そして、できあがったのは、屋根の広さ約十二センチ平方、高さ七十五センチという、りっぱな黄金塔で、こまかいところまで、浅草の塔にそっくりの、精巧な細工せいこうでした。しかも、塔の中はからっぽではなく、すっかり純金でうずまっているのですから、ぜんとしたいの目方は八十キロをこえ、材料の金だけでも時価五百万円ほどの高価なものでした。

ちょうどこの黄金塔ができあがったころ、同業者の銀座の某時計店に、ショーウィンドーやぶりの賊があつて、そこに陳列してあつた二百万円の花がぬすまれたというさわぎがおこつたものですから、大鳥氏は、せっかく苦心してつくらせた黄金塔が、同じようにぬすまれてはたいへんだと、今まで店の間にかざつておいたのを、にわかに奥まった部屋にうつし、いろいろな防備をほどこし、盗難にそなえました。

その奥座敷は十畳の日本間なのですが、まず、まわりのふすまや障子をぜんぶ、がんじょうな板戸にかえ、それに、いちいち錠前をつけ、かぎは主人と支配人の門野老人かどののふたりだけが、はだ身はなさず持っていることにしました。これが第一の関所です。



もし賊が、この板戸をどうかしてひらくことができたとしても、その中には、さらに第二の関所があります。それは部屋のまわりの畳の下に電気じかけがあつて、賊がどこからはいったとしても、その部屋の畳をふみさえすれば、たちまち家中のベルが、けたたましく鳴りひびくという装置なのです。

しかし、関所はこの二つだけではありません。第三のいちばんおそろしい関所が、最後にひかえています。

黄金塔は、広さ六十センチ四方、高さ一メートル三十センチほどの、長い箱の形をした、りっぱな木製のわくの中に入れて、その部屋の床の間に安置してあるのですが、この木のわくが、くせものなのです。

本来ならば、このわくには四ほうにガラスをはるわけですが、大鳥氏はわざとガラスをはずさず、だれでも自由に黄金塔に手をふ

れることができるようにしておきました。そのかわりに、わくの四すみの太い柱のかけに、赤外線防備装置という、おそろしいしかけがかくされていたのです。

四本の柱に三カ所ずつ、つごう十二カ所に、赤外線を発射する光線をとって、一口にいえば、黄金塔の上下左右を、目に見えぬ赤外光線のひもでつつんでしまつてあるわけです。そして、もし、だれかが黄金塔に手をふれようとして、赤外線をさえぎりますと、べつの電気じかけに反応して、たちまちベルが鳴りひびくと同時に、そのさえぎつたものの方向へ、ピストルが発射されるといふおそろしい装置です。木のわくの上下のすみには、外部からは見えぬように、八丁の小型ピストルが、実弾をこめて、まるで小さな砲台のようにすえつけてあるのです。ただ、盗難をふせぐだけならば、黄金塔を大きな金庫の中へでも入れてしまえばいいのですが、大鳥氏は、せっかくこしらえさせたじまんの宝物を、人にも見せないで、しまいこんでおく気にはなれませんでした。そこで、気心の知れたお客さまには、じゅうぶん見せびらかすことができるように、こんな大げさな装置を考案したわけです。むろん、お客さまに見せるときは、わくの柱のかけにある秘密のボタンをおして、赤外線の放射をとめておくわけです。

高価な純金の塔そのものも、たいへん世間をおどろかせました。この念入りの防備装置のうわさが、いつそう世評を高められたのです。むろん、大鳥時計店では防備装置のことをかたく秘密にしておいたのですけれど、いつとはなく輪に輪をかけたうわさとなつて、世間にひろがり、塔のおいてある部屋にはいると、足がすくみ、からだがかしびれてしまうのだとか、鋼鉄でできた人造人間

が番をしていて、あやしいものがしのびよれば、たちまちつかみ殺してしまうのだとか、いろいろの奇妙な評判がたつて、それが新聞にものり、今ではだれ知らぬものもないほどになっていました。

二十面相はそこへ目をつけたのです。一夜に千万円もの美術品をぬすんだこともある二十面相のことですから、黄金の塔そのものは、さほどほしいとも思わなかつたでしょうが、それよりも、うわさに高いげんじゅうな防備装置にひきつけられたのです。人のおそれる秘密のしかけをやぶつて、まんまと塔をぬすみだし、世間をアツといわせたいのにちがいありません。

「どうだ、おれには、それほどの腕まえがあるんだぞ。」

と、いばつてみせたいのです。警察や明智名探偵を出しぬいて、「ざまをみろ。」と笑いたいのです。二十面相ほどの盗賊になりますと、盗賊にもこんな負けぬ気があるのです。

名探偵明智小五郎は、その夕刊新聞の記事を読みました。翌日には、大鳥時計店の主人が、わざわざ探偵の事務所をたずねてきて、黄金塔の保護を依頼して帰りました。そして、名探偵は、むろんこの事件をひきうけたのです。

前の事件で、軽気球のトリックにかかったのは、中村捜査係長はじめ、警官隊の人たちでしたが、明智にも責任がないとはいえません。賊に出しぬかれたうらみは、人いちばい感じていられるのです。こんどこそ、みごとに二十面相をとらえて恥辱をそそがなければなりません。名探偵のまゆには深い決意の色がただよっていました。

ああ、なんだか心配ではありませんか。怪盗二十面相は、どん

な魔術によって、黄金塔をぬすみだそうというのでしょうか。名探偵は、はたしてそれをふせぐことができるでしょうか。探偵と怪人の一騎うちの知恵くらべです。悪人は悪人の名まえにかけて、名探偵は名探偵の名まえにかけて、おたがいに、こんどこそ負けではならぬ真剣勝負です。

### 怪少女

それと知った助手の小林少年は、気が気ではありません。どうかこんどこそ、先生の手で二十面相がとらえられますようにと、神さまに祈らんばかりです。

「先生、何かぼくにできることがありますたら、やらせてください。ぼく、こんどこそ、命がけでやります。」

大鳥氏がたずねてきた翌日、小林君は明智探偵の書齋へはいって、熱誠を面にあらわしてお願いました。

「ありがとうございます。ぼくは、きみのような助手を持ってしあわせだよ。」

明智はイスから立ちあがって、さも感謝にたえぬもののように、小林君の肩に手をあてました。

「じつは、きみにひとつたのみたいことがあるんだよ。なかなか大役だ。きみでなければできない仕事なんだ。」

「ええ、やらせてください。ぼく、先生のおっしゃることなら、なんだってやります。いったい、それはどんな仕事なんです。」

小林君はうれしさに、かわいいほおを赤らめて答えました。

「それはね。」

明智探偵は、小林君の耳のそばへ口を持って行って、なにごと

かささやきました。

「え？ ぼくがですか。そんなことできるでしょうか。」

「できるよ。きみならば大じょうぶできるよ。ばんじ、用意はおばさんがしてくれるはずだからね。ひとつうまくやってくれたまえ。」

おばさんというのは、明智探偵の若い奥さんふみよ文代さんのことです。

「ええ、ぼく、やってみます。きっと先生にほめられるように、やってみます。」

小林君は、決心の色をうかべて、キツパリと答えました。

名探偵は何を命じたのでしょうか。小林君が「ぼくにできるでしょうか。」と、たずねかえしたほどですから、よほどむずかしい仕事にちがいありません。いったい、それはどんな仕事なのでしょうか。読者諸君、ひとつ想像してごらん下さい。

それはさておき、いっぽう怪盗の予告を受けた大鳥時計店のさわぎはひととおりではありません。十名の店員が交代で、寝ずの番をはじめ、警察の保護をおおいで、表裏に私服刑事の見はりをつけてもらうやら、そのうえ民間の明智探偵にまで依頼して、もうこれ以上、手がつくせないというほどの警戒ぶりです。

主人の大鳥清蔵氏は考えました。

「奥座敷には例の三段がまえのおそろしい関所があるのだし、そのうえ店員をはじめ、警察や私立探偵の、これほどの警戒なのだから、いくら二十面相が魔法使いだといっても、こんどこそは手も足も出ないにきまっている。わしの店は、まるで難攻不落の堡壘ほうらいのようなもんだからな。」

大鳥氏は、それを考えると、いささか得意でした。「二十面相め、やれるものなら、やってみろ。」といわぬばかりの勢いでした。

しかし、日がたつにつれて、この勢いは、みじめにもくずれていきました。安心が不安となり、不安が恐怖となり、大鳥氏は、もういても立ってもいられないほど、いらいらしはじめたのです。

それというのは、二十面相が毎日毎日、ふしぎな手段によって、犯罪の予告を、くりかえしたからです。

夕刊新聞に予告の記事が発表されたのは、十六日のことで、問題の二十五日までは九日間のようがであったのですが、二十面相は、あの新聞記事だけでは満足しないで、それ以来というもの、毎日毎日、「さあ、もうあと八日しかないぞ。」「さあ、あと七日しかないぞ。」と大鳥氏へ、残りの日数を知らせてくるのです。

最初は、大きな字でただ「8」と書いたハガキが配達されました。そのつぎの日は、公衆電話から電話がかかってきて、主人が電話口に出ますと、先方はみょうなしわがれ声で、「あと七日だけ。」といったまま、ぷつぷつと電話を切ってしまいました。

その翌朝のこと、店の戸をあけていた店員たちが、何か大さわぎをしていますので、行ってみますと、正面のショーウィンドーのガラスの、まんなかに、白墨で、大きな「6」の字が書きなぐってあったではありませんか。

賊の予告は、最初はハガキ、つぎは電話、そのつぎはショーウィンドーと、一日ごとに大鳥時計店へ近づいてきました。つぎには店の中までもはいつてくるのではないのでしょうか。

そして、その翌朝のことです。顔を洗って、店へ出てきた店員

たちは、アツとおどろいてしまいました。店には大小さまさまの時計が、あるいは柱にかけ、あるいは棚に陳列してあるのですが、ゆうべまでカチカチと動いていたそれらの時計が、どれもこれも止まってしまって、そのうえ申しあわせたように、短針が五時を示しているのです。

懐中時計や、腕時計はべつですが、目ざまし時計も、ハト時計も、オルゴール入りの大理石の置き時計も、正面にある、二メートルほどの大振り子時計も、大小無数の時計の針が、いつせいに正五時をさしているありさまは、何かしらお化けめいて、ものすごいほどでした。

いうまでもなく、「もうあと五日しかないぞ。」という、二十面相の予告です。怪盗は、とうとう店内までしのびこんできたのです。

それにしても、げんじゅうな戸じまりがしてあるうえ、表と裏には私服刑事が、店内には寝ずの番人が見はっている中を、賊は、どうしてはいりこむことができたのでしょうか。はいりこんだばかりか、いく十という時計を、だれにもさとられぬように、どうして止めることができたのでしょうか。

店員たちは、ひとりひとり、げんじゅうな取りしらべをうけましたが、べつにあやしい者もありません。すると、二十面相は幽霊のように、しめきった雨戸のすきまからでもはいつてきたのでしょうか。そして、だれの目にもふれない、フワフワした気体のようなものになって、一つ一つ時計を止めてまわったのでしょうか。

しかも、うすきみの悪い怪盗の予告は、それで終わったわけ

はありません。つきには、さらにいっそう奥深く、賊の魔の手がのびてきました。

その翌早朝のこと、大鳥氏は、下ばたらきの小娘の、けたたましいさげび声に目をさました。その声が、黄金塔の安置してある部屋の方角から、聞こえてきましたので、大鳥氏はハツとしてとびおきると、そのへんに居あわせた店員をともなって、息せききってかけつけました。

例の十畳の座敷の前までいってみますと、そこに、つい四日はかり前にやといわれた、十五―六のかわいらしいお手伝いさんが、おどろきのあまり口もきけないようすで、しきりと座敷の板戸を指さしていました。

板戸の表面には、またしても白墨で、二十センチ四ほうほどの、大きな「4」いう字が書いてあるではありませんか。ああ、二十面相は、とうとう、この奥まった部屋までも、ふみこんできたのです。

大鳥氏はそれを見ますと、もうびっくりしてしまつて、もしや黄金塔がぬすまれたのではないかと、急いでかぎをとりだし、板戸をあけて床の間を見ましたが、黄金塔はべつじょうなく、さんぜんとかがやいています。さすがの賊にも、二段がまえの防備装置をやぶる力はなかつたものとみえます。

しかし、ここまでしのびこんでくるようでは、もういよいよゆだんがなりません。刑事や店員の見はりなどは、このお化けのよくな怪盗には、少しのききめもありはしないのです。

「今夜から、わしがこの部屋で寝ることにしよう。」

大鳥氏は、とうとうたまたまらなくなつて、そんな決心をしました。

そして、その夜になりますと、黄金塔の部屋に夜具を運ばせて、宵のうちから床にはいり、すきなたばこをふかしながら、まじまじと宝物の見はり番をつとめるのでした。

十時、十一時、十二時、今夜にかぎつて、時計の進むのがかばかしく、おそいように感じられました。やがて、一時、二時、むかしのことはいえば、丑三つ時です。もう電車の音も聞こえません。自動車の地ひびきもまれになりました。昼間のさわがしさというものが、まったくとだえて、都内の中心の商店街も、水の底のような静けさです。

ときどき、板戸の外の廊下に、人の足音がします。寝ずの番の店員たちが、時間をきめて、家中を巡回しているのです。

店の大時計が三時を打ちました。それから、十時間もたつたかと思うころ、やっと四時です。

「おお、もう夜明けだ。二十面相め、今夜は、とうとうあらわれなかつたな。」

そう思うと、大鳥氏は、にわかになむけがさしてきました。そして、もう大じょうぶだという安心から、ついウトウトねむりこんでしまったのです。

どのくらいねむつたのか、ふと目をさますと、あたりはもう明るくなっていました。時計を見れば、もう六時半です。

もしやと床の間をながめました。大じょうぶ、大じょうぶ、黄金塔はちゃんとそこに安置されたままです。

「どうだ。いくら魔術師でも、この部屋の中までは、はいれまい。」

大鳥氏は、すっかり安心して、「ウーン」と一つのびをしました。そして、腕をもとにもどそうとして、ヒョイと左のてのひら

を見ますと、おや、なんででしょう？ てのひらの中が真っ黒に見えるではありませんか。

へんだなと思って、よく見なおしたとき、大鳥氏は、あまりのことに、「アッ。」とさげんで、床の上にとびおきてしまいました。

みなさん、大鳥氏のとてのひらには、いったい何があったと思います。そこには、いつのまに、だれが書いたのか、墨黒々と、大きな「3」の字があらわれていたのです。二十面相はどうとう、この部屋の中までも、しのびこんできたとしか考えられません。大鳥氏は、背中に氷のかたまりでもあてられたように、ゾーツと寒けを感じないではいられませんでした。

それと同時に、部屋のいっぼうでは、もう一つ、みょうなことがおこっていました。大鳥氏の目のとどかないすみのほうの板戸が細めにひらかれ、そのすきまから、だれかが部屋の中をじっとのぞいているのです。

ほおのふつくらした、かわいらしい顔。なんだか見おぼえのある人物ではありませんか。ああ、そうです。それはきのうの朝、板戸の文字を発見してさわぎたてた、あの少女なのです。数日前にやとわれたばかりの、十五―六のお手伝いさんなのです。

少女は、てのひらの文字に青ざめている大鳥氏を、なんだかおかしそうに見つめていましたが、やがて、サツと顔をかくすと、板戸を音のせぬよう、ソロソロとしましました。

この少女は、かぎのかけてある板戸を、どうしてひらくことができたのでしょうか。いや、それよりも、まだやとわれたばかりの小娘のくせに、なんとというあやしげなふるまいをするやつでしょう。

大鳥氏も店員も、まだ、このことを少しも気づいていないようですが、わたしたちは、この少女の行動を、ゆだんなく見はつていなければなりません。

奇妙なばかりごと

「あと、もう三日しかないぞ。」

てのひらに書かれた予告の数字に、主人大鳥氏はすっかりおどかされてしまいました。

賊は黄金塔の部屋へ苦もなくしのびいったばかりか、ねむっている主人のとてのひらに、筆で文字を書きさえたのです。

板戸と非常ベルの二つの関所は、なんの効果もなかったのです。このぶんでは、第三の関所もうっかり信用することはできません。魔術師二十面相にかかつては、どんな科学の力もききめをあらわさないかもしれません。二十面相は何か気体のようにフワフワした、お化けみたいなものに、変身しているとしか考えられないのですから。

大鳥氏はさまざまに考えまどいながら、黄金塔の前にすわりつづけていました。一刻も目をはなす気になれないのです。目をはなせば、たちまち消えうせてしまうような気がするのです。

さて、その日のお昼すぎのことでした。大鳥時計店の支配人の門野老人が、何か大きなふるしき包みをかかえて、店員たちの目をしのぶようにして、奥の間の大鳥氏のところへやってきました。

門野支配人は、昔ふうにいえば、この店の大番頭で、おとうさんの代から二代つづいて番頭をつとめているという、大鳥家の家

族同様の人物ですから、したがって主人の信用もひじょうにあつく、この人だけには板戸の合いかぎもあずけ、そのほかの防備装置のとりあつかい方も知らせてあるのです。

ですから、支配人は、いつでも自由に奥座敷にはいることができます。畳の非常ベルのしかけも、柱のかくしボタンをおして、電流を切つてしまえば、いくら部屋の中を歩いて、少しも物音はしないのです。

門野支配人は、そうしていくとも板戸を出たりはいったりして、人目をしのびながら、まず一番に、メートルもある細長いふろしき包みを、それから形は小さいけれど、たいへん重そうなふろしき包みを五つ、つぎつぎと座敷の中へ運びいれました。

「おい、おい、門野君、きみはいったい何を持ちこんできたんだね。商売の話なら、べつの部屋にしてほしいんだが。」

主人の大鳥氏は、支配人のみょうなしぐさを、あつけにとられてながめていましたが、たまりかねたように、こう声をかけました。

すると、支配人は、板戸をしめきつて、主人のそばへ、いざりよりながら、声をひそめてささやくのです。

「いや、商談ではございません。だんなさま、おわずれになりましたか、ほら、わたくしが、四日ほどまえに申しあげたことを」

「え？ 四日まえだって、ああ、そうか。黄金塔の替え玉の話だったね。」

「そうですよ。だんなさま、もうこうなつては、あのほかに手はございませんよ。賊は、やすやすとこの部屋へ、はいってまいったじゃございませんか。せつかくの防備装置も、なんのききめも

ありません。このうえは、わたくしの考えを実行するほかに、盗難をふせぐ手だてはありません。相手が魔法使いなら、こちらも魔法を使うまででございますよ。」

支配人は、しらが頭をふりたてて、いっそう声をひくめるのです。

「ウン、今になってみると、きみの考えにしたがつておけばよかったと思うが、しかし、もう手おくれだ。これから黄金の塔の替え玉をつくるなんて、むりだからね。」

「いや、だんなさま、ご心配ご無用です。わたくしは、まんいちのばあいを考えまして、あのとときすぐ細工人のほうへ注文をしておきましたのですが、それが、ただ今できあがつてまいりました。これがその替え玉でございますよ。」

支配人は、ほこらしげに、重そうな五つのふろしき包みを指さしてみせました。

「ほう、そいつは手まわしがよかつたね。だが、その細工人から賊のほうへもれるようなことは……。」

「大じょうぶ。そこはじゅうぶん念をおして、かたく秘密を守らせることにいたしてあります。」

「それじゃ、ひとつ替え玉というものを見せてもらおうか。」

「よろしゅうございます。しかし、もし家の中に賊のまわし者がありましてはたいへんでございますから、念には念をいれまして……。」

支配人はいいながら、立ちあがつて、板戸をひらき、外にだれもないことをたしかめると、げんじゅうに内がわからかぎをかけるのでした。

そして、主人とふたりがかりで、五つのふろしきをとぎ、一階ずつに分解された五重の塔をとりだしました。

見れば、床の間に安置してあるものと寸分ちがわないう五重の塔が、五つにわかれて、さんぜんとかがやいているのです。

「ウーム、よく似せたものだね。これじゃ、わしにも見分けがつかぬくらいだ。」

「でございましょう。外はしんちゅう板で作らせ、それに金めつきをさせました。中身は、重さをつくるために鉛にいたしました。これで、光沢こうたくといい、重さといい、ほんものと少しもちがいはいたしません。」

支配人はとくとくとして申します。

「それで、ほんものを床下ゆかしたにうずめ、にせもののほうを、床の間に飾っておくという、はかりごとだったね。」

「はい、さようで。そうしますれば、賊は、にせものと知らずにぬすみだし、さぞくやしがることとございましょう。にせものといつても、このとおり重いのでございしますから、ぬすみだすせつは、いかなる怪盗でもかけだすことはできません。その弱みにつけこんで、明智さんなり、警察の方なりに、ひとつらえていただくというわけでございます。」

「ウン、そういうけばうまいものだが、はたしてうまくいくものだろうか。」

大鳥氏は、まだ少しためらいがみえます。

「いや、それはもう大じょうぶでございします。どうかわたくしにおまかせくださいまし。かならず二十面相の裏をかい、アツとわけてお目にかけます。」

支配人は、もう怪盗をとらえたような鼻息です。

「よろしい。きみがそれまでに言うなら、いっさいまかせることにしよう。じゃ、ひとつ、そのにせものを、あのわくの中へつみあげてみようじゃないか。」

主人もやっとなつとくして、それからふたりがかりで、ほんものにとせものをとりかえました。

「おお、りっぱだ。形といい色つやといい、だれがこれをにせものと思うだろう。門野君、こりやうまくいきそうだね。」

大鳥氏は、わくの中につみあげられた、にせものの五重の塔をながめて、感じいったようにつぶやきました。この取りかえのさには、例の赤外線装置をとめて、ピストルが発射しないようにしておいたことは申すまでもありません。

「それじゃ、ほんもののほうを、ふたりで、すぐ床下にうずめることにしようじゃないか。」

今では、主人の大鳥氏も大のりきです。

ふたりは、できるだけ物音をたてないように注意しながら、部屋のまんなかの畳をめくり、その下の床板ゆかいたをとりはずしました。

「くわも、ちゃんと用意してまいりました。」

支配人は、最初にもちこんでおいた、長いふろしき包みをひらいて、一丁のくわをとりだしますと、いきなりしりはしりをして、床板の下の地面におり立ちました。

そのときです。ふたりが仕事にむちゅうになつて少しも気づかないでいるすきに、またしても板戸の一枚が、音もなくスツと細めにひらき、そこから見おぼえのある顔が、ソツと室内のようすをのぞきこんだではありませんか。あのかわいらしいお手伝い

さんです。謎の小娘です。

小娘は、しばらくふたりのようすをながめたうえ、また音もなく戸をしめて、立ちさってしまいました。それから五分ほどたつて、支配人の門野老人が、やっと穴を掘りおわたつたころ、とつぜん、家の裏手のほうから、おそろしいさげび声が聞こえてきました。

「火事だ。だれか来てくれえ。火事だ。」

店員の声です。

時も時、もう三十分もすれば、すっかりほんものの黄金塔をうずめることができようという、きわどいときに、このさわぎです。

「おい、たいへんだ、ともかく塔やくわを床下にかくして、畳を入れてしまおう。早く、早く。」

主人と支配人とは、力をあわせて塔の五つの部分を床下に投げこみ、床板をもとどおりにして、畳をしき、部屋には外からかぎをかけておいて、あわてふためいて、火事の現場へかけつけました。

裏庭へ出てみますと、庭のすみの物置き小屋から、さかんに火を吹いています。さいわい母屋からはなれた小さな板子屋ですから、付近に燃えうつるといふほどではありませんけれど、ほうつておいてはどんな大事にならぬともかぎりません。

大鳥氏は支配人とともに、店員を呼びあつめ、声をかぎりにさしずをして、やっと出火を消しとめることができました。かろうじて消防自動車の出勤をみなくてすんだのです。

その火事さわぎが、やや二十分ほどもつづきましたが、そのあいだに黄金の塔の部屋には、みょうなことがおこっていました。

主人をはじめ店員たちが、みんな火事場のほうへ行っているすきをめがけて、小さな人の姿が、かぎのかかった板戸をくもなくて、すべるように部屋の中へはいつていつたのです。

女学生のようなおさげのかわいらしい少女。いわずとした新参のお手伝いさんです。謎の少女です。

少女は黄金塔の部屋へはいつたまま、何をしているのか。しばらくのあいだ姿をあらわしませんでしたが、やがて、十分あまりもすると、板戸が音もなくひらいて、少女の姿が部屋をすべりだし、注意ぶかく戸をしめると、そのまま台所のほうへ立ちさってしまいました。

この謎の少女は、いったい何者でしょうか。手ぶらで部屋を出ていったところをみますと、塔をぬすみにはいつたものとも思われません。では、何をしにはいつたのでしょうか。読者諸君、ころみに想像してごらん下さい。

それはともかく、やがて、火事さわぎがずまると、大鳥氏と支配人は、大急ぎでもとの奥座敷に引きかえました。そして門野さんは、片はだぬぎになって、また畳をあげ、床板をはずし、くわを手にして床下におりたちました。

大鳥氏は、もしや、いまのさわぎのあいだに、だれかが、この部屋へはいつて、畳の下の黄金塔をぬすんで行きはしなかったかと、支配人が、床板をはずすのも、もどかしく、縁の下をのぞきこみましたが、黄金塔には、なんのべつじょうもなく、黒い土の上に、ピカピカ光っているのを見て、やっと安心しました。

やがて門野支配人は、黄金塔を床下の深い穴の中に、すっかりうめこんでしまいました。そして、床板も畳ももとのとおりにし

て、

「さあ、これでもう大じょうぶ。」

といわぬばかりに、主人の顔を見て、ニヤニヤと笑うのでした。こうして、ほんものの宝物は、まったく人目につかぬ場所へ、じつに手ぎわよくかくされてしまいました。

### 天井の声

もうこれで安心です。たとえ二十面相が予告どおりにやってきたとしても、黄金塔はまったく安全なのです。賊はとくいそうににせものをぬすみだしていくことでしょう。あの大泥棒をいっばい食わせてやるなんて、じつにゆかいではありませんか。

賊が床下などに気のつくはずはありませんが、でも、用心にこしたことはありません。大鳥氏はその晩から、ほんものの黄金塔のうずめであるあたりの畳の上に、ふとんをしかせてねむることにしました。風間も、その部屋から一步も外へ出ない決心です。すると、みょうなことに「3」の字がてのひらにあらわれて以来、数字の予告がパツタリととだえてしまいました。ほんとうは、それには深いわけがあったのですけれど、大鳥氏はそこまで気がつきません。ただふしぎに思うばかりです。

しかし、数字はあらわれなくても、盗難は二十五日の夜とはつきり言いわたされているのですから、けっして安心はできません。大鳥氏はそのあとの三日間を、塔のうずめである部屋にがんばりつづけました。

そして、とうとう二十五日の夜がきたのです。

もう宵のうちから、大鳥氏と門野支配人は、にせ黄金塔をかぎった座敷にすわりこんで、出入り口の板戸には中からかぎをかけてゆだんなく見張りをつづけていました。

店のほうでも、店員一同、今夜こそ二十面相がやってくるのだと、いつもより早く店をしめてしまつて、入り口という入り口にすっかりかぎをかけ、それぞれ持ち場をきめて、見はり番をするやら、こん棒片手に家中を巡回するやら、たいへんなさわぎでした。

いかな魔法使いの二十面相でも、このような二重三重の、げんじゅうな警戒の中へ、どうしてはいいつてくることができましよう。彼はこんどこそ失敗するにちがいありません。もし、この中へしのびこんで、にせ黄金塔にもまよわされず、ほんものの宝物をぬすむことができるのであれば、二十面相は、もう魔法使いどころではありません。神さまです。盗賊の神さまです。

警戒のうちに、だんだん夜がふけていきました。十時、十一時、十二時。表通りのざわめきも聞こえなくなり、家の中もシーンと静まりかえつてきました。ただ、ときどき、巡回する店員の足音が、廊下にシトシトと聞こえるばかりです。

奥の間では、大鳥氏と門野支配人が、さし向かいにすわつて、置き時計とにらめっこをしていました。

「門野君、ちようど十二時だよ。ハハハ……、とうとうやつこさんやつてこなかったね。十二時がすぎれば、もう二十六日だからね。約束の期限が切れるじゃないか。ハハハ……。」

大鳥氏はやっとなをなでおろして、笑い声をたてるのでした。

「さようございますね。さすがの二十面相も、このげんじゅう

な見はりには、かなわなかったとみえますね。ハハハ……、いいきみでございますよ。」

門野支配人も、怪盗をあざけるように笑いました。

ところが、ふたりの笑い声の消えるか消えないかに、とつじよとして、どこからともなく、異様なしわがれ声がひびいてきたではありませんか。

「おい、おい、まだ安心するのは早いぜ。二十面相の字引きには、不可能ということがないのをわすれたかね。」

それはじつになんともいえない陰気な、まるで墓場の中からでもひびいてくるような、いやあな感じの声でした。

「おい、門野君、きみいま何か言いやしなかったかい。」

大鳥氏はギョツとしたように、あたりを見まわしながら、しらがの支配人にたずねるのでした。

「いいえ、私じゃございません。しかし、なんだかへんな声が聞こえたようでございますね。」

門野老人は、げげんな声で、同じように左右を見まわしました。

「おい、へんだぜ。ゆだんしちゃいけないぜ。きみ、廊下を見てごらん。戸の外にだれかいるんじゃないかい。」

大鳥氏は、もうすっかり青ざめて、齒の根もあわぬありさまです。

門野支配人は、主人よりもいくらか勇気があるとみえ、さしておそれるようすもなく、立って行って、かぎで戸をひらき、外の廊下を見わたしました。

「だれもいやしません。おかしいですね。」

老人がそういって、戸をしめようとすると、またしても、どこ

からともなく、あのしわがれ声が聞こえてきました。

「なにをキョロキョロしているんだ、ここだよ。ここだよ。」

陰にこもって、まるで水の中からでも、ものをいつているような感じですよ。何かしらゾーツと総毛立つような、お化けじみた声音こわねです。

「やい、きさまはどこにいるんだ。いったい何者だッ。ここへ出てくるがいいじゃないか。」

門野老人が、から元気をだして、どことも知れぬ相手にどなりつけました。

「ウフフ……、どこにいると思うね。あててみたまえ……。だが、そんなことよりも、黄金塔は大じょうぶなのかね。二十面相は約束をたがえたりはしないはずだぜ。」

「何をいつているんだ。黄金塔はちゃんと床の間にかざつてあるじゃないか。盗賊なんか指一本ささせるものか。」

門野老人は部屋の中をむやみに歩きまわりながら、姿のない敵とわたりあいました。

「ウフフフ……、おい、おい、番頭さん、きみは二十面相が、それほどお人よしだと思つているのかい。床の間のはにせもので、ほんものは土の中にうめてあることぐらい、おれが知らないといでもないのかい。」

それを聞くと、大鳥氏と支配人とは、ゾツとして顔を見あわせました。ああ、怪盗は秘密を知つていたのです。門野老人のせつかくの苦心はなんの役にも立たなかったのです。

「おい、あの声は、どうやら天井裏らしいぜ。」

大鳥氏はふと気がついたように、支配人の腕をつかんで、ヒソ

ヒンとささやきました。

いかにも、そういえば、声は天井の方角からひびいてくるようです。天井でもなければ、ほかに人間ひとりかくれる場所なんて、どこにもないのです。

「はあ、そうかもしれません。この天井の上に、二十面相のやつがかくれているのかもしれない。」

支配人は、じっと天井を見あげて、ささやかえしました。

「早く、店の者を呼んでください。そしてかまわないから、天井板をはがして、泥棒をつかまえるようにいつつけてください。さ、早く、早く。」

大鳥氏は、両手で門野老人をおしやるようにしながら、せきたてるのです。老人はおされるままに、廊下に出て、店員たちを呼びあつめるために、店のほうへ急いでいきました。

やがて、三人のくつきょうな店員が、シャツ一枚の姿で、脚立きゃたつやこん棒などを持って、しのび足で、はいつてきました。相手にさとられぬよう、ふいに天井板をはがして、賊を手どりにしようというわけです。

門野老人の手まねのさしずにしたがつて、ひとりの店員がこん棒を両手ににぎりしめ、脚立の上に乗ったかと思うと、勢いこめて、ヤツとばかりに、天井板をつきあげました。

一つき、二つき、三つき、つづけざまにつきあげたものですか、天井板はメリメリという音をたててやぶれ、みるみる大きな穴があいてしまいました。

「さあ、これで照らしてみたまえ。」

支配人が懐中電燈をさしだしますと、脚立の上の店員は、それ

を受けとって、天井の穴から首をさし入れ、屋根裏のやみの中を、アチコチと見まわしました。

大鳥時計店は、大部分がコンクリート建ての洋館で、この座敷は、あとからべつに建てました一階建ての日本間でしたから、屋根裏といっても、さほど広いわけがなく、一目で全体が見わたせるのです。

「何もいませんよ。すみからすみまで電燈の光をあててみましたが、ネズミ一ぴきいやあしませんぜ。」

店員はそういって、失望したように脚立をおりました。

「そんなはずはないがなあ。わしが見てやろう。」

こんどは門野支配人が、電燈を持って、脚立にのぼり、天井裏をのぞきこみました。しかし、そのやみの中には、どこにも人間らしいものの姿はないのです。

「おかしいですね。たしかに、このへんから聞こえてきたのですか……。」

「いないのかい。」

大鳥氏がやや安堵あんどしたらしく、たずねます。

「ええ、まるつきりからつぽでございます。ほんとうにネズミ一ぴきいやあしません。」

賊の姿はどうとう発見することができませんでした。では、いったいあのぶきみな声は、どこからひびいてきたのでしょうか。むろん、縁の下ではありません。厚い畳の下の声が、あんなにすつきり聞こえるわけはないからです。

「……」

ああ、魔術師二十面相は、またしてもえたいのしれぬ魔法を使い

はじめたのです。

### 意外また意外

姿のない声が、ほんものの黄金塔のかくし場所を知っていると  
言ったものですから、大鳥氏は、もう気が気でなく、三人の店員  
たちをたちさらせますと、門野支配人とふたりで、大急ぎで畳を  
あげ、床板をはずし、それから、支配人にその土を掘ってみる  
ように命じました。

老人はしりほしりして、床下においてあつたくわを取り、心  
おぼえのある場所を掘りかえしていましたが、やがて、がっかり  
したような声で、

「だんなさま、ありません。塔は、あとかたもなく消えうせてし  
まいました。」

と報告するのです。

大鳥氏はそれを聞きますと、落胆のあまり、そこへしりもちを  
ついたまま、口をきく元気もなく、しばらくのあいだぼんやりと、  
床下のやみのなかをながめていましたが、やがて、ふしぎにたえ  
ぬもののように、小首をかたむけました。

「おい、門野君、どうもへんだぜ。わしはあれをここへうずめて  
からというもの、洗面所へ行くほかは、この部屋を少しも出な  
かった。もしだれかが、わしのるすのあいだに、ここへしのびこ  
んだとしても、たたみをあげ、床板をはずし、土を掘って、塔を持  
ちだすなんてよゆうは、まったくなかったはずだぜ。いったいあ  
いつは、どういう手段でぬすみだしやあがったのかなあ。」

大鳥氏はくやしいよりも、何よりも、ふしぎでたまらないとい  
うおももちです。

「わたくしも、今それを考えていたところでございます。あたり  
まえの家でしたら、庭のほうの縁がわの下から、床下へはいこむ  
という手もありますけれど、このお座敷の縁がわの下には、厚い  
板が打ちつけてございますからね。すきまはあっても、小犬でさ  
え通れないほどです。

それに、さいぜんからこの床下を、懐中電燈でしらべているの  
ですが、人間のはいこんだようなあとが、少しもありません。や  
わらかい土ですから、あいつが床をくぐってきたとしますれば、  
あとのつかないはずはないのですがねえ。」

門野支配人は、まるでキツネにでもつままれたような顔をして、  
大きなため息をつくのでした。

「ウフフフ……、びっくりしたかい。二十面相の腕まえは、まあ  
こんなもんさ。黄金塔はたしかにちょうだいしたぜ。それじゃ、  
あばよ。」

ああ、またしても、あの陰気な声がひびいてきたではありません  
んか。いったい二十面相はどこにいるのでしょうか。廊下でもあり  
ません。天井でもありません。床下でもありません。そのほかの、  
いったいどこに、人間ひとりかかれる場所があるのでしょうか。

ひよっとしたら、魔法使いの二十面相は、目に見えない気体の  
ようなものになって、部屋の中のどこかに、たたずんでいるので  
しょうか。

「門野君、やっぱりあいつはどっかにいるんだ。目には見えない  
けれど、この近くににいるにちがいないんだ。店の者にいつけて、

出入り口をかためさせなさい。早く、早く。そして、やつをとらえてしまふのだ。」

大鳥氏は支配人の耳に口をよせて、せかせかとささやきました。もうぶきみさよりは、腹だたしきでいっぱいなのです。どんなにしても、賊をとらえないではおかぬというけんまくです。

支配人も同じ考えとみえ、主人のいつけを聞きますと、すぐさま店のほうへとんでいって、表口、裏口の見はりをして、あやしいやつを見つけたら、大きな声をたてて人を集め、ひつとらえてしまふようにと、店員たちに命じました。

さあ、店内は上を下への大さわぎです。

「二十面相が家の中にいるんだ。見つけたして袋だたきにしちまへ。」

十数名の血気の店員たちは、手に手にこん棒と懐中電燈を持って、あるいは表口、裏口をかためるもの、あるいは隊を組んで、家中を家さがしするもの、それはそれは、たいへんなさわぎでした。

しかし、やや一時間ほど、店内のすみからすみまで、物置や押入れの中はもちろん、天井から縁の下まで、くまなくさがしまわりましたが、ふしぎなことに、賊らしい人の姿は、どこにも発見されませんでした。

二十面相は、もう、家の中にはいないのでしょうか。風をくらって、逃げだしてしまつたのでしょうか。では、どこから？ 表も裏も、出入り口という出入り口は、すっかり店員でかためられていたのですから、逃げだすなんて、まったく不可能なことです。「門野君、きみはどう思ふね。じつに合点のいかぬ話じゃないか。」

……わしにはなんだか今でも、すぐ目の前に、あいつがいるような気がするのだよ。この部屋の中に、あいつの息の音が聞こえるような気がするのだ。」

もとの座敷にもどつた大鳥氏は、おびえた顔で、あたりをキョロキョロと見まわしながら、支配人にささやくのでした。

「わたくしも、なんだか、そんな気がしてなりません。あいつは魔法使いでございますからなあ。」

門野支配人も同感のようです。

そうして、ふたりがぼんやりと顔見あわせているところへ、ひとりの若い店員がいそいそとはいってきて、

「今、明智探偵がおいでになりました。」と報じました。

「なに、明智さんが来られた。チェッ、おそすぎたよ。もう一足早ければまにあつたのに。あの人は、きょうまで、いったい何をしていたんだ。うわさに聞いたのとは大ちがいだ。名探偵もないもんだ。」

大鳥氏は黄金塔をぬすまれた腹だちまぎれに、さんざん探偵の悪口をいうのでした。

「ハハハ……、ひどくごきげんがお悪いようですね。あなたは、ぼくがきょうまで何もしていなかったとおっしゃるのですか。」

ひよいと見まわすと、部屋の入りに、いつのまにか黒い背広姿の明智小五郎が立っているのです。

「アッ、これは明智さん。どうもとんだことを聞かれましたなあ。しかし、あなたが何もしてくださらなかったのはほんとうですよ。ごらんなさい。黄金塔はぬすまれてしまつたじゃありませんか。」

大鳥氏は気まずそうに、にが笑いしながら言うのでした。

「ぬすまれたとおっしゃるのですか。」

「そうですよ。予告どおり、ちゃんとぬすまれてしまいましたよ。」

大鳥氏は腹だたしげに、門野支配人の考えだしたトリックの話をして、まだ畳をあげたままになってる床下を指さしながら、ほんものの黄金塔がなくなったしだいを語るのでした。

「それはぼくもよく知っています。」

明智探偵は、そんなことは、いままら説明を聞かなくても、わかっているといわぬばかりに、ぶっきらぼうに答えました。

「エッ、ごぞんじですって？ そ、それじゃ、あなたは、知っているながら、二十面相がぬすんでゆくのを、だまって待っていたのですか。」

大鳥氏はびっくりして、どなりかえしました。

「ええ、そうですよ。だまって見ていたのです。」

明智は、あくまで落ちつきはらっています。

「な、なんですって？ いったいぜんたい、あなたは……。」

大鳥氏は、あつけにとられて、口もきけないありさまです。

「明智先生、あなたはまるで黄金塔がぬすまれたのを、よろこんでいらつしやるように見えますが、それはあんまりです。あなたには主人にお約束なすったじゃありませんか。きつと黄金塔を守ってやると約束なすったじゃありませんか。」

門野支配人が、たまりかねたように、探偵の前につめよりました。

「でも、ぼくはお約束をはたしましたよ。」

「はたしたって？ それはいったいなんのことです。黄金塔はも

う、ぬすまれてしまったじゃありませんか。」

「ハハハ……、何をいっているのです。黄金塔はちゃんとここにあるじゃありませんか。ここにピカピカ光ってるじゃありませんか。」

明智探偵はさもゆかいらしく笑いながら、床の間に安置された黄金塔を指さしました。

「ば、ばかな、あなたこそ、何をいっているのです。それはせものだと、あれほど説明したじゃありませんか。ほんものは床下うめておいたのです。それがぬすまれてしまったのです。」

大鳥氏はかんしゃくをおこしてさげびました。

「まあ、お待ちなさい。もしもですね。その床下にうめたほうがにせもので、その床の間のがほんものだったら、どうでしょう。二十面相は裏をかいたつもりで、まんまとにせものをつかまされてしまったわけです。じつに痛快じゃありませんか。」

明智探偵は、みょうなことをいいました。

「エッ、エッ、なんですって？ じょうだんはいいかげんにしてください。その床の間の塔がほんものなら、なんにもこんなにさわぎやしません。これは、門野君が苦心をして作らせたにせものなんですよ。いくらピカピカ光っていたって、めつきなんですよ。」

「めつきかめつきでないか、ひとつよくしらべてもらいなさい。」  
明智はいいながら、木製のわくのかくしボタンを押して、赤外線防備装置をとめてから、むぞうさに塔の頂上の部分を持ちあげて、大鳥氏の目の前にさしました。

探偵のようすが、あまり自信ありげなものですから、大鳥氏もつい引きいれられて、その塔の一部分を受けとると、つくづくと

ながめはじめました。

ながめているうちに、みるみる、大鳥氏の顔色がかわってきました。青ざめていたほおに血の気がさしてきたのです。うつろになつていた目が、希望にかがやきはじめたのです。

「おお、おお、こりやどうだ。門野君、これはほんとうの金むくだよ。めつきじゃない。しんまでほんものの金だよ。いったいこれはどうしたというのだ。」

大鳥氏は喜びにふるえながら、床の間へとんでいって、塔の残りの部分を、入念にしらべましたが、長年、貴金属品をあつかっている同氏には、すぐさま、それがぜんぶ、ほんものの黄金であることがわかりました。

「明智さん、おっしゃるとおり、これはほんものですよ。ああ、助かった。二十面相はにせものをぬすんでいった。しかし、だれが、いつのまに、ほんものとにせものとを置きかえたのでしょうか。家にはこの秘密を知っているものはひとりもないはずだし、それに、この部屋には、たえず、わしががんばっていましたから、置きかえるなんてすきはなかつたはずですが……。」

「それは、ぼくが命じて置きかえさせたのですよ。」

明智探偵は、あいかわらず落ちつきはらって答えました。

「え、あなたが？ だれにそうお命じなすつたのです。」

大鳥氏は、意外につぐ意外に、ただもうあきれかえるばかりです。

「おたくには、つい近ごろ、やといいいれたお手伝いさんがいるでしょう。」

「ええ、います。あなたのご紹介でやとつた千代という娘のこ

とでしょう。」

「そうです。あの娘をちよつとここへよんでくださいませんか。」

「千代に、何かご用なのですか。」

「ええ、たいせつな用事があるのです。すぐ来るようにおっしゃってください。」

明智探偵は、ますますみようなことをいいたすのでした。

大鳥氏はめんくらいながら、すぐさま千代を呼びよせました。読者諸君はご記憶でしょう、千代というのは、たびたび奥座敷をのぞいていた、あのかわいらしい怪少女なのです。

まもなく、りんごのようにあでやかなほおをした、かわいらしいおさげの少女が、座敷の入り口にあらわれました。

「ここへきてすわりなさい。」

探偵は少女を自分のそばへすわらせました。そして、黄金塔、置きかえの説明をはじめたのでした。

「大鳥さん、あなたがたが、ほんものの塔を、床の下へうめようとしていらしたとき、裏の物置きに火事がおこりましたね。」

「ええ、そうですよ。よくごぞんじですね。しかし、それがどうしたのですか。」

「あの火事も、じつはぼくが、ある人に命じて、つけ火をさせたのですよ。」

「エッ、なんですか？ あなたがつけ火を？ ああ、わしは何がなんだか、さっぱりわからなくなりました。」

「いや、それには、ある目的があつたのです。あなたがたが火事に気をとられて、この部屋をるすになすっていたあいだに、すばやく黄金塔の置きかえをさせたのですよ。床下にかくしてあつた

のを、もどおり床の間につきあげ、床の間にせものを、床下へ入れておいたのです。火事場から帰ってこられたあなたがたは、まさか、あのあいだに、そんな入れかえがおこなわれたとは思いません。あのあいだに、そんな入れかえがおこなわれたとは思いません。あのあいだに、そんな入れかえがおこなわれたとは思いません。あもよらぬものですから、そのまま、にせもののほうを床下にうずめ、床の間のほんものをにせものと思ひこんでしまったのです。」

「へえー、なるほどねえ、あの火事は、わたしたちを、この部屋から立ちさらせるトリックだったのですか。しかし、それならそうと、ちょっとわしに言ってくだされればよかったです。それならせんか。何も火事までおこさなくても、わし自身で、ほんものにとせものを置きかえましたものを。」

大鳥氏は不満そうにいうのです。

「ところが、そうできない理由があったのです。そのことはあとで説明しますよ。」

「で、その塔の置きかえをやったというのは、いったいだれなのですね。まさかあなたご自身でなすったわけじゃありません。」

「それは、このお手伝いさんがやったのです。この人は、ぼくの助手をつとめてくれたのですよ。」

「へえー、千代がですか。こんなおとなしい女の子に、よくまあそんなことができましたねえ。」

主人はあつげにとられて、かわいらしい少女の顔をながめました。

「ハハハ……、千代は少女ではありませんよ。きみ、そのかつらを取ってお目かけなさい。」

探偵が命じますと、少女はにこにこしながら、いきなり両手で頭の毛をつかんだかと思うと、それをスッポリと引きむしってし

まいました。すると、その下から、ぼっちゃんがりの頭があらわれたのです。少女とばかりに思っていたのは、そのじつ、かわいらしい少年だったのです。

「みなさん、ご紹介します。これはぼくの片腕とたのむ探偵助手の小林英雄君です。こんどの事件が成功したのは、まったく小林君のおかげです。ほめてやってください。」

明智探偵はさもじまらしく、秘蔵弟子の小林少年をながめて、にこやかに笑うのでした。

ああ、なんとという意外でしょう。少年探偵団長小林英雄君は、小娘のお手伝いさんに化けて、大鳥時計店にはいりこんでいたのです。そして、まんまと二十面相にいっぱい食わせてしまったのです。

「へえー、おどろいたねえ、きみが男の子だったなんて、うちのものはだれひとり気がつかなかったのですよ。なかなかよくはたらくてくれましたね、いい人をお世話ねがったとよろこんでいたくらいですよ。小林さん、ありがとう。ありがとうございます。おかげで家宝をうしなわなくてすみましたよ。明智さん。あなたは、いいお弟子を持たれて、おしあわせですねえ。」

大鳥氏は、ホクホクとよろこびながら、小林君の頭をなでんばかりにして、お礼をいうのでした。

「ですが、明智さん、たった一つざんねんなことがありますよ。さいぜん二十面相のやつが、どこからか、わたしたちに話しかけたのです。ざまをみるといってあざわらったのです。あなたが、もう一足早く来てくだされば、あいつをとらえたかもしれませぬ。じつにざんねんなことをしましたよ。」

大鳥氏も、黄金塔をとりかえしても、賊を逃がしたのでは、後日またおそれはないかと、寝ざめが悪いのです。

「大鳥さん、ご安心ください。二十面相はちゃんととらえてありますよ。」

明智探偵は、意外なことをズバリといつてのけました。

「エッ、二十面相を？ あなたがとらえなすつたのですか。いつ？

どこで？ そして、今あいつはどこにいるんです。」

大鳥氏はあまりのことに、ことはもしどろもどろです。

「二十面相はこの部屋にいるのです。われわれの目の前にいるのです。」

探偵の声がおもしろくひびきました。

「へえ、この部屋に？ だって、この部屋にはごらんのとおり、わしたち四人のほかにはだれもいないじゃありませんか。それとも、どっかにかくれてでもいるんですかい。」

「いいえ、かくれてなんぞいませんよ。二十面相は、ほら、そこにいるじゃありませんか。」

いいながら、われらの名探偵は、意味ありげにニコニコと笑うのでした。

読者諸君、明智探偵はなんとという、とほうもないことをいいたしたのでしよう。大鳥氏も門野支配人も、自分の目がどうかしたのではないかと、キョロキョロとあたりを見まわしました。でも、その部屋には何者の姿もないのです。ああ、それではやっぱり、二十面相はあの魔術によって、気体のようなものに化けて、この部屋のどこかのすみなたたずんででもいるのでしょうか。そして、そのだれの目にも見えない怪物の姿が名探偵明智小五郎の目にだ

けは、はっきりうつっているのでしょうか。

きみが二十面相だ！

大鳥氏はびっくりして、キョロキョロと部屋の中を見まわしました。しかし、賊の姿などどこにも見あたりません。

「ハハハ……、ごじょうだんを。ここにはわしたち四人のほかには、だれもないじゃありませんか。」

いかにも、戸をしめきつた十畳の座敷には、主人の大鳥氏と、老支配人の門野と明智探偵と小林少年の四人のほかには、だれもいないのです。いったい明智は何をいつているのでしょうか。頭がどうかしているのではないのでしょうか。

「そうです。ここには、われわれ四人だけです。しかし、二十面相はやっぱりこの部屋にいるのです。」

「先生、あなたのおことは、わたくしどもにはさっぱりわけがわかりません。もつとくわしくおっしゃっていただけませんか。ございましょうか。」

しらがの老支配人は、オドオドしながら、探偵にたずねました。「ほう、あなたにもまだわからないのですか。で、あなたは二十面相がどこにいるか、ききたいとおっしゃるのですね。それを言ってもいいですか。」

明智は老支配人の顔をじつと見つめてから、意味ありげにいいました。

「エッ、なんとおっしゃいます?」

門野老人は、なぜかギョツとしたように探偵を見かえしました。

「だれが二十面相だか、すっぱぬいてもかまわないというのですか。」

明智の目に、電光のようなはげしい光がかがやき、グツと相手をにらみつけました。老支配人はその眼光に射すくめられでもしたように、返すことばもなく、思わず目を伏せました。

「ハハハ……、おい、二十面相、よくも化けたねえ。まるで六十の老人そっくりじゃないか。だが、ぼくの目をごまかすこととはできない。きみだ！ きみが二十面相だ！」

「と、とんでもない。そ、そんなばかなことが……。」

門野支配人はまっさおになつて、弁解しようとした。

主人の大鳥氏も、それにことばをそえます。

「明智先生、それは何かのお思いがちがいでしょう。この門野は親の代からわしの店につとめている律義者リチギモノです。この男が二十面相だなんて、そんなはずはございません。」

「いや、あなたは、二十面相が変装の大名人であることを、おわすれになつて居るのです。なるほど、ほんとうの門野君は律義な番頭さんでしょう。しかし、この男は門野君ではありません。あの予告があつてからまもなく、二十面相はほんとうの門野君をある場所に監禁して、自分が門野君に化けすまし、お店に出勤していたのです。」

いや、お店に出勤していたばかりではありません。門野君の自宅へも、ずうずうしく毎晩帰っていた。家族の人たちでさえ、それを少しも気づかなかつたのです。」

ああ、そんなことがありうるのでしょうか。今、目の前に立っている老人は、どう見ても門野支配人とそっくりです。どこに一

つ、あやしい個所はありません。いったい、それほどたくみな変装ができるのでしょうか。

一同があつけにとられて、明智探偵の顔を見つめている、ちょうどそのときでした。ああ、またしても、どこからともなく、あのおそろしい声が聞こえてきたではありませんか。

「フフフ……、明智先生も老いぼれたもんだねえ。二十面相をとりにがした苦しませに、何も知らない老人に罪を着せようなんて……。おい、先生、目をあけて、よく見るがよい。おれはここにいるんだぜ。二十面相はここにいるんだぜ。」

ああ、なんとという大胆不敵、賊はまだこの部屋のどこかにかくれているのでしょうか。

「先生、あれです。あれが二十面相です。やっぱり天井から聞こえてくる。ね、おわかりでしょう。門野君じゃございません。門野君は二十面相じゃございません。」

大鳥氏は、恐怖にたえぬもののように、ソツと天井を指さしながら、ささやくのでした。

しかし、明智探偵は少しもさわぎません。口をつぐんだまま、じつと大鳥氏を見かえしています。

と、とつじよとして、どこからともなく、まったく別の声がひびいてきました。

「おいおい、子どもだましはよしたまえ。」

ぼくが腹話術を知らないでも思っているのか。ハハハ……。」大鳥氏はそれを聞いて、ゾツとふるえあがつてしまいました。

ああ、なんとというふしぎなことでしょう。それはまぎれもなく明智探偵の声でした。天井から明智の声がひびいてきたのです。し

かも、当の探偵は目の前に、じつと口をつぐんですわっています。まるで魔法使いです。明智探偵が、とつじよとしてふたりになったとしか考えられないのです。

「おわかりになりましたか、ご主人。これが腹話術というものです。口を少しも動かさないでものをいう術です。今のようによくがこうして口をふさいでものをいうと、まるでちがった方角からのように聞こえてくるのです。天井と思えば天井のようでもあり、床下と思えば床下からのようにも聞こえます。おわかりになりましたか。」

今こそ、大鳥氏にもいっさいが明白になりました。腹話術というものがあることは、大鳥氏も話に聞いていました。さいぜんからの声が、みんな腹話術であったとすれば、すっかりつじつまがあるのです。天井や床下などをあれほどさがしても、二十面相の姿が発見されなかったわけが、よくわかるのです。それでは、やっぱり二十面相は門野老人に化けているのでしょうか。

大鳥氏はまだ半信半疑のまなざしで、じつと門野老人を見つめました。門野老人はまっさおになっています。しかし、まだへこたれたようすは見えません。顔いっばいにみょうなにが笑いをうかべて、何かいいだしました。

「腹話術ですって、おお、どうしてわたくしが、そんな魔法をぞんじておりました。明智先生、あんまりでございます。このわたくしがおそろしい二十面相の賊だなんて、まったく思いもよらぬ、ぬれぎぬでございます。」

ところが、この老人のことばが終わるか終わらぬに、部屋の板戸を、外からトントンとたたく音が聞こえてきました。

「だれだね。用事ならあとにしておくれ。今はいつて来ちゃいけない。」

大鳥氏が大声にどなりまると、板戸の外に意外な声が聞こえた。

「わたくしでございます。門野でございます。ちょっと、ここをおあけくださいませ。」

「エッ、門野だつて？ きみは、ほんとうに門野君か。」

大鳥氏は仰天して、あわただしく板戸をひらきました。すると、おお、ごらんない、そこにはまぎれもない門野支配人が、やつれた姿で立っていたではありませんか。

「だんなさま。じつに申しわけございません。賊のためにひどいめにあいまして、つい先ほど、明智先生に助けだしていただいたのでございます。」

門野老人はわびごとをしながら、部屋の中のもうひとりの門野を見つけ、思わずさげびました。

「アッ、あんたはいったい何者じゃ！」

なんとというふしぎな光景だったでしょう。いや、ふしぎというよりも、ゾーツと総毛立つような、なんともいえぬおそろしいありさまでした。そこには、まるで鏡に写したように、まったく同じ顔のふたりの老人が、敵意に燃える目でにらみあって、立ちはだかっていたのです。おそろしい夢にでもなされているような光景ではありませんか。

だれひとり、ものをいうものもなければ身動きするものもありません。数十秒のあいだ、映画の回転がとつぜん止まったような、ぶきみな静止と沈黙がつづきました。

その静けさをやぶったのは、五人のうちのどれかがはげしい勢いで動き出したのと、それから、少女の洋服を着ている小林少年が、

「アツ、先生、二十面相が！」

ときげぶ、けたたましい声とでありました。

さすがの二十面相も、ほんものの門野支配人があらわれては、もう運のつきでした。いかにあらそってみても勝ちみがないとさとしたのでしょうか。彼はやにわに畳をあげたままになっていた床下へとびおりました。そして、そこにかがんで何かしているなど思いうち、とつじよとして、まったく信じがたい奇怪事がおこったのです。

ふしぎ、ふしぎ、アツと思うまに、にせ支配人の姿が、まるで土の中へでも、もぐりこんだように、消えうせてしまいました。またしても、二十面相は魔法を使ったのでしょうか。彼はやはり、何かしら気体のようなものに化ける術をころえていたのでしょうか。

## 逃走

「ハハハ……、何もおどろくことはありませんよ。二十面相は土の下へ逃げたのです。」

明智小五郎は、少しもさわがず、あっけにとられている人々を見まわして、説明しました。

「エッ、土の中へ？ いったいそれはどういう意味です。」

大鳥氏がびっくりして聞きかえします。

「土の中に秘密のぬけ穴が掘ってあったのです。」

「エッ、ぬけ穴が？」

「そうですね。二十面相は黄金塔をぬすみだすために、あらかじめ、この床下へぬけ穴を掘っておいて、支配人に化けて、さも忠義顔に、あなたにほんものの塔を、この床下へうずめることをすすめたのです。そして、部下のものがぬけ穴からのんできて、ちょうどその穴の入り口にある塔を、なんのぞうさもなく持ちさったというわけですよ。賊の足あとが見あたらなかったのはあたりまえです。土の上を歩いたのではなく、土の中をはって来たのですからね。」

「しかし、わたしはあれを床下へうずめるのを見ておりましたが、べつにぬけ穴らしいものはなかったようですが。」

「それはふたがしてあったからですよ。ま、ま、ここへ来てよくごらんなさい。大きな鉄板てつばんで穴の上をふたして、土がかぶせてあったのです。今、二十面相はその鉄板をひらいて、穴の中にとびこんだのです。かき消すように見えなくなったのは、そのためですよ。」

大鳥氏も門野老人も小林少年も、急いでそばによって、床下をながめました。いかにもそこには一枚の鉄板が投げだしてあって、そのそばに古井戸のような大きな穴が、まっ黒な口をひらいていました。

「いったい、この穴はどこへつづいているのでしょうか。」

大鳥氏があきれはてたようにたずねますと、明智はそくぎに答えました。何かから何まで知りぬいているのです。

「この裏手にあき家があるでしょう。ぬけ穴はそのあき家の床へ

ぬけているのです。」

「では早く追いかけないと、逃げてしまうじゃありませんか。先生、早くそのあき家のほうへまわってください。」

大鳥氏は、もう気が気でないというふうしです。

「ハハハ……。そこにぬかりがあるものですか。そのあき家のぬけ穴の出口のところには、中村捜査係長の部下が、五人も見はりにしていますよ。今ごろあいつをひつとらえている時分です。」

「ああ、そうでしたか。よくそこまで準備ができましたねえ、ありがとう、ありがとう、おかげで、私も今夜からまくらを高くして寝られるというものです。」

大鳥氏は安堵の胸をなでおろして、名探偵のぬけめのない処置を感謝するのです。

しかし、二十面相は、明智の予想のとおり、はたして五名の警官に、逮捕されてしまったでしょうか。名にしおう魔術賊のことです。もしや、意外の悪知恵をはたらかせて、名探偵の計略の裏をかくようなことはないでしょうか。ああ、なんとなく心がかりではありませんか。

そのとき、やみのぬけ穴では、いったいどんなことがおこっていたのでしょうか。

門野老人に化けた二十面相は、人々のゆだんを見すまして、パツとぬけ穴の中にとびこみますと、せまい穴の中をほうようにして、まるでもぐらのようになかったようで、反対の出口へと急ぎました。

時計店の裏通りの、あき家というのは、奥座敷からは、せまい庭と塀とをへだててすぐのところにあるのですから、ぬけ穴の長

さは二十メートルほどしかありません。二十面相は、まずそのあき家を借りたうえ、部下に命じて、人に知られぬように、大急ぎでぬけ穴を掘らせたのです。ですから、内がわを石がきやレンガでぎくひまはなく、ちょうど旧式な炭坑のように、丸太のわくで、土の落ちるのをふせいであるという、みすばらしいぬけ穴です。広さも、やっとひとり、はって歩けるほどののです。

二十面相は、土まみれになって、そこをはっていきましたが、あき家の中の出口の下まで来て、ヒョイと外をのぞいたかと思うと、何かギョツとしたようすで首をひっこめてしまいました。

「ちくしょうめ、もう手がまわったか。」

彼は、いまいましうに舌打ちして、しかたなく、またあともどりはじめました。

穴の外の暗やみの中に、大せいの黒い人かげが見えたからです。しかも、それがみんな制服の警官らしく、制帽のひさしと拳銃のにぎり、やみの中にもかすかにピカピカと光って見えたのです。

ああ、二十面相はとうとう、袋のネズミになってしまいました。いや、穴の中のもぐらになってしまいました。さすがの凶賊も、もはや運のつきです。前に進めば五人の警官、うしろにもどれば、だれよりもこわい明智名探偵が待ちかまえているのです。進むこともしりぞくこともできません。といって、もぐらではない二十面相は、こんなジメジメした、まっくらな穴の中に、いつまでじっとしていられますよう。

しかし、なぜか怪盗はさしてこまったようすも見えません。彼はやみの中を、ぬけ穴の中ほどまで引きかえしますと、その壁のくぼみになった個所から、何かふろしき包みのようなものを、

とりだしました。

「へへん、どうだい。二十面相はどんなことがあったって、へこたれやしなないぞ。敵が五と出せばこちらは十だ。十と出せば二十だ。ここにこんな用意がしてあろうとは、さすがの名探偵のもの、ごぞんじあるまいて。二十面相の字引きに不可能の文字なしてっていうわけさ。フフフ……。」

彼は、そんなふてぶてしいひとりごとをいいながら、ふろしき包みらしいものをひらきました。すると、その中から、警官の制服制帽、警棒、靴などがあらわれました。

ああ、なんとという用心ぶかさでしょう。まんいちのばあいのために、彼はぬけ穴の中へ、こんな変装用の衣装をかくしておいたのです。

「おっと、わすれちゃいけない。まず髪の毛の染料と顔のしわを落とさなくっちゃあ。」

二十面相は、じょうだんのようにつぶやきながら、懐中から銀色のケースをとりだし、その中の揮発油きはつゆをしみこませた綿をちぎって頭と顔をていねいにふきとるのです。綿をちぎってはふき、ちぎってはふき、何度となくくりかえしているうちに、老人のしらが頭は、いつのまにか黒々とした頭髮となり、顔のしわもあとかたもなくとれて、若々しい青年にかわってしまいました。

「これでよしと、さあ、いよいよおまわりさんになるんだ。泥棒がおまわりさんに早がわりとござあい。」

二十面相は、きゅうくつな思いをして、やみの中の着がえをしながら、さもうれしくてたまらないというように、低く口笛さえ吹きはじめたのでした。

裏のあき家というのは、日本建ての商家でしたが、その奥座敷でも、ちょうど大鳥時計店の奥座敷と同じように、一枚の畳があげられ、床板がはずされ、その下に黒い土があらわれていました。その土のまんなか、ここには鉄板のふたなどなくて、ポツカリとぬけ穴の口が大きくひらいているのです。

ぬけ穴のまわりには、五名の制服警官が、あるいは床下に立ち、あるいは畳にこしかけ、あるいは座敷につっ立って、じっと見はりをつづけていました。むろん電燈はつけず、いざというときの用意には、中のふたりが懐中電燈をたずさえているのです。

「明智さんがもう少し早く、このぬけ穴を発見してくれたら、塔をぬすみだした手下のやつも、ひつとらえることができたんだがなあ。」

ひとりの警官が、ささやき声で、ざんねんそうにいいました。

「だが、二十面相さえとらえてしまえば、手下なんか一網打尽いちもうだじんだよ。それにぬすまれた塔はにせものだっていうじゃないか。ともかく親玉さえつかまえてしまえば、こつちのもんだ。ああ、早く出てこないかなあ。」

べつの警官が、腕をさすりながら、待ちどおしそうに答えるのです。

たばこをすうのもえんりよして、じっと暗やみの中に待っている待ちどおしさ。まるで時間が止まってしまったような感じですよ。

「おい、何か音がしたようだぜ。」

「エッ、どこに？」

思わず懐中電燈をつかんで立ちあがったことが、いく度あった

でしょう。

「なあんだ、ネズミじゃないか。」

当の二十面相は、いつまでたっても、姿をあらわさないのでした。

しかし、おお、こんどことは、人間です。人間が穴の中からはいだしてくる物音です。サラサラと土のくずれる音、ハツハツという息づかい、いよいよ二十面相がやってきたのです。

五名の警官はいっせいに立ちあがって、身がまえしました。二つの懐中電燈の丸い光が、左右からパツと穴の入り口を照らしました。

「おい、ぼくだよ、ぼくだよ。」

意外にも、穴をはいだしてきた人物が、したしそうな声をかけるではありませんか。

それは怪盗ではなくて、ひとりの若い警官だったのです。見知らぬ顔ですけれど、きつとこの区の警察署の警官なのでしょう。

「賊はどうしました。逃げたんですか。」

見はりをしていて警官のひとりが、ふしんそうにたずねました。

「いや、もうとらえました。明智さんの手引きで、ぼくの署のものが、しゅびよく逮捕したのです。あなたがたも早くあちらへ行ってください……。ぼくはこのぬけ穴の検分をおおせつかったのです。もしや同類がかくれてやしないかというのでね。しかし、だれもいなかったですよ。」

若い警官は、手錠をガチャガチャいわせながら、やっと穴をはいだして、五人の前に立ちました。

「なあんだ、もう逮捕したんだって?」

こちらは、せっかく意気こんだのにむだになったと知って、がっかりしてしまいました。いや、がっかりしたというよりも、他署のものに手がらをうばわれて、すくなくならず不平なのです。

「明智さんから、あなたがたに、もう見はりをしなくたっていいから、早くこちらへ来てくださいということでしたよ……。ぼくはちよっと、署まで用事がありますから、これで失敬します。」

若い警官はテキパキといって、暗やみの中を、グングンあき家の表口のほうへ歩いていきました。

とりのこされた五人の警官は、なんとなくふゆかいな気持ちで、きゆうに動く気にもなれず、

「なあんだ、つまらない。」

などとつぶやきながら、ぐずぐずしていましたが、やがて、その中のひとりが、ハツと気づいたようにさげびました。

「おい、へんだぜ。あの男、ぬけ穴の調査を命じられたといいながら、報告もしないで、署に帰るなんて、少しつじつまがあわないじゃないか。」

「そういえば、おかしいね。あいつ穴の中をしらべるのに、懐中電燈もつけていなかったじゃないか。」

警官たちは、なんとも形容のできない、みような不安におそわれはじめました。

「おい、二十面相というやつは、なんにだって化けるんだぜ。いつかは国立博物館長にさえ化けたんだ。もしや今のは……。」

「エッ、なんだって、それじゃ、あいつが二十面相だっていうのか。」

「おい、追っかけてみよう。もしそうだったら、ぼくらは係長に

あわす顔がないぜ。」

「よしッ、追っかける。ちくしょう逃がすものか。」

五人は、あわただしくあき家の入り口にかけだして、深夜の町を見わたしました。

「アッ、あすこを走っている。ためしによんでみようじゃないか。」  
そこで一同声をそろえて、

「オーイ、オーイ。」とどなったのですが、それを聞きつけた相手は、ヒョイとふりかえったかと思うと、立ちどまるどころか、まえにも増した勢いで、いちもくさんに逃げだしたではありませんか。

「アッ、やっぱりそうだ。あいつだ。あいつが二十面相だっ。」  
「ちくしょう、逃がすものか。」

五人はやにわに走りだしました。

もう一時をすぎた真夜中です。昼間はにぎやかな商店街も、廃墟のように静まりかえり、光とってはまばらに立ちならぶ街燈ばかり、人っ子ひとり通らないアスファルト道が、はるかにやみの中へ消えています。

その中を、逃げるひとりの警官、追いかける五人の警官、キツネにでもつままれたような奇妙な追跡がはじまりました。若い警官は、おそろしく足が早いのです。町かどに来るたび、あるいは右に、あるいは左に、めちやくちやに方角をかえて、追っ手をまこうとします。

そして、さしかかったのが、中央区内の、とある小公園の塀外でした。右がわは公園のコンクリート塀、左がわはすぐ川に面している、さびしい場所です。

二十面相は、そこまで走ってきますと、ヒョイと立ちどまって、うしろをふりかえりましたが、五人のおまわりさんはまだ町かどの向こうがわを走っているとみえて、追っ手らしい姿はどこにも見えません。

それをたしかめたうえ、二十面相は何を思ったのか、いきなりそこにうずくまって、地面に手をかけ、ウンとりきみますと、さしたわし五十センチほどの丸い鉄板が、ふたをひらくように持ちあがり、その下に大きな黒い穴があきました。水道のマンホールなのです。

東京の読者諸君は、水道の係りの人たちが、あの丸い鉄のふたをとって、地中へもぐりこんで、工事をしているのを、よくお見かけになるでしょう。今、二十面相は、その鉄のふたをひらいたのです。そして、ヒョイとそこへとびこむと、すばやく中から、ふたをもとのとおりにしめてしまいました。

鉄のふたがしまると、五人のおまわりさんが町かどをまがるのと、ほとんど同時でした。

「おや、へんだぞ。たしかにあいつはここをまがったんだが。」  
おまわりさんたちは立ちどまって、死んだように静まりかえった夜ふけの町を見わたしました。

「向こうのまがりかどまでは百メートル以上もあるんだから、そんなに早く姿が見えなくなるはずはない。塀を乗りこして、公園の中へかくれたんじゃないか。」

「それとも、川へとびこんだのかもしれないぜ。」

そんなことをいいかわして、おまわりさんたちは、注意ぶかく左右を見まわしながら、急ぎ足に例のマンホールの上を通りすぎ

て、公園の入り口のほうへ遠ざかっていきました。

マンホールの鉄ぶたは、五人の靴でふまれるたびに、ガンガンとにぶい響きをたてました。おまわりさんたちは、そうして、二十面相の頭の上を通りながら、少しもそれと気づかなかったのです。東京の人は、マンホールなどには、なれっこになっていて、そのうえを歩いて、気のつかぬことが多いのです。

五人の警官がしよげんとして大鳥時計店にたちかえり、事のしだいを明智に報告したのは、それから二十分ほどのちのことでした。

それを聞いて、明智探偵は失望したでしょうか。警官たちの失策にかんしゃくをおこしたでしょうか。いやいや、けっしてそうではありませんでした。読者諸君、ご安心ください。われわれの名探偵はこれしきの失敗に勇気をうしなうような人物ではありません。彼のすばらしい脳髓（のうすい）に、まだまだとっておきの奥の手が、ちゃんと用意されていたのです。

「いや、ご苦労でした。ぼくもあいつがぬけ穴の中に変装の衣装をかくしていようとは思もおよばなかった。しかし、諸君、失望なすることはありませんよ。こういうこともあろうかと、ぼくはちゃんと、もう一だん奥の用意がしてあるのです。

二十面相はしゅびよく逃げおせしたつもりでいても、まだぼくの張った網の中からのがれることができないのです。見ていてください。明朝までには、きっと諸君のかたきをとってあげますよ。

ほんとうをいえば、あいつが逃げてくれたのは思いつぽなのです。ぼくはゆかいでたまらないくらいです。なぜといって、そのぼくの奥の手というのは、じつにすばらしい手段なのですからね。

諸君、見ていてください。二十面相がどんなに泣きつらをするか。ぼくの部下たちが、どんなみごとなはたらきをするか。

さあ、小林君、二十面相の最後の舞台へ、急いで出かけるでしょう。」

名探偵はいつにかわらぬほがらかな笑顔をうかべて、愛弟子小林君をまねきました。そして、大鳥時計店をたちいでますと、そこに待たせてあった自動車に乗って、夜霧の中を、いずこともなく走りさったのであります。

さて、わたしたちは、もう一度、あの公園の前に立ちもどって、マンホールの中へかくれた二十面相が、どんなことをするか、それを見さだめなければなりません。

警官たちがたちさってしましますと、そのあたりはまた、ヒッソリともとの静けさにかえりました。深夜の二時です。人通りなどあるはずはありません。

遠くのほうから、犬の鳴き声が聞こえていましたが、それもしばらくしてやんでしまうと、この世から音というものがなくなってしまったような静けさです。

黒く夜空にそびえている公園の林のこずえが、風もないのにガサガサと動いたかと思うと、夜の鳥が、あやしい声で、ゲ、ゲ、と二声鳴きました。

空は一面にくもって、星もないやみ夜です。光といっては、ところどころの電柱にとりつけてある街燈ばかり。その街燈の一つが二十面相のかくれたマンホールの黒い鉄板の上を、うすぼんやりと照らしています。

でも、マンホールのふたは、いつまでたっても動かないのです。ああ、二十面相は、あの暗やみの土の中で、いったい何をしているのでしょうか。

長い長い二時間がすぎて、四時となりました。東の空がうっすらとしらみはじめています。遠い江東区こうとうくの空から、徹夜作業てつやぎょうの工場の汽笛が夜明けの近づいたことを知らせるように、もの悲しく、かすかにひびいてきました。

すると、街燈に照らされたマンホールのふたが、生きものでもあるかのように、少しずつ動きはじめました。やがて、鉄板はカタンとみぞをはずれて、ギリギリと地面を横へすべっていきます。そして、その下から、まっ黒な穴の口が、一センチ、二センチと、だんだん大きくひらいていくのです。

長いあいだかかって、鉄のふたはすっかりひらきました。すると、その丸い穴から、新しいネズミ色のソフト帽がニューツとあらわれてきたではありませんか。そして、そのつぎには、鼻の下に黒いひげをはやしたりっぱな青年紳士の顔、それからまっ白なソフト・カラー、はでなネクタイ、折り目の正しい上等の背広服と、胸のへんまで姿を見せて、その紳士は、注意ぶかくあたりを見まわしましたが、どこにも人かげのないのをたしかめると、パツと穴の中から地上にとびだし、すばやく鉄のふたをもとのとおりにしめて、そのまま何くわぬ顔で、歩きはじめました。

この青年紳士が怪盗二十面相の変装姿であったことは、申すまでもありません。ああ、なんとという用心ぶかいやり口でしょう。二十面相は、何か仕事をまくろみますと、まんいちのばあいのために、いつもその付近のマンホールの中へ、変装用の衣装をかく

しておくのです。そして、もし警官に追われるようなことがあれば、すばやく、そのマンホールの中へ身をかくし、まったくちがった顔と服装とになって、そしらぬ顔で逃げてしまうのです。

読者諸君のおうちの近所にも、マンホールがあることでしょうが、もしかすると、その中に、大きな黒いふろしき包みがかくしてあるかもしれませんよ。まんいちそんなふろしき包みが見つかるようなことがあれば、それは二十面相が、そのへんで何かおそろしいまくろみをしたしようこなのです。



さて、二十面相の青年紳士は、急ぎ足に近くの大通りへ出ますと、その駐車場にならんでいたいちばん前の自動車に近づき、居ねむりをしている運転手を呼びおこしました。

そして運転手がドアをひらくのを待ちかねて、客席へとびこみ、

早口に行く先をつけるのでした。

自動車は、ガランとした夜明けの町を、ひじょうな速力で走っています。銀座通りを出て、新橋をすぎ、環状線を品川へ、品川から京浜国道を、西に向かつて一キロほど、とある枝道を北へはいってしばらく行きますと、だんだん人家がまばらになり、まがりくねった坂道の向こうに、林につつまれた小さな丘があって、その上にポツンと一軒の古風な洋館が、建っているのがながめられました。

「よし、ここがいい。」

二十面相の青年紳士は、自動車をとめさせて、料金をはらいますと、そのまま丘の上へのぼっていき、木立ちをくぐって、洋館の玄関へはいってしまいました。

読者諸君、ここが二十面相のかくれがでした。賊はとうとう安全な巣くつへ逃げこんでしまったのです。では、明智探偵のせつかくの苦心も水のあわとなつたのでしょうか。二十面相は、かんに探偵の目をくらすことができたのでしょうか。

### 美術室の怪

二十面相がドアをあけて、玄関のホールに立ちますと、その音を聞きつけて、ひとりの部下が顔を出しました。頭の毛をモジヤモジヤにのばして、顔いちめん無精ひげのはえた、きたならしい洋服男です。

「お帰りなさい……。大成功ですね。」

部下の男はニヤニヤしながらいいました。何も知らないらしい

のです。

「大成功？ おやいや、何を寝ぼけているんだ。おれはマンホールの中で夜を明かしてきたんだぜ。近ごろにない大失敗さ。」

二十面相はおそろしいけんまくでどなりつけました。

「だって、黄金塔はちゃんと手にはいったじゃござんせんか。」

「黄金塔か、あんなもの、どっかへうっちゃっちゃまえ。おれたちは、にせものをつかまされたんだよ。またしても、明智のやつのおせっかいき、それに、こにくらしいのは、あの小林という小僧だ。お手伝いに化けたりして、チビのくせに、いやに知恵のまわる野郎だ。」

部下の男は、首領のやつあたりにはドモトしながら、

「いったいどうしたっていうんですか？ あっしや、まるでわけがわかりませんが。」

とふしん顔です。

「まあ、すんだことはどうだっていい。それより、おれはねむくってしかたがないんだ。何もかもねむってからのこと。それから、新規まきなおした。あーあ……。」

二十面相は大きなあくびをして、フラフラと廊下をたどり、奥まった寝室へはいってしまいました。

部下の男は、二十面相を送って、寝室の外まで来ましたが、中からドアがしまっても、そのうす暗い廊下に、長いあいだたたずんで、何か考えていました。

やや五分ほど、そうしてじっとしていますと、つかれきった

二十面相は、服も着かえないでベッドにころがったものとみえ、もうかすかないびきの音が聞こえてきました。

それを聞きますと、ひげむじやの部下は、なぜかニヤニヤと笑いながら、寢室の前を立ちさりましたが、ふたたび玄関に引きかえし、入り口のドアの外へ出て、向こうの林のしげみへ向かって、右手を二三度大きくふりうごかしました。なんだか、その林の中にかくれている人に、あいずでもしているようなかつこうです。夜が明けたばかりの、五時少しまえです。林の中は、まだゆうべのやみが残っているように、うす暗いのです。こんなに朝早くから、いったい何者が、そこにかくれているというのでしょうか。

ところが、部下の男が手をふったかと思うと、その林の下のしげった木の葉が、ガサガサと動いて、その間から、何かほの白い丸いものが、ぼんやりとあらわれました。うす暗いのでよくわかりませんが、どうやら人の顔のようにも思われます。

すると、建物の入口に立っている部下の男が、こんどは両手をまっすぐにのびして、左右にあげたりさげたり、鳥の羽ばたきのようなまねを、三度くりかえしました。

いよいよよへんです。この男はたしかに何か秘密のあいずをしているのです。相手は何者でしょう。二十面相の敵か味方か、それさえもはっきりわかりません。

その奇妙なあいずが終わりますと、こんどはいっそうふしぎなことがおこりました。今まで林のしげみの中にぼんやり見えていた、人の顔のようなものが、スツとかくれたかと思うと、まるで大きなけだものでも走っているように、木の葉がはげしくざわめき、何かしら黒い影が、木立ちの間を向こうのほうへ、とぶようにかけおりにいくのが見えました。

その黒い影はいったい何者だったのでしょう。そして、あのひ

げむじやの部下はなんのあいずをしたのでしょうか。

さて、お話は、それから七時間ほどたった、その日のお昼ごろのできごとにうつります。

そのころになって、寢室の二十面相はやっと目をさしました。じゅうぶんねむったものですから、ゆうべのつかれもすっかりとれて、いつもの快活な二十面相にもどっていました。まず浴室にはいって、さっぱりと顔を洗いますと、毎朝の習慣にしたがって、廊下の奥のかくし戸をひらいて、地底の美術室へと、おりてきました。

その洋館には広い地下室があつて、そこが怪盗の秘密の美術陳列室になっているのです。読者諸君もごぞんじのとおり、二十面相は、世間の悪漢のように、お金をぬすんだり、人を殺したり、傷つけたりはしないのです。ただいろいろな美術品をぬすみあつめるのが念願なのです。

以前の巣くつは、国立博物館事件のとき、明智探偵のために発見され、ぬすみあつめた宝物を、すっかりうばいかえされてしまいました。それから、二十面相は、また、おびただしい美術品をぬすみためて、この新しいかくれがの地下室に、秘密の宝庫をこしらえていたのです。

そこは二十畳敷きぐらいの広さで、地下室とは思われぬほど、りっぱな飾りつけをした部屋です。四ほうの壁には、日本画の掛け軸や、大小さまざまな西洋画の額などが、ところせましとかけてありますし、その下にはガラスばりの台がズツとならんでいて、目もまばゆい貴金属、寶石類の小美術品が陳列してあります。また、壁のところどころには、古い時代の木彫りの仏像が、つごう

十一体、れんげ台の上に安置されています。それらの美術品は、どれを見ても、みな由緒のある品ばかり、私設博物館といってもいいほどのりっぱさです。

地下室のことですから、窓というものがなく、わずかに、天井のすみに、厚いガラス張りの天窓のようなものがあり、そこからにぶい光がさしこんでいるばかりですから、美術室は昼間でも、夕方のようにうす暗いのです。

部屋の天井には、りっぱな装飾電燈がさがっていますけれど、二十面相は、新しい宝物を手に入れたときでもなければ、めつたに電燈をつけません。大寺院のお堂の中のような、おもおもしろいうす暗さが大すきだからです。そのうす暗い中ながめますと、古い絵や仏像がいつそう古めかしく尊く感じられるからです。

二十面相は、いま、その美術室のまんなかに立って、ぬすみためた宝物を、さも楽しそうに見まわしていました。

「フフン、明智先生、おれの裏をかいたと思って、得意になっているが、黄金塔がなんだ、あんなもの一つぐらいしくじったって、おれはこんなに宝物を集めているんだ。さすがの明智先生も、ここにこんなりっぱな美術室があるうとは、ごぞんじあるまいで、フフフ……。」

怪盗はひとりごとをいって、さもゆかいらしく笑うのでした。

二十面相は部屋のすみの一つの仏像の前に近づきました。

「じつによくできているなあ。なにしろ国宝だからね。まるで生きていようだ。」

そんなことをつぶやきながら、仏像の肩のへんをなでまわしていましたが、なにを思ったのか、ふと、その手をとめて、びっく

りしたように、しげしげと仏像の顔をのぞきこみました。

その仏像はいやになまあたかかったからです。あたたかいばかりでなく、からだかドキンキンと脈うっていたからです。まるで息でもしているように、胸のへんがふくれたりしぼんだりしていたからです。

いくら生きているような仏像だって、息をしたり、脈をうったりするはずありません。なんだかへんです。お化けみたいな感じです。

二十面相は、ふしぎそうな顔をして、その仏像の胸をたたいてみました。ところが、いつものようにコツコツという音がしないで、なんだかやわらかい手ごたえです。

たちまち、二十面相の頭に、サツと、ある考えがひらめきました。

「やいつ、きさま、だれだっ!」

彼はいきなり、おそろしい声で、仏像をどなりつけたのです。

すると、ああ、なんといいことでしょう。どなりつけられた仏像が、ムクムクと動きだしました。そして、まっ黒になったやぶれ衣の下から、ニューツとピストルの筒口があらわれ、ピツタリと怪盗の胸にねらいがさだめられたではありませんか。

「きさま、小林の小僧だなッ。」

二十面相は、すぐさまそれとさとりました。この手は以前に一度経験していたからです。

しかし、仏像は何も答えませんでした。無言のまま、左手をあげて、二十面相のうしろを指さしました。

そのようすがひどくぶきみだったものですから、怪盗は思わず

ヒョイト、うしろをふりむきましたが、すると、これはどうしたというのでしょうか。部屋中の仏像がみな、れんげ台の上で、むくむくと動きだしたではありませんか。そして、それらの仏像の右手には、どれもこれも、ピストルが光っているのです。十一体の仏像が、四ほうから、怪盗めがけて、ピストルのねらいをさだめているのです。

さすがの二十面相も、あまりのことに、アツと立ちすくんだまま、キョロキョロとあたりを見まわすばかりです。

「夢をみているんじゃないかしら。それともおれは気でもちがったのかしら。十一体の仏像が十一体とも、生きて動きだして、ピストルをつきつけるなんて、そんなばかなことが、ほんとうにおこるものかしら。」

二十面相は、頭の中がこんぐらかって、何がなんだかわけがわからなくなっていました。フラフラと目まいがして、今にもたおれそうな気持です。

「おや、どうかなすったのですかい。顔色がひどく悪いじゃございませぬか。」

とつぜん声が出て、けさのひげむじやの部下の男が、美術室へはいつてきました。

「ウン、少し、目まいがするんだ。おまえ、この仏像をよくしらべてみてくれ、おれにはなんだかみょうなものに見えるんだが……」。

二十面相は頭をかかえて、弱音をはきました。  
すると部下の男は、いきなり笑いだして、

「ハハハ……、仏さまが生きて動きだしたというんでしょう。天罰

ですぜ。二十面相に天罰がくだったんですぜ。」  
と、みょうなことをいいました。

「エッ、なんだって？」

「天罰だといっているんですよ。とうとう二十面相の運のつきが来たといっているんですよ。」

二十面相は、あつげにとられて相手の顔を見つめました。木彫りの仏像が動きだしたばかりでなく、信じきっていた部下までが、気でもちがったように、おそろしいことをいいたのです。いよいよ、何がなんだかわからなくなっていました。

「ハハハ……、おいおい、二十面相ともあるうものが、みつともないじゃないか、こんなことでびっくりするなんて。ハハハ……、まるでハトが豆鉄砲をくらったような顔だぜ。」

部下の男の声が、すっかりかわってしまいました。今までのしわがれ声が、たちまちよく通る美しい声にかわってしまったのです。

二十面相は、どうやらこの声に聞きおぼえがありました。ああ、ひよっとしたら、あいつじゃないかしら。きっとあいつだ。ちくしょうめ、あいつにちがいない。しかし、彼はおそろしくて、その名を口にだすこともできないのでした。

「ハハハ……、まだわからないかね。ぼくだよ。ぼくだよ。」

部下の男は、ほがらかに笑いながら、顔いちめんのつけひげを、皮をはぐようにめくりとりました。

すると、その下から、にこやかな青年紳士の顔があらわれてきたのです。

「アツ、きさま、明智小五郎！」

「そうだよ、ぼくも変装はまずくはないようだね。本家本元のきみをごまかすことができたんだからね。もっとも、けさは夜が明けたばかりで、まだうす暗かったし、この地下室も、ひどく暗いのだから、そんなにいばれたわけでもないがね。」

ああ、それは意外にもわれらの明智探偵だったのです。

二十面相は、一時はギョッと顔色をかえましたが、相手が化けものでもなんでもなく、明智探偵とわかりますと、さすがは怪人やがてだんだん落ちつきをとりもしました。

「で、おれをどうしようというのだね。探偵さん。」

彼ははにくにくしく言いながら、傍若無人に地下室の出口のほうへ歩いていこうとするのです。

「とらえようというのさ。」

探偵は二十面相の胸を、グイグイとおしもしました。

「で、いやだといえば？ 仏像どもがピストルをうつつというしかけかね。フフフ……、おどかしっこなしだぜ。」

怪盗は、たかをくくつて、なおも明智をおしのけようとします。

「いやだといえばこうするのさ！」

肉弾と肉弾とがはげしい勢いでもつれあつたかと思うと、おそろしい音をたてて、二十面相のからだか床の上に投げたおされてきました。背負い投げがみごとにきまつたのです。

二十面相は投げたおされたまま、あっけにとられたように、キョトンとしていました。明智探偵にこれほどの腕力があるうとは、今の今まで、夢にも知らなかったからです。

二十面相は少し柔道のころろえがあるだけに、段ちがいの相手の力量がはつきりわかるのです。そして、これではいくら手むか

いしてみても、とてもかなうはずはないときとりました。

「こんどこそはおれの負けだね。フフフ……、二十面相もみじめな最期をとげたもんさねえ。」

彼は、にが笑いをうかべながら、しぶしぶ立ちあがると、「さあ、どうでもしろ。」というように、明智探偵をにらみつけました。

## 大爆発

二十面相は、十一体の仏像のピストルにかこまれ、明智探偵の監視をうけながら、もうあきらめはてたように美術室の中を、フラフラと歩きました。

「ああ、せつかくの苦心も水のあわか。おれは何よりも、この美術品をうしなうのがつらいよ。明智君、武士のなざけだ。せめて名ごりをおしむあいだ、外の警官を呼ぶのを待ってくれたまえね。」

二十面相は、早くもそれをさとっていました。いかにも彼の推察すいさつしたとおり、この洋館の外は、数十人の警官隊によって、アリのはいでるすきもなく、ヒシヒシと四ほうからとりかこまれていたのです。

明智探偵も、怪人のしおらしいなげきには、いささかあわれをもよおしたのでしょうか。「さあ、ぞんぶんに名ごりをおしむがいい。」といわぬばかりに、じつともとの場所にたたずんだまま、腕組みをしています。

二十面相は、しおしおとして、部屋の中を歩きつもとどりつしていましたが、いつとはなしに明智探偵から遠ざかって、部屋の向

このすみにたどりつくと、いきなりそこへうずくまって、何か床板をゴトゴトとやっていました。とつぜん、ガタンというはげしい音がして、ハッと思うまに、彼の姿は、かき消すように見えなくなっていました。

ああ、これこそ賊の最後の切り札だったのです。美術室の下には、さらに一段深い地下の穴ぐらが用意してあったのです。二十面相は明智のゆだんを見すまして、すばやく穴ぐらのかくしぶたをひらき、その暗やみの中へころがりこんでしまったのです。

われらの名探偵は、またしても賊のためにまんまとはかられたのでしょうか。このどたん場まで追いつめながら、ついに二十面相をとりにがしてしまったのでしょうか。

読者諸君、ご安心ください。明智探偵は少しもさわぎませんでした。そして、さもゆかいそうにニコニコと笑っているのです。探偵はゆっくりその穴ぐらの上まで歩いていきますと、あいたままになっっている入り口をのぞきこんで、二十面相によびかけました。

「おいおい、二十面相君、きみは何を血まよったんだい。この穴ぐらをぼくが知らなかったでも思っているのかい。知らないどころか、ぼくはここをちゃんと牢屋ろうやに使っていたんだよ。よくそのへんを見てごらん。きみの三人の部下が、手足をしばられ、さるぐつわをはめられて、穴ぐらのそこいらがっているはずだぜ。その三人はぼくの仕事のじやまになったので、ゆうべからそこに引きこもってもらったのさ。その中にひとり、シャツ一枚のやつがいるだろう。ぼくが洋服を拝借したんだよ。そして、つけひげをして、お化粧をして、まんまときみの部下になりましたのさ。

ぼくはね、そいつが、大鳥時計店の例の地下道から、にせものの黄金塔をはこびだすのを尾行したんだぜ。そして、きみのかくれがをつきとめたってわけさ。ハハハ……。

二十面相君、きみはとんだところへ逃げこんだものだね。まるで、われとわが身を牢屋へとじこめたようなものじゃないか。その穴ぐらにはほかに出口なんてありやしない。つまり地の底の墓場のようなものさ。おかげできみをしばる手数がはぶけたというものだよ。ハハハ……。」

明智はさもおかしそうに笑いながら、十一体の仏像どものほうをふりむきました。

「小林君、もうここはいいから、みんなをつれて外へ出たまえ。そして、警官隊に、二十面相を引きとりにくるよう伝えてくれたまえ。」

それを聞きますと、將軍の号令でも受けたように、十一体の仏像は、サツとれんげ台をとびおりて、部屋へやの中央に整列しました。仏像が少年探偵団員のきばつな変装姿であったことは、読者諸君も、とつくにお察しになっただけでしょうね。

団員たちは、うらみかさなる二十面相の逮捕を、指をくわえて見ていることができなかつたのです。たとえ明智探偵の足手まといになろうとも、何か一役引きうけないでは、気がすまなかつたのです。

そこで、小林団長のいつかの知恵にならって、賊の美術室にちようど十一体の仏像があるのをさいわい、そのうす暗い地下室で、団員せんぶが仏像に化けばけ、にくい二十面相をゾツとさせる計略を思いました。そして小林少年を通じて、明智探偵にせがんだ

すえ、とうとうその念願をはたしたのです。

その夜明け、賊の部下に変装した明智探偵のあいずを受け、林の中をかけた黒い人かげは、ほかならぬ小林少年でした。小林君はそれからしばらくして、少年探偵団員を引きつれ、賊のかくれがにやってきたのでした。

十一体の仏像は正しく三列にならんで、明智探偵をみつめ、そろって拳手の礼をしたかとおもうと、

「明智先生、ばんざーい。少年探偵団、ばんざーい。」

と、かわいい声をはりあげてさげびました。そして、まわれ右をすると、小林少年を先頭に、奇妙な仏像の一群は、サーッと地下室をかけたしていったのです。

あとには、穴ぐらの入り口と、その底とで、名探偵と怪盗とのさし向かいでした。

「かわいい子どもたちだよ。あれらが、どれほど深くきみをにくんでいたと思う。それはおそろしいほどだったぜ。あたりまえならば、こんなところへ来させるものではないけれど、あまり熱心にせがまれるので、ぼくもいじらしくなつてね。それに、相手は紳士の二十面相君だ。血のきらいな美術愛好者だ。まさか危険もあるまいと、ついゆるしてしまつたのだが、あの子どもたちのおかげで、ぼくは、すっかりきみの機先を制することができた。仏像が動きだしたときの、きみの顔といったらなかつたぜ。ハハハ……、子どもだといつてばかにできないものだね。」

明智探偵は、警官隊が来るまでのあいだを、まるでしたい友だちにでもたいするよう、何かと話しかけるのでした。

「フフフ……、二十面相は紳士泥棒か。二十面相は血がきらいか。」

ありがたい信用をなくしたもんだな。しかしね、探偵さん、その信用もばあいによりけりだぜ。」

地底の暗やみから、二十面相の陰気な声が、すてばちのようにひびいてきました。

「ばあいによりけりとは？」

「たとえばさ……。今のようなばあいさ。つまり、おれはここでいくらじたばしたつて、もうのがれられっこはない。しかも、その頭の上には、知恵でも腕力でもともかなわなない敵がいるんだ。やつぎきにしてもあきたりないやつがいるんだ。」

「ハハハ……、そこできみとぼくと、真剣勝負をしようともいふのか。」

「今になって、そんなことがなんになる。この家はおまわりにかこまれているんだ。いや、そういううちにも、ここへおれをひつとらえに来るんだ。おれのいうのは、勝負をあらそうのじゃない。まあ早くいえばさしちがえだね。」

怪盗の声はいよいよ陰にこもつて、すごみをましてきました。

「え、さしちがえだつて？」

「そうだよ。おれは紳士泥棒だから、飛び道具も刃物も持つちやいない。だから、むかしの侍みたいなさしちがえをやるわけにはいかん。そのかわりにね、すばらしいことがあるんだ。ね、探偵さん、きみはとんでもない見おとしをやっているぜ。」

フフフ……、わかるまい。この穴ぐらの中にはね、二つ三つの洋酒のたるがころがっている。きみはそれを見たろうね。ところが、探偵さん。このたるの中には、いったい何がはいつていると思うね。」

フフフ……、おれはこういうこともあるかと、ちゃんとわが身のしまつを考えておいたんだ。きみはさつき、この穴ぐらを墓場だといったつけねえ。いかにも墓場だよ。おれは墓場と知ってころがりこんだのさ。骨も肉もみじんも残さず、ふっとんでしまふ墓場だぜ。

わかるかい。火薬だよ。このたるの中にはいっぱい火薬がつまってるのさ。

おれは刃物を持っていないけれど、マッチは持っているんだぜ。そいつをシュツとすって、たるの中に投げこめば、きみもおれも、たちまちこっぴみじんさ。フフフ……。」

そして、二十面相は、その火薬のつまっているというたるを、ゴロゴロと穴ぐらのまんなかへころがして、そのふたをとろうとしてるようすなのです。

さすがの名探偵も、これにはアツと声をたてないではいられませんでした。

「しまった。しまった。なぜあのたるの中をしらべて見なかったのだろう。」

くやんでも、いまさらしかたがありません。

いくらなんでも、二十面相の死の道づれになることはできないのです。名探偵には、まだまだ世の中のために、はたさなければならぬ仕事がある、山のようにあるのです。逃げるほかにてではありません。探偵の足が早い、賊が火薬のふたをあけ、火を点じるのが早い、命がけの競争です。

明智はパツととびあがると、まるで弾丸だんがんのように、地下室を走りぬけ、階段を三段ずつ一とびにかけあがって、洋館の玄関にか

けだしました。ドアをひらくと、出あいがしらに、十数名の制服警官が、二十面相逮捕のために、いま屋内にはいろいろとするところでした。

「いけない、賊は火薬に火をつけるのです。早くお逃げなさい。」探偵は警官たちをつきとばすようにして、林の中へ走りこみました。あつけにとられた警官たちも、「火薬」ということばに、きもをつぶして、同じように林の中へ。

「みんな、建物をはなれろ！ 爆発がおこるんだ。早く、逃げるんだ。」

建物の四ほうをとりまいていた警官隊は、そのただならぬさけび声に、みな丘のふもとへかけおりました。どうして、そんなよゆうがあったのか、あとになって考えてみると、ふしぎなほどでした。二十面相はたるのふたをあけるのにてまどつたのでしょうか。それともマッチがしめつけてでもいたのでしょうか。ちょうど人々が危険区域から遠ざかったころ、やっと爆発がおこりました。

それはまるで地震のような地ひびきでした。洋館ぜんたいが宙ちゅうてん天にふつとんだかとうたがわれるほどの大音響でした。でも、閉じていた目をおずおずとひらいてみると、賊のかくれがは、べつじょうなく目の前に立っていました。爆発はただ地下室から一階の床をつらぬいただけで、建物の外部には、なんの異状もないのでした。

しかし、やがて、一階の窓から、黒い煙がムクムクと吹きだしはじめました。そして、それがだんだん濃くなって、建物をつつみはじめるところには、まっ赤なかえんが、まるで巨大な魔物の舌のように、どの窓からも、メラメラとたちのぼり、みるみる建物

ぜんたいが火のかたまりとなってしまいました。

このようにして、二十面相はさいごをとげたのでした。

火災が終わってから、焼けあとのとりしらべがおこなわれたのは申すまでもありません。しかし、二十面相がいったとおり、肉も骨もこっばみじんにくだけ散ってしまったのか、ふしぎなことに怪盗の死がいもちろん、三人の部下の死がいも、まったく、発見することができませんでした。